

奇譚クラス

奇譚クラス

12

KITAN CLUB

12



「たそがれ」



「たそがれ」

別冊奇譚クレス 五百円 限定版 特別号

第一グラビヤ	第二グラビヤ
大妻きしヨ 四方 清美 鬼道の顔 花本 京子 耐舌のハシゴ 山崎 初子 墓地に揺れる娘 山崎 初子 迫り来る洗脚 山崎 初子 木立ちの中の囚女 山崎 初子 煙に咲いた風 山崎 初子 非情の煙 山崎 初子	黒皮の辛島 山崎 初子 ゴム紐との戯れ 山崎 初子 受難の魔眼 山崎 初子 安形舞踏 山崎 初子 消えぬ灯 山崎 初子 森の精 山崎 初子 強まりゆく痛覚 山崎 初子 迫り来る羞恥 山崎 初子



- 第一口絵**
- 大妻きしヨ
 - 鬼道の顔
 - 耐舌のハシゴ
 - 墓地に揺れる娘
 - 迫り来る洗脚
 - 木立ちの中の囚女
 - 煙に咲いた風
 - 非情の煙
 - 黒皮の辛島
 - ゴム紐との戯れ
 - 受難の魔眼
 - 安形舞踏
 - 消えぬ灯
 - 森の精
 - 強まりゆく痛覚
 - 迫り来る羞恥
- 第二口絵**
- 25 妻という名の犬
 - 26 祖上のいけにえ
 - 27 狙われる美因
 - 28 車中のもがき
 - 29 露みじられる女
 - 30 ハンモック椅子
 - 31 耐舌の座褥
 - 32 煙燻と煙肌

お申込先
 大阪市阿倍野郵便局
 私書面第十四号
 天 皇 社
 振替口座 大阪五〇〇四二番

絢を競う艶姿115ポーズ

限定版特別号 第三弾!
 『緊縛写真グラフィック集』
 特価五百円 略号「グラフ」
 表紙三度刷、内容グラフィック印刷
 画題「縛り人形」 絹川文代 花坂道子

巻頭裸身緊縛一頁大扉
 ながしめ 絹川文代
 荒縄全裸緊縛 大塚啓子
 落ちた腰巻九態(野外) 絹川文代
 円い乳房 愛川悦子
 浴室におびえて九態 絹川文代
 恍惚境 悦慮の末 絹川文代
 いためられた乳房 桜井葉子
 耐えられる 桜井葉子
 月経帯の強制 二態 大塚啓子
 手吊りと逆手吊り五態 大塚啓子
 全裸悦慮 大塚啓子
 白痴美の誘惑 大塚啓子
 はねかえす縄 大塚啓子
 うろうろ許して 大塚啓子
 雪白の肌は縄にまみれて 大塚啓子
 六態 絹川文代
 優姿ハダカ縛り 絹川文代
 忘却の彼方 絹川文代



◎豪華な内容とモデル陣◎

股間縛り背正面二態 絹川文代
 捕われの麗人二態 絹川文代
 湯責め二態 大塚啓子
 浴室にて責める四態 大塚啓子
 何にしようと言うの 桜井葉子
 新人鬱鬱集八景 桜井葉子
 いじめぬく二態 絹川文代
 メンスバンドの猿轡 絹川文代
 観念横臥の四二態 絹川文代
 変形手足しぼり四態 愛川悦子
 裸身をさらして六態 愛川悦子
 豊満くらべ 九態 桜井葉子
 亀甲縛り正背面二態 愛川悦子
 亀甲縛り正背面二態 大塚啓子
 怨めしき縄目二態 大塚啓子
 後手首腰縄 四態 大塚啓子
 新人緊縛ポーズ集八態 桜井葉子
 隅から隅まで四態 愛川悦子
 鏡面万華模様(裏表) 愛川悦子
 四十項目 百十五ポーズ

限定版特別号、第一弾! 『緊縛フォトアラベスク』 略号(あらべすく) 特価 五百円 △収載内容V二十六項目、写真七十七葉

- 鏡 愛川悦子
 - 銘花二輪 花坂道子
 - 鉄鎖 大塚啓子
 - 諦観 大塚啓子
 - 庭園にて 絹川文代
 - 謎の微笑 田中芳代
 - 田中悠子表情集(一)
 - 誇る脚線美 田中悠子
 - この足どうかしら 田中悠子
 - 裏と表と 愛川悦子
 - 落陽の丘 愛川悦子
 - ポリウムの花園 大塚啓子
 - 緊縛美の鏡 大塚啓子
 - 龜甲縛り 愛川悦子
 - 吊責折檻 村井知可子
 - 立木縛り 村井知可子
 - 豊 愛川悦子
 - 乱れ髪三景 大塚啓子
 - 椅子と絨緞 愛川悦子
 - 組上の美鯉 絹川文代
 - 26 祖上のいけにえ
 - 27 狙われる美因
 - 28 車中のもがき
 - 29 露みじられる女
 - 30 ハンモック椅子
 - 31 耐舌の座褥
 - 32 煙燻と煙肌
- 限定版特別号第一集として、最近撮影の新人モデルの各種緊縛ポーズを網羅し、文字通り表紙から裏表紙に至るまで、可憐なモデル嬢の緊縛姿態にて埋めました。
 (限定版特別号は一切書店売りを致しませんから、直接発行所宛お申込み願います)





奇譚クラブ (第十五号 第十二号) 目次

目次表 川柳「情緒日本調」……佐保忍・作 滝れい子・画
戯画「獣人街の競り市」……南村俊平・画

第一グラビヤ

緊縛美の祭典……構成・塚本鉄三
揺れる女体……モデル……梨花悠紀子
喘えぐ猿轡……モデル……絹川 文代
組写真縛り過程の変化……モデル……大塚 啓子
宙に耐える……モデル……梨花悠紀子

第一口絵

雨中の折檻……滝 れい子・画
カラス蛇の鼻責……四馬 孝・画
高慢な鼻を灼く……四馬 孝・画
奇怪な湯浴み場……牧 高志・案 滝れい子・画
マゾ 画廊……春川ナミオ・画
「スベリ台」「ブランコ」……滝 れい子・画
アクロバット・ダンサー……

ニグラビヤ

美しき女囚吊り……回転する囚衣
白 肌 供 養……M組写真強制される法悦境
マゾ・モデル募集……女体切腹擬態ポーズ
几帳のかけで……春日ルミ女史尻敷きブレイ

第二口絵

緊縛フォト撮影の実際
前手縛り縄抜けの一例……塚本鉄三

千草氏の論理……宇宙人……60
告白「賈医者」……渡部かね……62
女斗美能巻シリーズ第6「引落し」……雪崎京人……69
体験告白 黒いコート……宇野 一……70
思い出すことどもー切腹研究夜話……中康弘通……76
奇譚二十九夜物語(第九夜)……辻村 隆……80
「マゾヒストの夢幻小説奴隷哀歌」……獅子鼻 明……94
わが身を灼く屈辱感(愛好家の記録)……とよま・かづひこ……100
創作「ミシンを踏む女」……二条卓史……102
色別頁読者通信の女性を縛る
「ひろ子緊縛記」……辻村 隆……107
女性の切腹 凶札式……牧 奇 咲……123
マゾヒズム通信 馬と女性……篠 良 人……126
おむつカバー……試作室レポート……関根 彰……140
創作 老画家の手紙……榎本秀彦……144
女形の想い出 仮装の一夜……阪東秀美……154
平家の馬場秘聞……桂 牧次郎……160

奇クサロン

泥中の蓮たれ……灸資フオト思い就くまま
絵画と写真のアイデア……蓮作「少女」お勉強室で
告白 私の好きなネル……倒錯のための倒錯行為
写真 私の切腹……あるカメラマンの自伝
蓮作「少女」取調へ……まぞ川橋 花嫁の靴
お尻 頰 歌……サドと呼ばれる出戻り娘
緊縛の宣伝マッチ……五人の娘
私の貴族 胴吊りの女……甘美なロマンの極致
続「解剖」について……女装ということ
身分倒錯と逆転趣味……女性の縛と股間縛り
ゴミ捨て場のBG……空想虫責め(蜜蜂)
読者サロン 読者の声……男の真利 裸女とコーヒ

連載小説 宇宙のどこかで……佐治麻造……187
淀陽雑記ー私の淀陽ー……北沢 操……202
日本アマゾン記「遠淡海」……二俣志津子……206
セミ・フィクション 旅と女と縄と……南方佳男……216
続・白足袋のこと……木下明美……223
梨花悠紀子と猿轡……藤本 久……226
体験小説 愛のブレイ……志麻謙二……228
色別頁「嫉妬夜叉」……杉原虹児……235
読者通信……243

川柳情緒 日本調

襟 えり

あしのおくれ毛に 薔木のしへ

太腿 ふともも

緋 ひ

縮緬 ちりめん

白い素足に

素 す

直佐保 忍心作
淹れの子画

な

がし目でも ところかす

ふ

りあ げるムナの

美

しき ねんしき

極まれり



美しき女囚吊り







衣 囚 す る 回 転









白肌供養





M
フ
オ
ト
組
寫
眞

強
制
さ
れ
る
法
悦
境

『マゾ・モデル募集』



〈出演している男性モデルは応募した読者です〉

女体切腹擬態ポーズ





几帳の
かげで



春日ルミ女史

尻敷きのプレイ





制服のめしうど





ネットの麗人





雨 中 の 打 檻

「あんたが、うちの人に囲れているんだってね。骨の髄まで打ちのめしてやるから、そう覚悟するんだね」



カラス蛇の鼻責

「この蛇は見世物小屋で飼い馴したカラス蛇だから、俺の言うことだったら、
何んでもきくんだよ」

高慢な鼻を灼く

「この美しい鼻を、ホラ、じりじりと灼いてやる。二度と人に見せられんような顔にしてやるからナ」





【解説】 江戸を離れること西へ三十里、名勝景雲山の麓に俗称河童力湯という噴泉場があった。婦人病に卓効ありとて、芸妓、人妻、娘などで賑った。斎戒沐浴一切の世話は男まさりの老婆一人。いずれも湯文字一枚のまゝ、両手を厳しく縛り上げられた。



奇 怪 な 湯 ・ 浴 み 場

(心身を浄めるには御錠に従い
厳しい縛りを強要された)

牧 高 志 案 ・ 滝 れ い 子 画



『スベリ台』

〈春川ナミオ・マゾ画廊〉



『 ブ ラ ン コ 』

〈 春 川 ナ ミ オ ・ マ ゾ 画 廊 〉

アクロバット・ダンサー

深夜のサーカス小屋の怪。ピエロとグラマーガールの白い肌がサーカス小屋の闇の中に、くっきりと浮かぶ。



緊縛美の祭典

構成 塚本鉄三



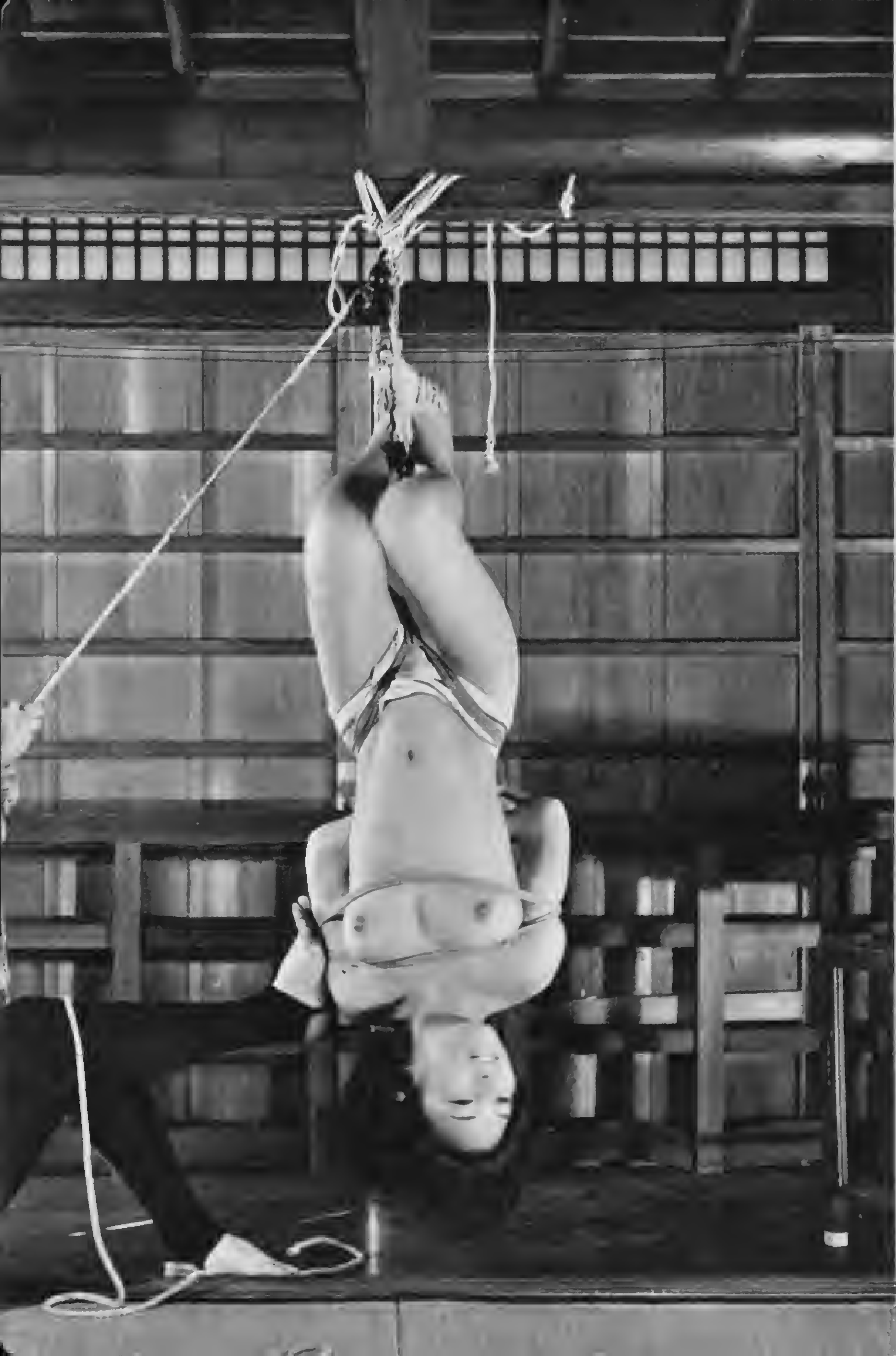




梨花悠紀子

揺れる女体







喘えぐ猿轡





組寫眞

縛り過程の変化













宙に耐える

梨花悠紀子





緊縛フォト撮影の実際

— 前手縛り縄抜けの一例 —

塚 本 鉄 三



撮影の要領

- モデル 大塚 啓子
- 撮 影 塚本 鉄三
- カメラ アサヒペンタックス S 2
- レンズ タクマー— 83 ミリ、F 1.9
- フィルム ネオパン S S
- 現像液 D K 20 及 D 72
- 印画紙 シーガル F 2
- 照明用具 ウエスト・フラッド
- ランプ三〇〇W三個、クリップ三個、他にコード若干、三つ又等
- 小道具 白綿ロープ二本
- 場 所 洋間応接室

縄抜けのプレイ

ベテランのモデルの中には、予定の撮影プランが終了したときなど、面白いプレイの提案をすることがある。

「この縄で貴方が思いきり私を縛りあげてもいいわ。私、五分間で解いてみせる」

となると、男性たるもの、誰でも「よし」とばかり手に唾して張りきるから妙である。どのように厳しく縛ってもよい、というのだから、世のサド公爵諸公にとっては、いまや垂涎の余興であるといつてよい。

しかし、このプレイにも、一定のルールが



ある。先ず縛り用の縄は、何米のものを何本と制限する必要がある。これは縛者の方の制限であるが、次に被縛者の方には、完全に解き終るまでの時間、これが制限になる。

例えば、五米の縄一本——という条件だったら、この縄を用いて、どのような縛り方をしてもよい。(但し縛りはじめから終るまで

の時間をきめておくのもよいだろう)被縛者の方は、きめられた時間、例えば五分以内とか、十分以内とかに、他人の手を借りずに縄を完全に解いてしまはなければならない。五米の縄を四分で解けた——といった記録もつくることが出来る、

嘗て或るマゾがかった女性の告白によれば

あるだけの縄を無制限に使って、ガンジガラメに縛り上げられたのを、一と晩中かかって解いたということだが、このプレイにも、いろいろと変った条件が想定される。

タイル張りの浴室を用いて、縛り上げたあとで水又は湯を掛けて縄を濡らす、という手もある。縄は濡れるとよく締まり、そして非常に結び目が固くなって解けにくい。更に、全身に石鹸を塗りたくって、泡を立てておくと、縄を解こうとして、もがくたびに、つると滑って、さぞ面白いことになりそうである。

その他、ソファ——の上、とかいう具合に狭い場所に制限するのも一考である。被縛者が恋人とか愛妻という場合は、エバーソフトの上とか、スプリング・クッションの上とかで、この縄抜けのプレイを行うのも面白い。

もし、成金の紳士がいて、このような余興を芸者達を集めてやったら、さぞ賑やかなことだろう。この際は大板の懸賞金をもって彼女達を釣ることは勿論である。最初は誰でも一応尻込みするだろうが、誰か一人皮切りをやって懸賞金をたんまり、せしめたりなんかすると、欲と好奇心にかられて、私も私もと希望者が続出、二組、三組、あちらこちらで

競争させたら、さぞ大笑いとなるだろう。

なまじっか裸にして縛り上げたりするよりも、和服（余り盛装でなくてよい。但し、あとで損料を払ってやるつもりなら、訪問着なんか着せてもよいが、普段着で結構）での方が縄を解こうとして暴れる度に、だんだん乱れてくるところに興がある、こういった場面を8ミリに撮影した映画を一度見たことがあるが、なんとかして時間以内に解いて懸賞金を貰おうと必死の努力をするところなど、男性より、むしろ女性の方が、あられもなき真面目さを発揮して真剣である。

8ミリで思い出したが、緊縛映画としては逃げまわるのを（勿論、真剣に演技して貰わないと興ざめだが）捕えて、無理矢理縛り上げてゆく、といったプロセスも鑑賞価値はあるが、なんとかして自分だけの力で縄を抜くようにともがくあたり、シャッターをきる値打ちは十二分にありそうだ、劇映画のワン・カットで、そういうシーンに時々出くわすが、多くは、ほんの二、三秒の間の擦過であるため、それ自体迫力のあるものではない。

しかし、縄抜け自体にポイントを置いた映画でも、主演者の演技が拙かったり指導がうまくゆかなかった場合は、恰好の被字体であ



るにも拘らず、全く熱のこもらない失敗作を生み出すことが多い。私もそういう失敗作の二三を見る機会を得たが、そんな映画なら、むしろ、スチール写真を組んだ方がアラが見えないでよいかもしれない。

撮影の実際

愛敬者のモデル大塚啓子が、自分から縄抜けをやってみようと言い出して、興味本位に写してみた時の写真がこれである。

最初から、こういう組写真として誌上に使用するという意図は持っていなかった。彼女の申出で、それでは、やってみようか、という軽い気持で初めたものである。撮影枚数も



下のまま上り、手持ちで撮影することにしてモデルを椅子に配する。

先ず緊縛方法だが、一本の白の綿ロープをもって、写真のように、二の腕と胸（乳房の上）、肘と腹（乳房の下）の二カ所を括る、両手は前で組ませて手首をきっちり縛り余った縄で膝頭に固定した。

縛りは後手、高手小手——と云われるように後手に手首を括るのが定石のようになっていたし、又、多くのマニヤの好みも、後手縛りに統一されているようである。

それなのに、今回はなぜ前手縛りにしたのか？という疑問は当然起ってくる。答えは簡単である。理由も理屈もなしに、彼女がそう望んだからである。自分から、縄抜けをやってみるといい出した彼女ではあったが、最初のことではあるし、一抹の不安を感じたのかもしれない。やはり、自分の眼の前に見えている「前手縛り」の方が、自分から解いてゆくにしても、安心感があったのだろう。そう私は想像する。

だから、彼女が、「どんなに厳しく縛ってもいいわ、そのかわり、前手縛りにして——」

といったとき、よしよしと承知した。前手

ここに発表した八枚の倍ぐらいしか撮っていない。

もし純然たるプレイに終始した縄抜け遊戯の際でも、事情が許せば、小型カメラの早いシャッターで撮影すれば、主人公も少しは張り合いがあるだろう。戸外の芝生なんかで太陽光線を十分利用できれば上々である。大き

な邸宅でプールがあるようなところなどではプール・サイドは恰好の写場である。

さて、今回の撮影は室内で、しかも、ライトは三〇〇ワットのランプが三個である。露出計で光量を計って、ライトの位置を固定しカメラは、50分の1秒にF4と絞る。

室内のヒケが十分でないので、机の上に靴



縛りでもいい、パンツ一枚の彼女が、自分の目の前で、どのようにして縄を抜けてゆくだろうかということに興味を持った。

彼女にしても、私がある過程のカット、カットを選んでスナップしてゆくという観点に自分の縄を抜こうと努力する姿を見守っているのではないといった気易さがあつたらうし

私も、前記のような興味を抱きながらも、如何にも、写真を撮ることにばかり熱中しているといった姿勢をとっていた。

縛り終えた彼女を、ソファアに座らせると先ず、そのポーズで第一枚目のシャッターを切った。

「さあ、カメラを意識せずに、出来るだけ早

く縄を解いてみるんだ。私の方はいいポーズを狙ってシャッターを切ってゆくからナ、それ、スタート」

私は第一枚目のフィルムを送って、シャッターのセットをすると、ファインダーを覗いた。彼女は私の合図と同時に活動を開始して先ず、手首を動かして、膝頭の縄をゆるめにかかった。彼女の動きが激しいので、つられて、私は、続けさまに三回シャッターを切っていた。ワンハンドで撮影動作に移れるのである。このような連続撮影のときには、迅速にやれる強味がある。しかし、この時私は、余り大きな変化のないポーズを続けてキヤッチしたことに気がつき、ここで一呼吸いれて、ファインダーから目を離した。

彼女は歯を喰いしばって、両肩を揺すりながら手首を左右に振った。両足をバタバタさせて膝頭のロープを次第にゆるめた。盛んに動いている手首、私は流れても、かえって動感があるだろうと、そこを狙ってシャッターを切った。二分半位が経つたらうか。

ファインダーから眼を放し、必死に縄を抜こうと努力する、大塚啓子の全身に目をやった。あのお茶目の彼女も、今や真剣になって縄を解くことに熱中している。別に懸賞をか



けているわけではないのに、いやに一生懸命にやるな、と思いつつ、又、別の心では、早くシャッターを切らないと済んでしまうぞ、この娘、気が向かないと、二度とやれといったって、やらないかも知れないぞ、という焦りが出てくる。

ガシヤリ、ガシヤリ、という一眼レフ特有

の大きなシャッター音が、ムンムンと熱気のこもったこの部屋のガラス窓にひびく。三〇〇ワット三個、計九〇〇ワットのライトの熱気が、今になって初めて感じられてきた。

膝頭が自由になってきたので、彼女の脚はピンピンと跳ねるように俄然運動を激しくやりはじめた。足の指先に縄を引っかけて引っ

ぱる。私は、足の奇妙な運動を狙って、次々とシャッターを切ってゆく。

彼女は今やカメラなんか、眼中にないような面持ちで盛んに脚を活躍させる。今で丁度五分経過――。

輪になった縄を脚をくぐらせて抜くと、膝頭は完全に自由になる。

「ああ、疲れたわ、ここで一寸休憩させて。休憩したら、あの縄も自分で解くわ」

流石の彼女も、ここで一休みを要求した。このところ、二枚シャッターを切って、私も机の上に、どっかりと腰を下した。

「中々、やるじゃないか。これが後手だったら、もっと面白いんだがな」

私がライトを消して煙草に火をつけている間に、彼女は自分の歯で手首の縄を解いてしまった。

「おいおい、約束違反だぞ」

慌ててカメラを手にした私に向って

「ハハハハハ」

と男のように大きな声で笑った彼女は、素早く立ち上って、腕の縄をすっぱりと抜いて悪戯っぽく、にこりと笑った。

「こいつ、俺の企画を無茶苦茶にしていまいやがった。おい、この残ったフィルムをどう

してくれるんだッ」

「こんなもん、直ぐほどけるんだけど、貴方が真剣な顔をしてカメラをのぞいてるもんだから、一寸、時間かけてお芝居してあげたのよ。でも、もう面倒臭くなってー」

「フン、そうか、よし、それでは、俺も今度本気になって、縛ってしまおうかな」

彼女は、きやっきやっというて狭い部屋を逃げまわった。二の腕と胸、それに両の首に、うっすらと赤い縄目の跡を作りながら、無邪気な彼女は、そんなことも一向気にならなかったらしい。

「こんな縄の跡なんか、家へ帰るまでとれてしまうもん」

そう彼女は軽くいう。事実、この人のような柔肌は、弾力性があるのか、跡がつくものもはっきりしているが、とれるのも早いようである。その点、年輩の人ののは、とれ難いように私は思う。

撮影後日談

自分の緊縛フォトをハンドバッグに一杯詰めていたというモデル嬢もあるが、辻村隆氏も東浦ひかる嬢や梨花悠紀子嬢についていっておられたが、自分の緊縛フォトを見たい。



或は欲しいというモデル嬢が案外多い。これは一体どういう心理状態であろうか。

「自分のそんな写真、一体どうするの？」

と尋ねても、

「やっぱり自分の写真ですもの、見てみたい

わ、只、なんとなく持っていたいの」

といった返事である。梨花悠紀子さんは、

自分の写真を一枚一枚丹念に見て批評しながら、感想や次のアイデアを述べるといった熱心さであるが、この大塚啓子さんも、自分の写真を見ることについては、熱心な方であるようだ。

殊に自分の写真が口絵にでも載るようなら大変な張り切りようである。先日、撮影の機



会があつて逢つたとき、丁度この縄抜けの十数枚の写真が焼付けられて机上にあつたのでポケットに忍ばせて、彼女に見せた。

一枚一枚、ゆっくり眺め終つた彼女は、ほう、こんな所を撮つたの?といった面持で更に繰り返し繰り返えし見た。

この写真が次号の本文に掲載されるという

事を話すと、そんなんだつたら、あんな冗談半分にやらず、もっとしっかり撮って貰つたらよかつた、といつていた。彼女がいい出したことで、余興的に縄抜けをやってみるといった軽い気持だったらしい。出来たら、次回にはもっと、真剣味のあるのを撮ってほしい、ともいった。

彼女のことだから、全身ぐるぐる巻きに縛り上げ、猿ぐつわも本式にして、さあ御自由に縄を抜けてごらん、といったことも出来るかもしれない。先日の彼女の口ぶりからしても、そういう狙いを希望しているのだろう。これからの組写真も、こういう方向へ進んでゆくのも一つの方法である。

私は小猫のように可憐で牝豹のように精悍な野性味を持った大塚啓子さんを駆使して、素晴らしい連続写真と8ミリ映画を撮影してみたいと思つている。今や、写真撮影の絶好の季節であり、又、プレイにも快適の季節でもある。今後の彼女の活躍を祈ると共に、誌上に、その麗姿の現わす日の一日も早からんことを願つている。

自分の写真が口絵に沢山載らない号は、興味がないとさえいつている大塚啓子さん。これから、その自負心通り、素晴らしいフォトを次から次へと生み出してくれるだろうか。私は他のベテラン・モデル嬢と共に、彼女の今後の精進に大きな期待を持って見守つてゐる。

そして、彼女の若き日の記録である青春像が、永遠に残されるよう彼女の多くのファンと共に祈つてやまない。

新しい風俗文献研究誌

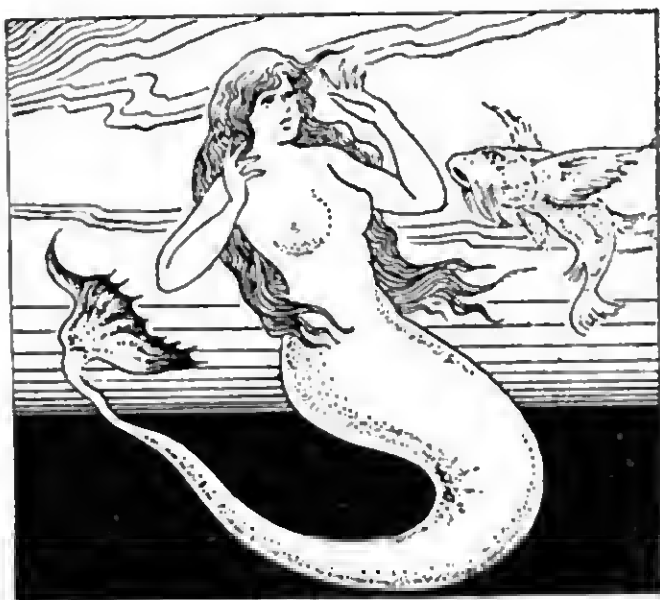
奇 譚 ク ラ ブ

新装十二月特大号

1961年 12月 号

(第15巻 第12号 通刊第160号)





千草氏の論理

宇 宙 人

最近、千草忠夫氏の活発な発言が論議を呼んで、誌面に活気を添えており、その事について氏の功績は、高く評価されてよいと思う。

ただ、氏の功績は大きい、立論の方法、特に思考の過程には合点が行かないものがあるので、一言する気になった。

八月号の「奇ク私見」に述べられた氏の見解は、要するに(1)奇クはエロ本である。(2)エロの生ずる場合あれこれ。(3)奇クのエロをもっと芸術的なものに高め度い。(4)奇クがセックスに関する描写をタブーとしているのは不

自然。(5)どぎつさについて。(6)奇クにもっと美を——となろう。

これに対して、九月号で岩崎一生氏が、千草氏の意見に大体賛成、但し右の(4)については編集部のやり方に全面賛成として二、三述べ、最後に、初めに述べた様に千草氏の意見に全面的に反対する訳ではないが云々として結んで居られる。

これに対して千草氏は「氏(岩崎氏)は、奇ク編集部のやり方に全面的に賛意を表した」といわれながら、一方では千草氏の意見に全面的に反対するわけではないといっておら

れる。小生の論では、編集部のいき方に相当反対しているのだが、それに全面的に反対するわけではないなら、編集部のやり方に全面的に賛意を表した事にならない。それでは矛盾が生じます。この点について、ハッキリしてもらいたいのです」と詰め寄って居られる。然し、この千草氏の論理は奇妙な論理である。まず、そのロジック自体について。仮りに、千草氏が奇クのやり方に「全面的」に反対ならば、確かに、一方で千草氏の意見に全面的に反対する訳ではないとする岩崎氏が、他方で編集部に全面賛成を唱える事は矛

盾だろう。しかし、千草氏も自らいわれる様に、氏は編集部のおき方に「相当」反対して居るのであるから、従って、何んでも彼でも全面的に反対という訳ではなく、賛成する面もある事は明らかだ（これは論理的にそうなるだけでなく、事実もそうだろう）。

この様に、既に、千草氏と奇クとの間に共通面も存在する以上、岩崎氏が千草氏に全面的に反対する訳ではないとしながら、而も奇クに全面賛成といわれる事は、ちっともおかしくない（これは文章で書くより、円でも描いてみれば、小学生でも一ぺんに分ろう）。何処が「矛盾」だろうか。

多分、千草氏のつもりとしては、「オレは奇クに反対なのに、岩崎氏が、オレにも奇クにも同感だというのは、おかしいじゃないか」という位の、茫漠としたムード調で事を考えて居られるのだらうが、苟しくも他を「矛盾」だと決めつけたり、「はつきりせよ」と詰め寄ったりするからには、先ず己れの論理は正確であり度い。

「自分は奇クに全面反対、岩崎氏は自分に大体同調、その岩崎氏が奇クに全面賛成——これは矛盾」とすれば、千草氏の論理としては、

一応辻褄は合うかも知れないが、それでは今度は「事実」と合わなくなってしまう。

次に、以上の様な誤りよりもっとヒドいのは、既に読者もお気付の様に、岩崎氏は、前掲の千草氏の幾つかの主張について、大体同感、但し、(4)については奇クの行き方に賛するといつて居られるに過ぎない事である。こうなると、千草氏は、抑々出発点に於て、更に大きな誤りを犯して居るといわざるを得ない。

念の為、もう一度繰り返すと、千草氏が「奇ク私見」で述べられた諸点について、岩崎氏が、大体同感だが、セックス描写の点については賛成し兼ねると述べ、千草氏がこの点、更に反論された。ここ迄は先ず良い。ところが、そのあとに、千草氏が「蛇足」なりとして岩崎氏を論難された分が、文字通り蛇の足になって、飛んでもない論理になってしまった、という事だろう。

第二に、氏の議論の中には、十月号で中谷氏も指摘して居られた通り、理想（希望、主張）と現実（事実）との混淆がある。勿論一つの議論の中に、理想や現実が色々述べられる事は、いい。ただ、その場合、どれが理

想で、どれが現実かは、けじめをつけておかなくては困るのである。個人的の希望や主張を客観的事実だといつても、通用しない。千草氏が奇クからエロを期待される事は、いい。然し、その事から当然には、奇クはエロであるという結論も事実も出ては来ないのである。

第三に、氏は八月号で奇クが緊縛、サド、マゾ……をテーマにして居るからエロ本であると断定されたが、これは「セックスの話し、それはワイ談である。ワイ談以外の何物であろうか」という様なもので、少く共その儘は通用しまい。ところが、氏は更に十月号で、テーマも表現と描写の仕様如何によつては……という様な事を、色々外国の文学書迄引用して力説、強調して居られる。こうなると、あちら（八月）立てればこちら（十月）が立たず、最早地上の論理では如何んともし難いので、宇宙のどこかでやって頂く外はあるまい。「ハッキリ」しなければならぬのは、むしろ千草氏の方の様だ。

それは扨ておいて、千草氏の御説は、文学的乃至感覚的には優れた所もあると思うが、論理の進め方や思考の過程には、残念ながら混乱がある様で、これは、文学以前の問題である。好漢の御自愛を祈るや切。

贗にせ醫い者しや

渡

部

か

ね

贗 医 者

昨年短大を卒業した私は、いくつかの就職口があったにもかかわらず、お勤めをしなればならない事情でもないだけに、ただ、なんとなく気がすすまないままに、家で花嫁修業を名目にして、ぶらぶらと毎日を過しておりました。

しかし家で遊んでいるとは、また何と退屈なことでしょう。たまたま父の会社の傍系の商社で、ここ数カ月の間に結婚ブームで女子事務員の退職者が相つき、欠員ができて困っているからとの事で、一応臨時の形で——と

ですが——出てこないかとの事。退屈しのぎに位の気持でお勤めする事に致しました。

とはいっても、やはりお勤めするとなれば戸籍抄本、卒業証明書、履歴書などと共に、身体検査書を提出せよというのです。戸籍抄本は区役所、卒業証明書は学校ですぐとれませんが、身体検査書は有効期間が三カ月とか。従って在学中のでは駄目ですし、保健所が一番いいのですが、地理的に甚だ不便なのと、身体検査日は週に一回特定の日とかいいうので、最近近所に開業した門田医院で間に合わせることにしました。

秋晴れの或る日、私は新しい社会への門出に何かわくわくするような気持で門田医院を訪れたのでした。

阪大出とかいう医師は、まだ三十を越すか越さないか位い。スポーツマンを思わせるがっしりした体格の、みるからに好感のもてる医師でした。腕がたつ、見立てがよいとの近所の評判通り、待合室は可成り混んでいました。独身の先生に若い看護婦が二人、何か妬ましいような気持になっている時、

「渡部さん、どうぞ」
看護婦さんによばれて入る診察室には、型

通りの黒いレザー張りのベッド、血圧計、注射器などのガラスケース、などがきちんと整頓されており、何か先生の人柄がしのばれるようでした。

「就職のための身体検査ですか。では、どうぞ上衣をぬいで下さい」

当然の事ながら、私は異性——いや医者の場合、それは観念的には異性と感ずべきではないのでしようが、——の前に、ひそやかな自負を抱いている豊かな乳房を露呈するのが何かためられました。

「お手伝いして差し上げて」

催促された看護婦さんは、冷い眼差して私の左右から、何をぐずぐずしているんだといわぬばかりに、はぎ取るように上衣に手をかけるのでした。

思わず赤くなるのもかまわず、聴診器が当てがわれます。

「大きく息をして、ハイ」

型通りの打診、聴診、レントゲン撮影、血沈、ツベルクリン反応とすんでから、

「まず健康体ですな。ツベルクリンは明後日でないと分りませんから、明後日もう一度来て戴くとして、身体検査書には非の打ち所なしと書いておきましょう。ところで一寸氣に



かかることがあるんですが、どうですか、食後胸やけがするとか、時々ゲップがでたりしませんか、するでしょう。どうも胃酸過多症

の初期的な感じがするんですがね。いや、勿論御心配はいりませんよ。食べすぎや酒の飲みすぎの場合でも、こんな症状はあるんです

からね。しかし、ひどくなるといけませんから御注意なされた方がよろしいですね。あまり食べすぎないように。食事は時間をきめてきちんとして。あなた、刺戟性の強いものや甘いお菓子などはどうですか？。お好きでしょう。あまり沢山はよした方がいいですね。そう、丁度いい薬がありますが、何なら二、三日分差し上げましょうか」

私に返事をする暇も与えず、独りでしゃべり、独りで合点する医師の言に、何時しか私も引きずりこまれて、いかにも胃酸過多症に罹っているような気がするのでした。そういえば、ゲップも出るし、胸やけもしたっけ——勿論大好きなお芋を戴いた時だけ——な——どと思ううちに散薬が手渡されて、その日は家に帰りました。

さてその翌々日、ツベルクリン反応測定の結果を聞くために再び門田医院へまいりました。丁度先生は往診中で、待つこと二十分。医院で先生の帰りを待っていると、何か、自分が病人になったような気持になるから妙なものです。

「やあ、お待たせしました。ツ反応は、十四ミリですね。陽転は何時でした？」

「中学一年の時でございます」

「そうですか、その後異常なければ結核の心配は全然ないですね。そうそう、レントゲンの結果もこの通り、きれいなものです。ところでお薬、のみました？。ついだから一寸横になってごらんなさい」

今日はもういいのにといいながらも、先日の胃病の話の事が一寸心にかかつて、私は診察ベッドに横になりました。

看護婦さんの手で素早く上衣がめくられ、スカートがゆるめられると、先生の手が腹部のあちこちを、或は強く、或はゆるくかけめぐります。

「まあ、胃の方は大して心配することはありませんね。おや、下腹がずい分張っている。はあ、便秘してますね。どうです、便秘し勝ちでしょう？。それで胃の方にも影響があるわけです」

そういえば、ここ二三日、いや、この前身体検査をうける前日からお通じがないから、今日で四日もないわけです。

「はい、四日程」

答えながら、私は急に顔のほてるのを感じました。

「そりやいけませんね。じゃ、一寸隣りへ行

って下さい。(看護婦さんの方をむいて)君、クリスター」

「どうぞ、こちらへ」

私は何が何だか分らないままに、看護婦さんに導びかれて、治療室と書かれたドアの中に入りました。

手術室を思わせるような総タイルの小部屋。真中に黒レザー張りのベッドがおかれ、器具戸棚、ガス台、洗面台などが揃っています。私はどうしてよいのかわからず、ドアの所できょとんとしていますと、

「お浣腸致しますから、ベッドにお上り下さい」

「えッ？」

といったきり、私は声も出ませんでした。浣腸、どうして私が浣腸されなければならないのでしょう。子供の時のあの嫌な思い出が走馬燈のように、一瞬私の頭の中を駆けめぐりました。

「あの、私、結構です」

というのが精一杯でした。

「先生のおいつけです」

何時の間に入ってきたのか、もう一人の看護婦さんが冷くそういいますと、私の肩を押すようにベッドに向わせます。私は夢遊病者

のようにベッドに近づくと、フラフラと横になつてしまいました。

「先生、何CCにしましょうか」

「そうだね、五〇CC」

ああ、看護婦さんだけならまだしも、何時の間にか門田先生が入って来てみていられるではありませんか。私はもう恥ずかしさに喉がからからになるのでした。

「駄目駄目、そんなに固くなっちゃ。痛くも何ともないですよ、楽な気持ちで、お腹に力を入れないように、ハイ」

三人の注目の下に、今浣腸されているという意識は、私をいかにもみじめなものにするのでした。看護婦さんの処置が済んでホッとする間もなく、早くも押しよせて来るものを覚えました。そうでしょう、四日もお通じがなかったんですもの。そこへ浣腸されたのだからたまりません。

「五分程我慢して下さい。お薬がよくしみ込みませんといけませんから」

グーッとお腹がなって、途端に強い必要感が押し寄せてきます。

「アアッ」

私は思わず声を出してしまいました。

「今、お薬がきいていますから、もう一寸我

慢しましょう」

私は全身を引き締め、両足にぎゅっと力をこめてこらえます。一時、遠のいたかと思う間もなく、前より強く又一しきり怒濤が押し寄せてきました。

「あの、あの」

私は恥ずかしさに、何といったらよいか分りません。

「あの、もう、とても、我慢が」

私はとぎれとぎれに、こう哀願するのが精一杯でした。

「先生、どうしましょう」

看護婦さんは私と先生を見較べながら、平然としてこういいました。その目は先生のまだ駄目だという答えを期待するかのように冷く光っているように思えました。

「何分たったかね」

「まだ四分です」

「五分以上我慢しなくちゃいけないんだが。」

どうです、もう我慢できませんか？」

「ええ、もう。あの、許して戴けませんでしょうか。アッ、ア、も——」

思わず言いかけて、その言葉の恥ずかしさに息をのんでしまいました。

若い女にこんな苦しみを我慢させる三人の

姿は、ああなんと嗜虐に満ちた残忍さでしょう。でもこれが医術故に、私の便秘症がそうさせる致し方のないわざなのです。

「もういいでしょう。さ、トイレへどうぞ」

許された嬉しさに、とび上るようにしてベッドを下りました。立ち上るや、腸の内容物が一気に下に下るのでしよう。一段と強烈な便意が襲ってきました。あわてて私は両手でお尻をおおいました。手でおさえたってどうしようもないことなんですが、我を忘れた瞬間のこととて、あとで考えればなんと恥ずかしいあわれな姿だった事でしょう。

さて、トイレは一体どこなんでしょう。あわてて私は先生の立っているドアの方に進みかけました。

「こっちですよ」

看護婦さんが指さす方をみれば、この部屋の隅にしつらえたカーテン。看護婦さんがめくってくれたカーテンの中には真白い洋式水洗便器が人待ち顔でした。遮蔽物は四方のカーテンだけ。いくら見えないといっても、これでは人前と同じです。でも差込み便器でとられるよりはまだましですし、第一、襲い来る怒濤の強烈さに、ためらっているゆとりなどありませんでした。

看護婦さんがカーテンを閉めてくれたのも、あとで気がついた程のあわて方。もう恥も外聞もないというのはあんなことをいうのでしょうか。押しよせるものから解放されてホッとすると同時に、何ともいえない羞恥が私の全身を包むのでした。

「アッ、いけない。紙はハンドバッグの中だわ」

私はどうしてよいか、本当に泣きたくなくなってしまいました。でも、どうすることもできません。

「あの、あの、……看護婦さん、一寸」

「何ですか」

サッとカーテンを開けて入って来た看護婦さんはジロリと見廻します。射すくめられたように体を堅くしながらも、今更どうすることもできません。

「あの、すみませんが、私、紙を、ハンドバッグに……」

「ああ紙ですか」

ああ、こんなの所まで見られてしまった。

何とぶざまな恰好でしょう。でも、まさか浣

腸されるとは思わなかったから、紙をもってないのも仕方のないことです。

「ハイ、どうぞ」

差し出されたのは、真白な脱脂綿の塊と、小さな紙製の容器と小さな割り箸でした。

「ついでに検便をしますから、その容器に親指の先位の大きさにとって下さい」

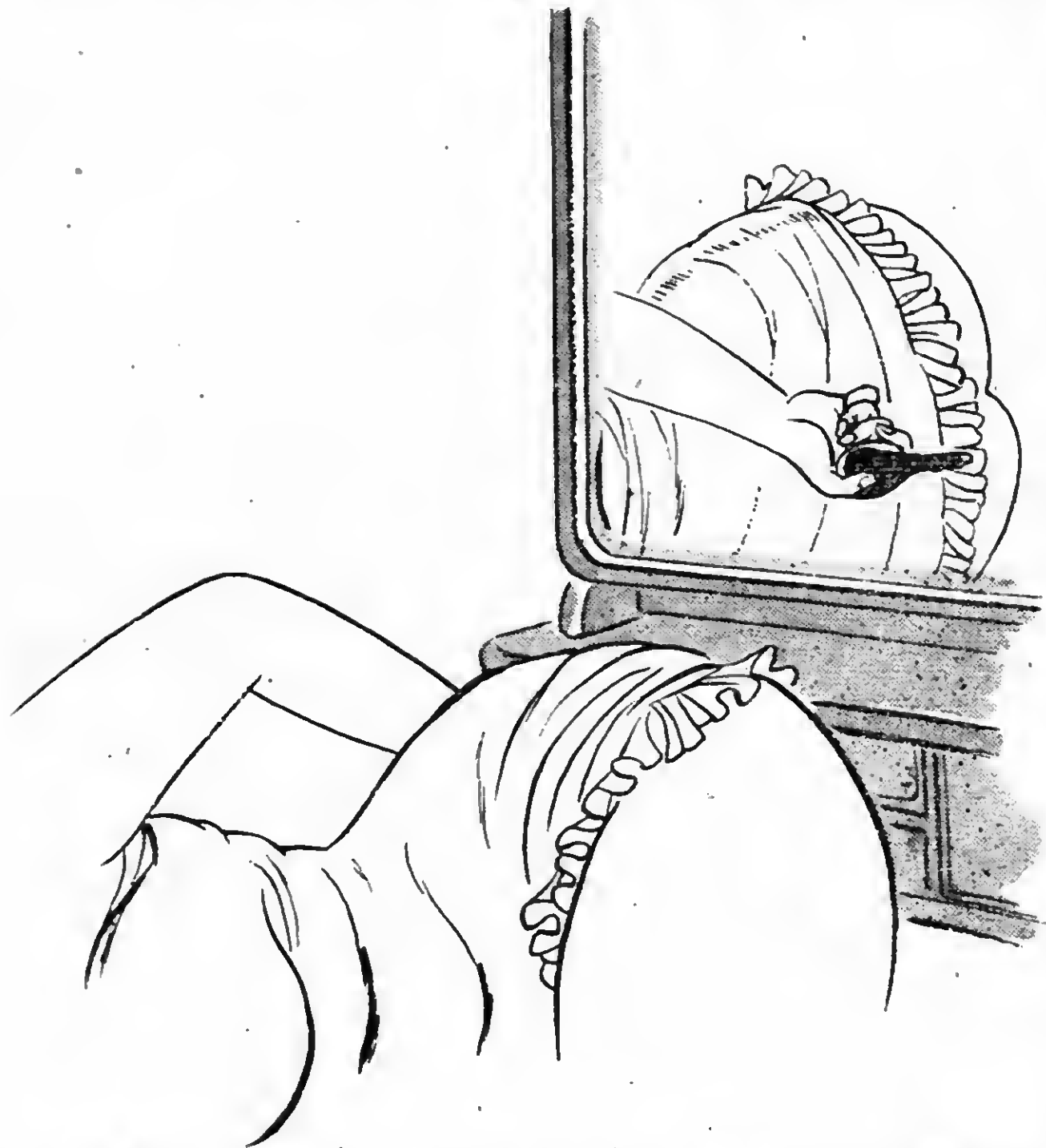
浣腸液で半流動体となった我が便をみつめて私は又しても涙が出そうになりました。ようやく幾分固めのを容器にとり、

「お願い致します」

と、差し出す恥ずかしさ。

ふとみれば看護婦さんは、ついさっき使用したあの浣腸器を丁寧に洗っているところでした。私は逃げるように、このいまわしい治療室から診察室に帰ってききました。

「まあお掛け下さい。どう



です。気分がよくなったでしょう。便秘は美容には一番の大敵ですよ。直腸に大便がたまつたままになっていきますと、醗酵して毒素を発生し、それが原因で、にきび、吹き出もの、できたり、のぼせまいを起したりします。

無理にお通じしようとすると痔の原因となったりしますよ。ですから、お通じはなるべく毎日あるように御注意下さい。いいですか、分りますね。便秘の時は緩下剤はあまり感心しません。どうしても習慣性になり勝ちですから。それより機械的に浣腸した方がよろしいのです。でもしょっちゅう浣腸ばかりしてもこれもいけませんかね。それより何と云っても食事ですね。新鮮な野菜果物をなるべく多くとる事、これが一番です。これは美容上からもいい事です。今日は苦しかったですか。でも浣腸したら少しは我慢しなくちゃいけませんね、意味がないですから。さあ、お薬お作りしておきました。検便の結果も分りますし、三四日したら又いらしてみして下さい。胃酸過多の気味がありますから、多食を避け、あまり刺激性のあるものはおとりにならぬよう。ではお大事に」

「有難うございました」

親切な先生ですが、お話し中、私はまとも

に先生の顔をみる事もできず、ずっと足元ばかり見つめておりました。

外に出て、あたりに誰もいないのを確かめてホッとしました。誰かが私が浣腸されたのを知っているような気がしてならなかったのです。

さて、あの浣腸された日から二日たち、三日すぎましたが、相変らずお通じはありません。下腹が何だか張ってきてとても気持ちが悪いのです。

一体どうした事でしょう。いくどか思いきつて門田先生の所へいつてみようかしらと思いましたが。でもお通じがないといえ、きつと又、あの苦しい浣腸をされるにきまつています。ああいやだ、私はなんとかしてさっぱりした気持ちになりたいと思つて努力してみましたが駄目です。緩下剤買つてこようかしら、でも習慣になると嫌だし、まして恥ずかしくて軽便浣腸など買えないし、どうしたものだろうと考えている中、其の日も一日たつてしまいました。

もうあれから四日たっています。下腹が張って苦しくてしょうがありません。とうとう私は決心をしました。

角をまがると門田医院の建物がみえます。

一瞬私は先日の、「お浣腸致します」 「もう少し我慢して」 そうした看護婦さんの声が耳について、あわてて引き返してきました。でも、やはり何だか気持ちが悪いのです。思い直して、何も考えまい。思い切つて、「浣腸して下さい」と言つてやろう。そう決心して、小走りに門田医院の前にきてみれば、おお、何とした事でしょう。

「今般、都合により廃院致します」

墨黒々と書いた紙がぶら下り、人の気はいもしないようなのです。

これは又一体どういう訳なのでしょう。私は一瞬張りつめた気持ちがゆるむと同時に、ああ浣腸されなくてよかったと思つたのです。でも下腹の張りはどうすることもできません。仕方がない、自分で浣腸しよう。その方が誰はばかる事もなくていいわ」と思いかえして、駅の方へ歩を進めました。

商店街に入つて最初に眼についたのが文化堂薬局。そつとうかがってみると、若い店員が二人もいます。浣腸なんて恥ずかしうって言えないわ、そう思つてやりすごしました。十軒程先にある小さな店の田中薬局、頭のはげた主人が店番です。余程入ろうとしました

が、やはり何か気はずかしくなっていてやりすくす中、とうとう駅前にてしまいました。駅前の第一薬局には客が三人もいます。これではとても駄目、思い直して、又、田中薬局の前に引返しました。思い切って店に足を入れると、

「いらっしやいませ。何を差上げましょう」

「あの、イチジク浣腸ございますか？」

「はい、子供用ですか？」

私はしめたと思いました。すかさず、

「ええ、そうですの」

「おいつつの方でしょうか」

不意をつかれて、私はどきまぎしながら、

「エート、あの、八つ」

「八才でしたら、子供用なら二つ、大人用をお用いになった方が効果がおよろしいかと存じますか」

「そうね、どうせいるものだから、大人用二つ頂戴」

今度はすらすらと口に出るのに我ながらびっくりしたのでした。でも代金を払うのももどかしく薬局をとび出した私は、胸の鼓動が激しく高鳴っているのと、顔がほてっているのがはっきりと感ぜられるのでした。

ああ、やっとの思いで手に入れたイチジク

浣腸。これで便秘の不快さからのがれられるのです。私は家に帰るやいなや、自分の部屋にとびこんで鍵を下しました。誰もみていないという安心感がそうさせたのでしょう。大胆にも私はシュミーズ一枚になって横になります。掌中の可愛いピンクの容器、添付の針で穴を明けるのが何か可哀そうに思えます。

右手にイチジク浣腸をもって、体をよじり後をふり返ると、おお、丁度姿見に私の不自然なポーズがうつっているではありませんか。

「あらいやだ」

思わず声を出し、無意識のうちに四囲を見廻し、誰もいないのをたしかめると、ひとりでに笑いがこみあげてきました。

「面白いわ」

そう考えて、私は自分のお尻をあかず姿見にうつしながら、二個のイチジク浣腸を使用したことでした。

でも、あの時は五分も無理に我慢させられましたが、やはり自分独りではとても我慢できません。ものの二分もたないうちに、私はトイレに駆け込みました。

その翌朝の新聞を何気なくみると、社会面の左隅に、こんな記事が小さくのっていました。

「贗医者逮捕」

××警察は××区〇〇町十五番地門田一夫を医師法違反の疑いで逮捕した。門田は阪大医学部中退にもかかわらず、阪大卒と称し、学士会名簿で同姓同名の福岡県△△市の門田一夫医博の名を騙って厚生省に医師免許状の紛失再交付を求め、開業していたものである。近所では親切なお医者さんで通っていたというが、最近若い女性から、必要以上の治療を受けたとの投書が多いので、ひそかに内偵を進めていたものである」

たったこれだけの記事でしたが、私にはあまりにも思い当たる節が多く、大きなショックでした。

恐らく私以外にも、例の部屋で羞恥に顔を赤らめた人があったことでしょう。しかも数は少くなかったに相違ありません。

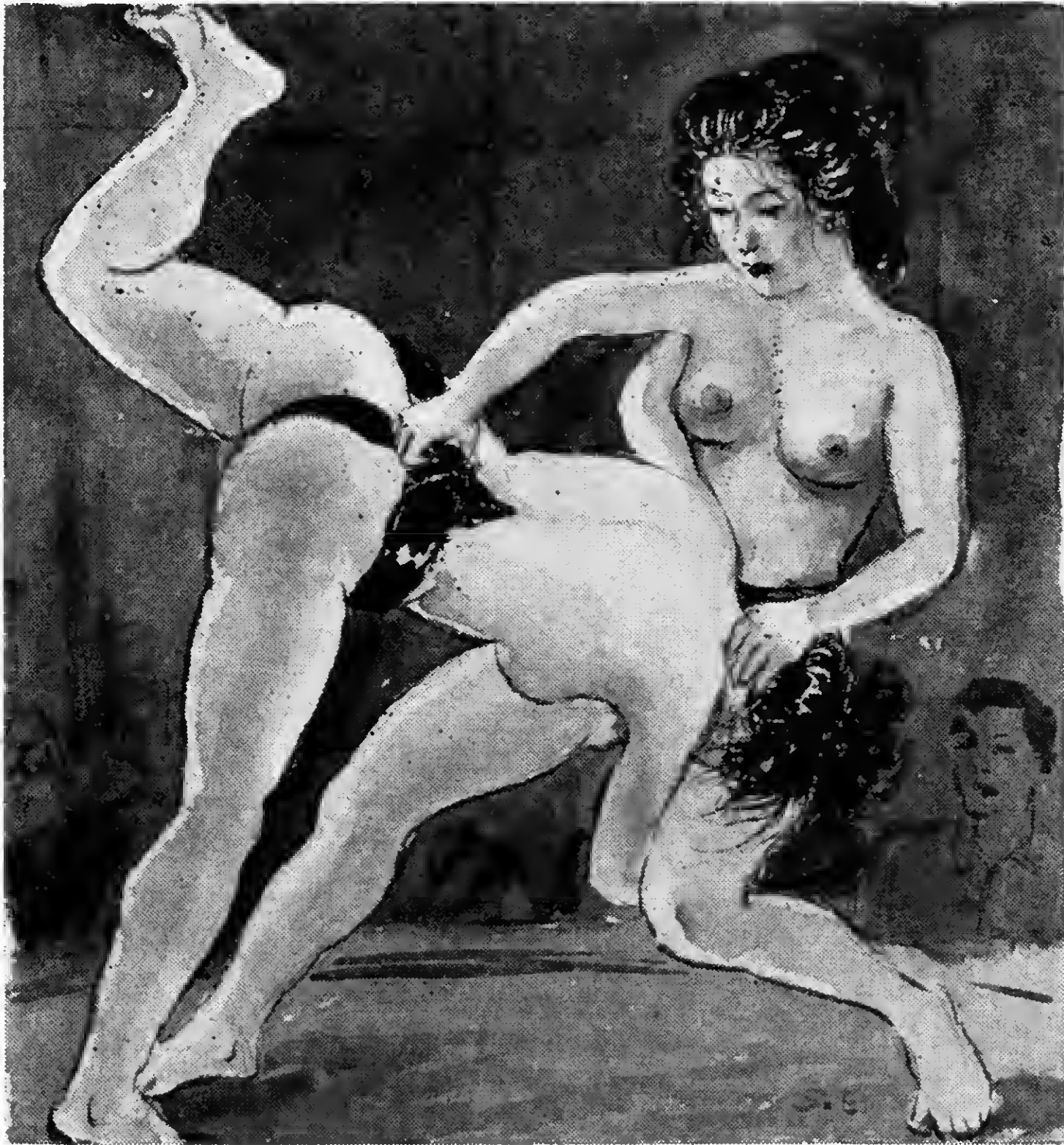
偶々、その日の夕刻、薬大に存学している従兄が遊びにきましたので、私は残っていた例の散薬を示し、

「このお薬、何かしら？ 風邪薬かなんかだったら、私、今、風邪気味だから丁度いいん

女斗美絵シ
リーズ No6

引落し

提 供
雪 崎 京 人



「だけど」と、それとなく打診してみました。

「やたらに訳の分らない薬なんか飲んじゃ絶対にいけないよ」

従兄はそういうしながら、散薬をひねくりまわしていました。

「こりやどうも収剣剤らしいな。よく分らないけど」

「なによ、収剣剤って」

「いわゆる下痢止めさ、つまり下痢の反対ってわけ」

これで私の便秘がひどくなった謎がときました。

ああ、私は収剣剤を飲まされて、又しても浣腸されるところだったんです。

でも何だか私には、今は留置場に居るであろう門田先生が憎めないのです。たった一度の経験だったのに以来、私は浣腸の虜になったのでしょいか。残された収剣剤を又飲んで、なるべく遠くの薬局に

「小児用のイチジク浣腸二個下さい」と出かけてゆく私なのです。（おわり）

体験告白

黒いコート

宇野

一

これから書こうとする事は、私が身を以って体験した事実です。

○

その日も朝から照りつけ、暑い日でした。一日の勤めを了えた私はやれやれと云う気で同僚と帰途につきましたが、まだ日が高く帰宅しても数時間はもてあますのを承知ですから、二人でビールを飲みに行きました。するとそこで会社の取引先の人と出逢い、その夜はとうとう深夜迄飲み続け、帰宅したのが一時前頃だったと思います。妻はすでに床に就いておりましたが、私が帰ったのを知ると、寝ぼけ顔をのぞかせて、「遅くまで結構ですね」と、嫌みを云うのです。すっかり酔っつい

た私は、妻のそんな態度に腹が立ち

「たまに遅いからって、皮肉を云うな。云いたい事があれば、はっきり云え」

と、つい語尾を荒くしました。

「そう。そうおっしゃるなら云いますわ。あなた、私なんのためにキャバレーなどへ勤めに行っているかわかりますか？いえ、勤めるのは私自分で云い出したのですから、よろしいワ。唯、その時、あなたと約束したはずよ。お酒を飲む時は家で飲むって、あなた云ったじゃないの。まあ、お聞ききなさいよ。十一時半には必ず迎えに行つてやるとも云ったわ。始めの一と月二た月は、あなたも約束通り来てくれたわネ。それにこの頃ったら、二日に一度か、はげしい時等、四日も続けて

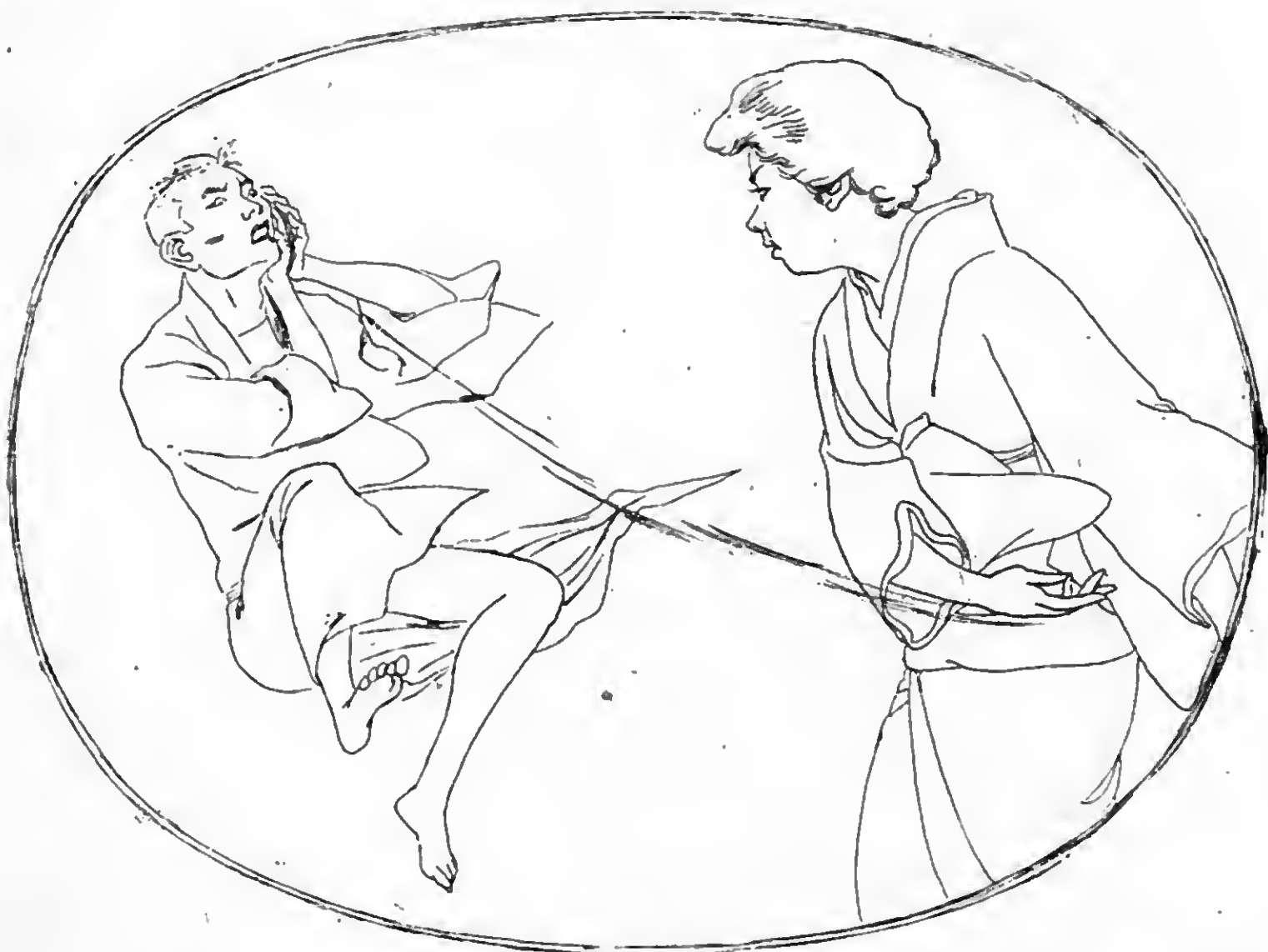
来てくれなかった時があったわ。今夜は丁度いい機会だからなにもかも云うわよ」

「ああ聞こうじゃないか」

私も聞き直りました。

それから妻は、私の酒の量が多いとか、無駄使いが過ぎるとか、はては、私が新調している服も自分が作ってやったのだと云わぬばかりの口ぶりです。抑えに抑えていた私の感情は、それを聞くと一度に爆発し、妻の頬へ平手打を加えてしまいました。

三年間交際し、その間に、当時、十五万円の金を貯めた私達は、妻の里からさらにもう十五万円を借りて、現在の家を買いました。だが私の給料だけでは、生活費と借金の返済



はとても出来そうになくやむなく妻も、当時はそのまま勤めておりました。が、たまたま勤め先の貿易会社が東京へ移ると云うことになり、わずかの退職金でくびになりました。そこで、妻はキャパレー勤めを始め、勤務時間の関係で、この頃では二人が別々の生活を営んでいる様な毎日でした。無意識に感じ合うお互いの不満。それが今夜ついに爆発した訳です。

私は手を出してから、しまった、と思いました。が後のまつりです。妻は叩かれた頬を手でさすり乍ら

「今夜はあなた酔ってらっしゃるから、明日お話しします。向こうの部屋にお床、取ってありますからどうぞ寝んで下さい」と、落着いています。

私はそんな妻が憎くなり、さんざん悪態をついて、やっと床につきました。

目が覚めて時計を見ると、なんと十時半です。しまったと思いました。が、今さら社へ行く訳にもいかず、と考えていると、妻が私を起こさなかったことに無性に腹が立ち、台所にいるらしい妻を大声で呼びました。

「なんですか、大きな声でみっともない。聞こえますよ、そんなに怒鳴らなくても」

「何故、朝、起こさなかったのだ。ええッ」

「まあ、よくそんな事がいえるわね。起したら、今日は休みだって、どなったわ。だからほっといたのよ」

そう云われてみると、なんだかそんな気がするし、いや待てよ、これは私を休ますために無理に起こさず、こんな事云っているのではないかなあとも思ったり、私の頭は二日酔いでその点がどうもはっきりしません。いずれにしても、昨夜の喧嘩がまだ続いていることだけは、妻の顔を見てすぐわかりました。

「あなたって案外卑怯ね、普段はそれ程でもないけれど。昨晚のこと覚えてる？。本当に卑怯よ。酔って人を叩くなんて……」

私はああらしい事した、だまって寝ていたらよかったと思うと、残念でなりません。

「なんとか云いなさいよ。昨晚の勢いはどうしたの。あんたってそんな人よ。素面の時は何もよう云わないくせに、お酒を飲むと、急にえらそうに云って。本当に卑怯だわ」

私も、これ以上云われると、また圧えきれなくなるぞと、自分で云い聞かせ乍ら

「じゃ、僕にどうしろって云うんだ」

「謝りなさいよ、男らしく」

「それやー、僕も悪るかったかもしれん」

「事実、悪るいわよ」

「だから、そう云ってるじゃないか。お前も少し言葉を慎しめ。いくらなんと云ってもお前は女なんだから」

「男なら暴力を振ってもいいってわけ？女は男のされる様にしていろって云うの」

「わからんねえ君は、僕はなにもそんな事を……まあいい、君のしたいようにしろよ、どうでも、叩かれたのが、そんなにくやしいんなら僕の頬つぺたを気がすむまで叩けよ」

「ふん、すぐそんな云い方をするのよ、そのくせ叩かれたら、倍にして返すくせに」

「いや、そんなことしないよ。叩きたけりゃ叩けよ」

私は叩き易い様に、うんと顔をつきだしやりました。と、いきなり私の頬がビシャとにぶい音で鳴り、続いて右側でバシツと、いやと、いう程強い痛みを感じました。

「こたえたり？もっと叩いたげましようか。」

うふふふ、あなた、叩かれないんでしょう。隠すことないわ」

それから左右の頬でビシャビシャと十幾つも叩かれたでしょうか。叩かれた痛みは不

思議に少しも感じないのです。

「あなたが、マゾだったこと、知っていたのよ。いつか機会があったらためしてみようと思ったの。この三週間程前に敏子さんが泊った時に、何かおもしろい本ないかしらって云うもんだから、あなたがいつもおもしろそうに読んでる本、見せたげたのよ。その時、敏子さんが私に教えてくれたの。あんたが朱線なんか引いてあるからよ。もっとも私も以前からあんたがそうじゃないかなあーて、薄っすら感じてたわ。そうでしょう？。ね、返事しなさいよ」

私は自分がひたかくしにしていた性癖を他人に、いや妻に知られた恥じらいで、言葉でいえぬ何か不愉快な気分におそわれ、いたたまらなくなってきました。

「痛かった？。ごめんなさい。でも、あなたが悪いのよ。私だって、何も無理に叩きたくなんかないわ。でも今のあなたのそんな顔見ると、私なんだか無性に腹が立つのよ。あんたが本当にマゾって云うんなら、今日一日だけ私、あなたの云う通りしてあげるわ。だけど、だけど、明日からは、そのことを一切忘れて戴きたいの。私の言うことわかる？」

急にうちしおれた私の様子に、妻も言葉をやわらげて、しんみりというのでした。

○
その日、私は三カ月程も新刊の奇クを読ん

でいなので、買わなくてもよいから、とにかく本屋へ行ってみるだけでも、行ってみようと三宮の書店へ立寄りしました。

本屋の主人から「長いこと見えまへんでしたな」と愛想を云われ乍ら奇クに見入ってました。と、後から誰かが私の背を叩くのを感じ、ふりむくと赤木敏子が、ニッコリ笑い掛けています。私は、あわてて読みさしの本を奥の方へ投げて

「やあ、どうしたの。今日は休みかい？」

何気なく問いかけました。

「ええ、昨日から、ちょっと風邪ぎみな。もうだいじょうぶだけど、今、映画にいつてきたの」

「どう、そこらでお茶でも飲もうか」

「ええ、でも奥さんに悪いワ」

「冗談じゃない、お茶ぐらい」

「じゃ、ちよっとだけね」

二人は肩を並べて歩き出しました。

彼女は美人とまではいかないが派手な顔立で男好きのするタイプです。黒い皮の長コートを腰のベルトできっちり締め、黒のバッグに黒皮の手袋、それに黒いブーツと、黒ずくめのその服装は、バツとする程あかぬけした感じでした。

「お茶だけでは馬鹿らしいなあ。ハイボール飲みに行こうか」

と誘うと、

「そうねえ。じゃあ、あそこがいいわ」

と彼女の知り合いの店とかへ案内されました。あまり広くない店の一番奥へ坐り、ハイボールを注文すると彼女は、

「さっき、あんたの読んでた本、私、知ってるわよ」

一瞬、私はギクリとしました。あいまいな返事をしておいて、私はハイボールをいっきに飲み干しました。そんな私の動作が、おかしかったのでしょうか。

「何も、そんなに驚くことないじゃないの。私、あんたがアレだってことも、ちゃんと知ってるわ。ハハハハ……」

と大声で笑うのです。私は自分の顔が紅くなったのを知りました。ついでダブルで注文し、それをも一口で空けてしまいました。

「大丈夫？ そんなに。まあいいわ、少し酔いなさいよ。おもしろい事、云ったげるわ」

意味ありげに私をのぞきこむのです。

「そのおもしろいってこと、なんだね」

「まあいいから、もう一パイ飲みなさいな。」

実はね、私、あんたの様な人探してたの。と云うより、あんたの様な人に何処かでめぐり逢わないかなあーと、前から考えてたの。ふふ……」

「じゃあ、その君は、S……？」

「まあ、そうね。それも、とってもきつそうなの。ためしたことはないから、わからないけ

れど」

「君、本当か、それ。ね、本当か」

「もちろん、本当よ。なんなら、ためさしてくれる？ それとも、奥さんに知れるとこわい？」

「いや、それあ、君さえよけりゃ。まして君がしゃべらなかつたら、女房にわかるはずないよ」

「じゃ、早速やってみましょうか」

というといきなり私の太もものあたりを力いっぱいつねりました。私は痛さに声を出し、そうになりましたが、他に客も居ることだし、じいっとこらえるより仕方ありません。やっと手を離れた彼女は、ニヤツと笑って、立ち上りました。

「ここはだめね、何処か他へ行きましょう」
伝票を取るなり、その店を出ました。

○

山手のそのホテルは、宵の口で他に客もないらしく、物音一つ聞えませんでした。

「さあ、あんた最初に云ったくけど、私、中途半端な事は嫌よ、だから、あんたがああしてくれこうしてくれて云ったって、それは聞かないわよ。私は思った通りにやるから。いい、わかった？。わかったら、まず、私のこの手にキスするのよ」

手袋をつけたまま、私の顔の前へ、その手を出しました。五指にきっちりくいこんだ

黒い手袋は底冷めたい感じですよ。

「ふふふ、そう。もっと表側もなめなさい。二年ごしのあかをなめるのよ。私はね、あんたを本当のマゾにしてやるわ。プレイだけでなく、精神的にも、さあ、こっち側も」

私は左右の手袋を飽きる事なく、なめまわしました。

「じゃ、手袋はそれでいいわ。次はこれよ」

ゆっくり立上り、私にコートのベルトを解かせ、するりと脱ぐと、そのコートを私の頭の上へバサッと放り出し、

「さ、その衿をなめるのよ。きれいにあかが取れる迄、わかった？」

この頃から、彼女の口調が少し乱暴になってきました。私は皮のつやとあかで黒光りするコートに顔をうずめ、犬の様にペチャペチャとなめまわしました。彼女は椅子に腰掛けたまま、愉快そうに見ているのです。

「どう、少しは、きれいになったかしら」

云い乍ら煙草に火をつけ、うまそうに吸っているのです。私も一服吸おうとコートをベツドの上に置き、机上の煙草へ手をのばしました。すると彼女は、もてあそんでいた手袋で、いきなりピシャと、私のその手を叩きつけました。

「誰がたばこを吸っていいといった。何故云いつけられた通りコートをなめないの。ええ馬鹿にしてるわね」

こんどは皮手袋が、私の頬を打ってくるのです。さ程、痛さは感じないのですが、反射的に彼女のその手をふりはらいました。

「まあ、あんた、私に手むかいするつもり？ さあ、もう一度してごらん。これ」

と又打ってくるのです。そんな彼女のものすごい気魄に、最早さからうすべを失った私は、彼女のなすままです。ピシーピシーと両頬で鳴る手袋の音が静かな部屋にひびくだけです。やっと打つ手をやめた彼女は

「そこへ坐りなさい。両手についてあやまりなさい。早くしなさい。出来ないの。できなければ、できるようにしてあげるわ」

私は坐ったままで考えました。彼女を怒らせれば、それだけ私の得になるのだと、

「ちょっと、上むいてごらん」

と云われて顔をあげたところ、その顔めがけていきなり彼女の靴がおそってきました。

瞬間、私は顔をそらしましたが肩の処をけられ、その場へあおむけに転びました。

「又よけたわね。いいわ、あんたがさからえばさからう程、私は楽しいわ。それ、こんどは、これをなめさしてやるわ」

私の顔の上へ間新しいブーツが置かれました。彼女は、その脚に力をいれて、

「さあ、口をあけなさい。なめるのよ」

私の顔は彼女のその靴でふみつぶされんばかりに圧さえられました。

「ふふ、いいさまよ。毎日、何をふんでるか、わからないきたないものをそれ！」

椅子を近寄せて腰掛けると、こんどは脚をかえて、私の口と鼻を覆ってしまします。

「どう？ 靴はこれぐらいで許したげよう。そのかわり、立って上衣を脱ぎなさい」

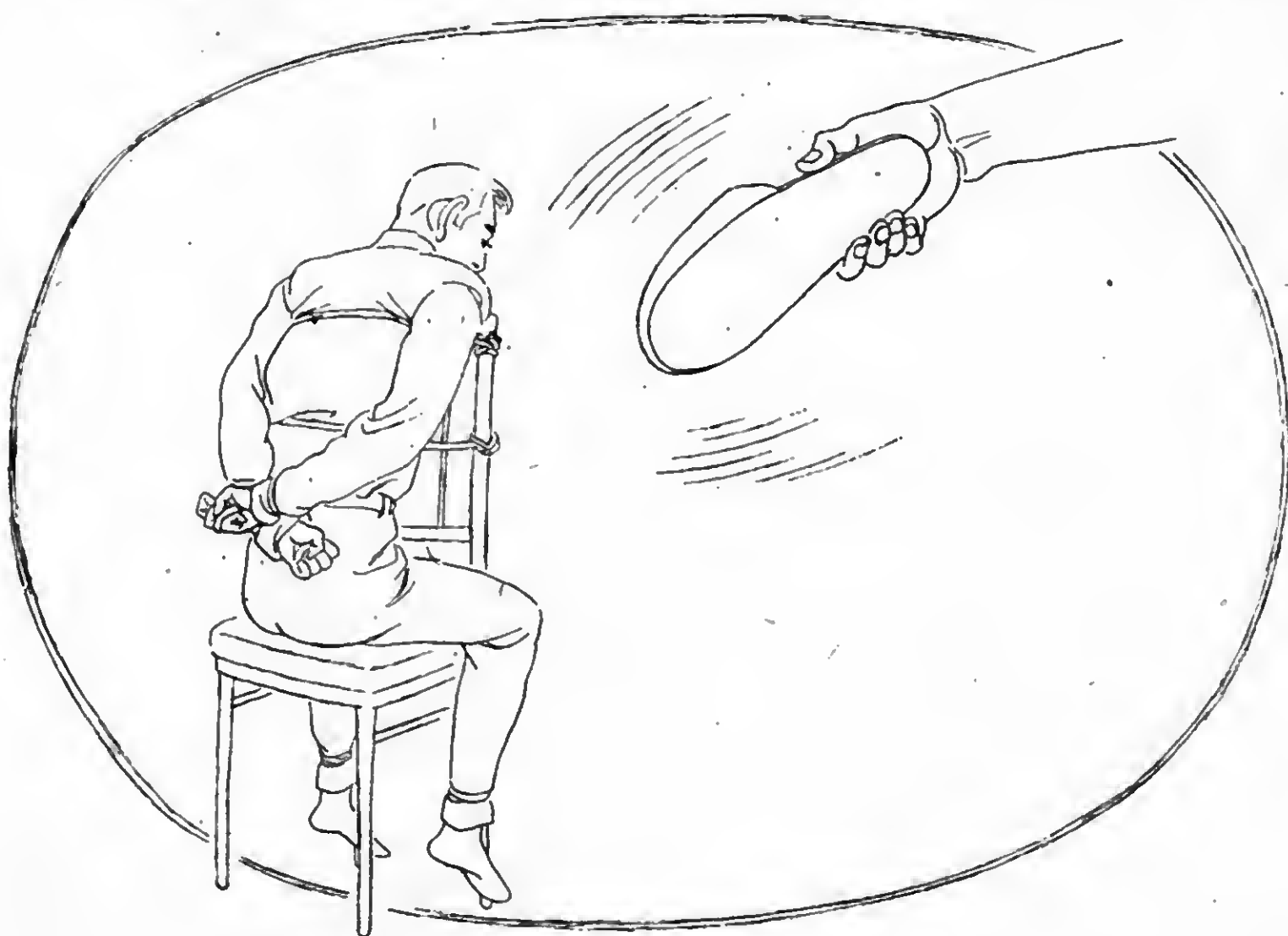
やっと起き上がった私は、云われるまま上半身を裸になりました。

「この椅子におかけ。反対よ、後向きに」

私は椅子の背を抱く様に腰掛けました。

「そうそう、手を前に組んで、足をもう少し開いて。それでいいわ、そのままよ」

彼女は、ゆかたのひもを手に取り、まず私の両足を椅子の脚にしばりつけ、続いて手を組んだまま、椅子のもたれのさん



にしばらくつけました。

「よし、これでよしと。これからは、ちゃんと痛いよ。まずこれよ」

と云うか云わない内に、私の頬に平手打が音をたてました。ビシッ、バシッ、ビシッと続けざまに六、七回打つと、その手を止めて

「どう、こたえた？それとも、いい気持？」

ふふふふ、あんたって最低よ、女にビンタ喰って、喜んでいゝんだもん。でも、なんとも云えない気持だわ。私、以前から思ってたの一度でもいいから男の人にビンタしてやりた

いって。でも、こんなに早く実現するとは。

あー気持がすうーとしたわ。こうしてねらって、ほれ」

バシッ、と、いとも楽しそうに私の頬を力いっぱい右手の甲で打つのです。

「どう、まだ足りない様ね。こっちの手が痛くなるわ。あんたは、これぐらいのビンタじゃ、こたえない様ね。そうそう、これがいいわ、これが。どう、これ」

私の目の前へつきだしたのは、スリッパです。それもかなり高級品らしく室内履の皮のものです。私は一瞬、たじろぎました。なんぼなんでも、これで叩かれたら、顔がはれやしないかと心配したのですが、次の瞬間、その心配が吹き飛ばされました。ビーン、ビシヤーン、バシィ。矢継早に、スリッパが頬で

鳴りました。最早感覚を失った私の両頬は痛さなどありません。すさまじい彼女の形相が今も私の目の奥ににじんでおります。

幾つぐらい叩かれたのか、それすら覚えておりません。しかし、彼女の打つ手が止んだ時、私は自分の顔が紅くはれている事を知りました。

「痛かったでしょう。真赤よ、かお。もっと叩きたいけれど、傷が付くといけないから、よすわ。そのかわり、次はこれよ」

彼女の手に持たれたのは、コートの皮ベルトです。それを持ったまま、彼女は浴室へ入って行くのです。はて、何をやるのかなあーと思っていると、彼女は一人えつに入った顔で姿を現わしました。その手に持っているのは水に濡れたベルトです。

「どう、これ。あまり痛くはないと思うわ。でも、水でぬらすと皮がしまるから、少しぐらいはこたえるわよ。こうして半分折って、と」

口の中で一人言を云ってたかと思うと、いきなり、そのベルトでテーブルの上を打ちました。ビシヤとにぶい音と共に水しぶきが八方に散りました。私はこれで自分の背中を叩かれるのだなと思うと、何か体中がぞくとふるえ、生まれて初めて鞭で打たれると云うことに自分でも得も知れぬ興奮を覚えました。

「さあーいくわよ、いい」

バシン、ビシヤンとその音は今迄の頬打より何倍も大きな音でしたが、ベルトの巾が広いのと皮が薄くやわらかいせいでしょう、あまりたいした痛みではありませんでした。私は自分の背に異性が皮ベルトを振り下ろしていることを思うと、普段望んでいた事が実現した幸福感でいっぱいでした。

○

十時過ぎに旅館を出た私達は、人目の多い所を歩くのが何んだか面映ゆく思え、好んで暗い路を歩きました。別れしなに彼女は「今晚はすばらしかったわ。会社へ電話してもいいかしら？この次」

「ああ、でも、しばらく間をおいてくれよ」

「それやあ、わかってるわ」

「じゃ、これで」

「あ、ちょっと待って。忘れもの、キスさしたげる。ここへ」

彼女は右足を上げました。私は誰か見て居る者はないかとあたりを見廻すと、素早く、彼女の靴の先へ口づけしました。

「ふふふ、じゃ私も帰るわ。奥さんに知られない様にね。握手のかわり、これよ」

と云うなり右手で私の頬へ、ビシッとビンタ一つ打つと、彼女はそのまま背を向けて去って行くのでした。



思い出すことども

切腹研究夜話

中 康 弘 通

切腹をテーマとして休刊前の本誌に寄せられた研究、資料、創作、告白などのうち、研究に関する限り、田谷敬生氏の御論考は最も印象に深い。告白の中では二十八年四月号所収、信太蓉子さんの「開花の契機」が初期のものでもあるので印象に深い。

ひとところ研究者の間では、この告白文が事実を述べたものか何うか、論議されたことがあった。勿論本誌に、創作を告白と称して投稿する人も少くないと思われる。しかしこのテーマに関する限り、本誌が採用するか否かは「開花の契機」を信太さんがお書きになったときは不明であったと思われる。何故ならそれまでの本誌に、切腹をテーマとする文章

は拙稿「切腹史談」以前には見られず、また本誌の投稿〆切日は大体発行日の二カ月前であるから、初めて拙稿が掲載された三月号の発売日から約一カ月前に、四月号の原稿は締切られていたはずなのである。

従って、このテーマを採り上げることによって本誌に採用されたい、と云う希望は、「開花の契機」が書かれたとき、必ずしも酬われるとは決っていなかったのである。単に売文が目的なら、そう云う投機的な試みは為されにくいであろうし、事実、復刊後の本誌「玉稿落穂集」にも見えるように、信太さんは他のテーマの文章は書いていない様だから、この告白記は彼女の必然的な理由があつて文章

にされたものと見てよいであろう。

切腹願望と高橋鉄氏が名付けられたこの特異な心理機構に就ては、男性では従来も二、三の雑誌に告白が寄せられていたが、女性では全く初めて見えることであつたので、この告白は、たしかに一つの資料として稀少価値がある。

ほどなく「風俗科学」誌に手塚正夫氏が、「妊娠腹切の話」と題する一文を発表されたが、その中に、会社社長の愛妾で二十三才の女性が、強盗に襲われて妊娠したのを苦に、みずから腹を割き胎児を取り出した話が含まれていた。この婦人が切腹願望の持主であつたらしく、原文によれば、

彼女は奇癖を持った女で、看護婦をしていた十七八才の頃から、切腹と云うことに異常な興味を持ち、武士が悲壮な「腹切り」をすると云う話を聞いたときから、それを想像しただけで妙に五体がうずいたのであるが、たまたま「白虎隊」の絵を見るにおよんで、うら若い青年が飯盛山で、焼け落ちる城をはるかに眺めながら、真一文字に腹をかき切っている情景を見て、これこそが自分のもっとも憧れた理想の境地だと思い込むようになった。

やわらかい腹へ、ぐさりと刃をつき刺し、ぐいとそれを横に引いたとしたら、どんなに素晴らしいだろう。彼女は度々自分の真白い腹を、素手でなでては、夢見るような眼つきをして、その上に刃物を当てて見るような時があった。

と記されているのは、その心理において信太さんの先蹤をなすものであろうが、女性自身の筆になる告白と云う点に意義を求めるならば、「開花の契機」に先行するものは無いであろう。

信太さんの場合、家人の寝静まった深夜、彼女はしばしば切腹の擬態を試みる。切先や

刃をすり潰した切出しの柄の部分に白布を巻き、三宝まで準備した彼女は、端座瞑目して「自分が今実際に屠腹せねばならない破目にあるのだ」と自分に云い聞かせ、徐ろに着衣を脱して三宝から腹切刀を執り、刃先を複十字の形に切腹する想定で腹皮に走らせるのである。

二十一才で五尺二寸五分、十四貫、スタイルには一応自信がある。と述べる彼女が、深夜ひとり秘かに試みる切腹の擬態は、想うだけに凄艶の感を抱かせずにはおかないが、自分の異常さを反省し、このままでは一生結婚も出来ない。女としての幸福が望めない、と云う信太さんの歎きを読めば、また、まことに心情哀切の趣きをさえ加えるのである。

こうした彼女に、当時機あつて二、三質問を試みた結果、信太さんは、武士の切腹にはその力強さに驚異を感じるのみだが、女性の切腹の史実や文芸には、自分自身がヒロインになった気持で深い感動を覚えずにはいられない。と告げ、更に、男性の切腹願望が究極は窃視欲の転化されたものとする筆者の結論に対し、女性ならともかく男性の切腹願望など全く不可解で異常の影が濃い、と卒直に感想を述べていた。

信太さんが男性の偽称か女性かと云う点も研究者の間での話題であつたが、この、男性の切腹願望は不可解だ。とか、女性の切腹に就いては同一化意識が強い、と云う答えが信太さんの女性である事実を意味しているように思えてならない。

卒直な告白ぶりや、自己讃美の強い傾向なども右の事柄を裏書きしているように思えたものである。

後に、彼女の手記に加えた筆者の分析が彼女に不快の感を抱かせたらしく、また彼女をナルシストと分析する筆者の見解に対し、あくまでマゾヒストだと自から主張する彼女とは、以後連絡も絶えたが、本誌の玉稿落穂集によれば、信太さんの投稿の内容が発表に不適當な箇所も多く、採り上げがたい傾向にあったため、彼女は次第に意欲を失って遠ざかって行ったものだとなつたので、必ずしも筆者の分析に憤慨したばかりではないかも知れない。

もう彼女も二十九才、夙に迷夢を忘れ、よき夫人、よき母君として、幸福な家庭の人になつておられることであろう。

奇譚三十九夜物語

——第九夜——

辻村 隆

九月二十四日、中秋名月の夜は、空気までも甘く、台風一過、澄みきった爽やかな風が、そっと窓辺から忍び込んでくるのでした。

八人の退屈男は紫煙立ちこめるクラブのソファで、めいめいグラスを傾むけて、一しきりにぎやかな雑談に華を咲かせておりました。

耳をすますと大都会のビルの片隅にも、迷いこおろしが、微かに羽根を擦り合せて啼くのが聞えるのです。近づく寒さの前触れのよう——。

そんな、おだやかにも静かな宵——
パクリパクリと煙の輪をつくっていたナイロン氏が、一同を制するように口を切ったのです。

第二十三話 娘は二度生まれる

「どの街にも一人や二人——、いやもっと多いかも知れませんが、何らかの衝撃によって気の触れたものや、生れつき白痴が潜かに、又は街の人気者？として住みついているものです。その誰しにも等しく与えられた宿命は、厄介者の烙印であり街の白眼視に曝されている一事です。

これはA村で聞いた話と思って頂きたい。

.....

紺田の豚親爺の末っ子娘の鶴子が気違いになった、という噂が、パツと村中に拡がった。

「豚おやじが、あの通りの女泣かせだ。この近在でも、後家や、人

の女房まで、何人引っ掛けたか知らねえが、きっと女のたたりでもあったんやで——」

「鶴子が、おどー畑をふらふらと歩いていてな。出逢った奴の話によると、にーツと笑って近附くと、パツとスカートをまくったとよ——」

「村の話では、おどー畑でいきなり、デン公（やくざ）にいかれて、それからおかしくなったというで——」

「素ッ裸で外へ出たがるやそうや。それで豚親爺が怒って、裸の儘荒縄で雁字搦目にくくって、一晚中、豚小屋へ、豚と一緒に放り込んでいたというで——えらいこっちゃ」

何れにせよ、紺田のおやじが撒いた色情の悪因縁で、可愛い鶴子が、十八才の若さで、恥ずかしい露出色情狂の様相を呈し出したから、親爺は大いに慌てた。

この近郊でも、豚のとつあんで知られている紺田は、かなりあくどいこともやってきたが、今では免も角、養豚経営者として、一代で財をなした男だ。

鶴子がしばしば露出症状を呈し出して、隙さえあると、家をフラフラと飛出して、誰かれの見境もなく喰らいつくものだから、村の若い男共は大喜びだ。

何しろ紺田家の末っ子娘で、我儘一杯、嬌慢に振るまった美人の鶴子だけに、田舎臭い若い連中にとっては、癪の種であり、高嶺の花でもあったからである。

急拠、紺田のおやじ、源造は、離れの一室を俄かに改造して座敷檻につくり変えた。

鶴子をそこへ押し込めると、逃げ出せない様に、片脚に環をはめ

て鉄鎖でつなぎ、鎖のはしを柱に打ち込んだポールトでしっかり締めておいた。

鶴子の母親は八年前に死んでいた。この母親すら、既に源造にとって三度目の女房であった。

鶴子を入れて兄妹四人は、上二人の兄貴の外、皆それぞれに腹違いであった。そして紺田おやじは四度目の女房を氣に入らぬと半年で帰えし、今の女房は五度目であったが、大阪の松島新地出身の脂肪の塊のような、まるでその為だけに生れてきたような女であったから、鶴子が狂っても思いやりひとつあるわけでなく、彼女が暴れたりすると、容赦なく、源造と一緒にになって、箠をふり上げて殴りつけていた。

狂気の彼女を世話するどころか、三度の食事を二度運んでやるのが精一杯の有様だから、大小便は垂れ流しで、一週間もすると、豚の悪臭になれた一家の者も、流石に辟易して、誰も寄りつかなくなった。

若く美しい鶴子も、今は見る影もなくやつれおとろえ、白い肌は陽の目を見ないからいよいよ白く、青味をすらも帯びてきた。着せておいた衣服も忽ち脱ぎ捨てるので、誰一人としてもはや着せる者もなく、汚物にまみれた体をのたうち廻らせ乍ら、鶴子はうつろな眼をぼんやりと見聞いて、時には笑い、時には空間の一点に媚をみせつつ、哀れにも生ける廃人となりつつあった。

何神様かの信者だと名乗る三名の男が、聞けばまことにお氣の毒、神の力で助けて進ぜると現われた時、紺田のおやじ始め一同は、心の底よりホツとした。

「相当な荒行ではあるが、必らずとも癒して見せる。だが万一、当

の娘が荒行苦行に耐えかねて一命を落した場合、御諒承下さいますかな——」

そのうちの一人が重々しくいった。

「ええええ、それはもう。こんな奴のことですから、癒れば拾いもの——、若し死んだとて厄介払いですわい。何分共に神様のお気に召しますように——」

「神の力と、科学的な療法をかねて行います。尚、快癒の節は十万円戴きたい。但し、癒らねば一文たりともいらぬ——」

「勿論、承知しましたとも……」

「期日は丸一カ月——。それ迄お預りするが、一切音信は不通、又、祈禱所も知らせぬ。一カ月後の午前零時、相違なく、お娘ごを連れする。よろしいかな？」

「ええ、結構ですとも——」

源造は何神様かの、些か異様な言葉も、厄介者払いの嬉しさで、あわよくば娘が癒るといふ言に迷わされて、何の危惧もおぼえず、易々として娘を引渡すことにした。

この三人の異様ないでたちの男達は、案内された座敷檻の前で、流石に顔をしかめながら、源造の差出す大きな敷布で鶴子をスッポリと包んだ。

暴れた場合の用心にと、敷布の上から手馴れた手付でぐるぐる巻きに縄をかけると、源造に手伝って足の鎖を外した。

三人の男にかつがれても、鶴子は声も立てず、うつろに源造を見つめていた。

強慾の彼も、流石に一瞬彼女が不惑に思えたが、すぐに

女房の笑顔が眼の前にチラついた。

「さあ、これで今夜から、おきよの奴に、やいやいいわれることもなくなったわい」

源造にとっては、娘あわれさよりも、この事で喧嘩勝ちの女房との仲が、今夜からうまくゆきそうな方に、心を奪われる比重のほうが強かったのだ。

後扉のあく、ライトパンの小型車に鶴子をほうり込み、一人の男が付き添って入った。砂塵を残して、車は呆気なく、紺田おやじの視野から消えていった。



「兄貴うまく行ったな——」

「神様を持出すと弱いもんだぜ。凄く臭せえ女だが、磨くと綺麗になるぜ。それに露出症てえのが気に入ったよ。殺したって構わねえ女って、そうそう手に入るものでもねえ、たんまり儲かりそうだぜ——」

ガラリと変る男達の話しぶり。兄貴と呼ばれた良太は、そういつてアクセルをぐっと踏み乍らニヤニヤ笑った。名前は良太でも、此奴、かなりの悪太郎らしい。

「ところで兄貴。十万の約束に力がいってたが、この女の気違いを本当に癒してみる気ですか——」

「十中八九は癒らねえだろうが、あと一分に希望があるのさ。この女の飼育中に使う、電撃。ひょっとして効かねえとも限らねえからな——」

「へえー女に電気をかけるんです？」

「そうよ、気違いを癒す方法には、マラリヤ療法、インシユリン療法、睡眠療法、脳手術、優生手術など、いろいろあるが、頭部に触電させる電気療法——エレクトロン・シヨックっていうそうだが、俺の友達の脳病院の看護人は、略してE・S療法っていつてたぜ。最もよく効く手っ取り早い方法だって話だ。尤もかけられる気違いは嫌がるそうだが……」

「へえー、兄貴、ばかに精しいな——」

「何をいつてやがる、十万円儲ける商売じゃねえか。しかも、こちららはこちとらで、この女でうんと稼ぐんだから悪くねえぜ——荒療法ってやつでな。フッフ」



良太が子分の安にこんな話をするうちに、車はA国道を一散に走って、K街の外れの大きな洋館に停った。安がかけ下りて、素早く車庫のシャッターを捲き上げる。

白ナンバーが外に一台。その傍らへ、ライトバンは静かに滑り込む。

洋館の主は三人——、今は香港へ帰国中である。彼等はその子分である。

留守を預かる間に良太と安と、陳の三人が、親分の手管を見よう見真似で、小遣かせぎをやるうというだった。

安の仲間がA村にいて、噂に鶴子の話をきき、大胆にも一芝居うったのである。

△この女を飼って、様々に責めさいなむのを見物させりや、旦那方だつてきつとお氣に召すぜ。それに余興の電気責めで、万一、この女が正氣づきでもすれば二重の儲けだ。親分が帰るまで恰度一カ月。癒らなくたってともと。豚おやじの家まで運んで放り出しときゃいいのだ。何しろ相手が氣違ひときている。滅多にアシもつくまいて……。旦那方がお氣に召せば、女は露出症ときてやがる。話が早えや▽

良太はすっかり御氣嫌だった。車洗いの太いホースをガレーヂの表に引摺り出し、安と陳に女をかついでこさせた。

敷布を解き、鶴子の両腕を安が、両脚を陳が握って、良太は勢よく出したホースの水を、彼女の全身に浴びせかけた。

しぶきが、鶴子の体にこびりついた汚れをスラスラとはがして流していった。

両手足を掴んだ安と陳は、荷物でも扱う様に、ほとぼしるホースの水に向つてくると前後左右に廻した。

鶴子はキヤァキヤァと子供のような悲鳴をあげた。

すっかり洗い潔めると、彼女は、やつれてはいるが、まるで別人のように美しく生れ変わった。

「おっ、案外別嬪だぜ——。いかすじゃねえか——」

安が嬉しそうに叫んだ。

「旨いものくわす。それで体のつやよくなる。体肥える——。元氣

出さないとショウに使えない」

陳が監督にでもなったようないい方をする。

高台に建つこの洋館の、深い植込みに取囲まれた庭内は、裸の女を野外でこうして洗っていても、誰一人として氣付かぬ隔絶の格好の土地だった。

「そうだな、急いでは却って上玉が台なしだ。陳、お前のいうとうりだ。二三日介抱して、うんと旨いものを食わせてやれ——。お前に女を預けるぜ」

「OKよ。私に任せて下さい」

良太の命令に陳は嬉しそうににやにやした。

氣違ひでも肉体は健康だった。鶴子はよく喰ひ、見る見る活氣をとり戻していった。

ベッドだけのガランとした一室で、数日は足枷もなく、伸び伸びと彼女は暮らした。彼女の垂れ流しを厭いもせず、陳はこまめに清掃し、汚れをまめまめしく潔めてやった。

氣違ひにも愛情は通ずるのか、鶴子は陳に対しては、素直ないい娘となった。

陳にしても、鶴子に対する憐愍がいつしか愛情に変化して行くのを否めなかった。

出来れば、いつ迄もこうして狂女と暮していたかった。体の恢復と同時に始まる、恐ろしいショウへの、飼育の第一歩が踏み出される事を、陳は何か恐れる氣持だった。

もう十年以上も日本に住みついて日本人と変わらないと思っている陳が、三国人であるが故に、二十三才の今日まで、日本の女には相手にして貰えぬ不満があった。

バーの女や青線地帯の女までが、彼を三国人と知ると、掌を返した様に態度をかえた。

良太や安が、陳の女を口説くのを見て、面白がって、チン、チンとはやすから、いつも、彼が三国人であるということが曝れてしまふのだ。

短軀で、三国人の容貌をはっきり現わしている彼の顔は、そんなとき、遺瀕ない憤懣で曇るのであった。

鶴子の衰弱を理由に一日伸ばしに伸ばしたが、一週間もたつと、彼女にすっかりポリウムがついたのを、良太も安も見落すわけはなかった。

彼女と過した一週間が、余りにも切なく陳の心をしめつけるのだった。

「おう御苦労よ——。すっかりいい女になったぜ。ちっとも狂っている様にや見えねえな。ついでだから、これから女の大小便の世話だけは陳にさしてやるぜ——」

「ああいいよ。OKよ……」

陳は悲しげに、それでも鶴子の世話の出来る、秘かな嬉しさを穩して答えた。

一週間、彼女の世話をするうち陳は、鶴子の排するものなら口で受けてやってもいいとさえ思った。天衣無縫、平然と用を足す鶴子に、陳は愛情を通り越した、盲目的な溺愛すらひしひしと感じている。もはや彼の心は鶴子を自分一人のものに独占したがつっていたのだ。

「まだ十分でないがしかたがない。私、女を綺麗にきよめて、部屋につれて行きます」

「これだけになりゃあ結構というもんだ。金になるものを遊ばして置く手はねえ、きつと頼んだぜ。支度をして待っているから——旦那衆もお待ち兼ねだ」

良太は安を連れて、陳の部屋を出た。

支度——それは恐ろしい鞭であり、革バンドであり、さまざまな枷であった。

「没法子メイフアーズ（しかたがない）——」

陳はつぶやいて、うつろな瞳を彼にむける彼女のそばへ近寄っていった。

鶴子の肌は、陳の普段の手入れで、つやつやとなめらかに白く光っていた。

ガランとした部屋に、三人の旦那方がそれぞれクッションに深々と身を委ねて、良太と鶴子の刻々変る動きを追っていた。旦那方は等しく大きな黒眼鏡に、マスクで顔の半分を蔽っていた。

「もう、そろそろ限界だ。今日のショウはこの位にしておこう。それに俺だって随分草臥れたからな」

当の鶴子の体は、宙に大の字に俯伏せに浮いていた。四方の縄が、彼女の手足を、空間一杯に張らせていた。胸から腰へかけて、ぐっと弓なりに下った痛みに、鶴子はヒイヒイ悲鳴をあげ続けている。既に幾度かのショウで打たれ、責められたのか、白い肌の、殆んど全身に亘って、隈なく鞭跡が、赤い痕跡を残している。

「もう、誰方もこの女を鞭打ち、しませんか。いいですね。では降します」

四方の縄がゆるんで、鶴子の体は上下左右に揺れながら、ドタリと床に大の字に伏せた。

ぞろぞろと旦那方は引揚げて行く。

▲初日にしては大成功だ。一人一万円として三万円か、まあまあ悪くねえな——▼

床にぐったりと伸びた鶴子を眺めて、良太は、新らしい構想に耽っていた。

最初鶴子を後手にして重い手錠をはめて吊り上げ、長いパイプの両方についた足枷を左右にはめた時、彼女は痛さと驚きに、パンテイ一つの身を蛇のようにくねらせて逃れようとした。旦那方の顔が一樣に光った。

ついで小鈴の沢山ついた縄で全身を上から下まで巻いて縛り、足枷をはめて逆吊りにして、体をぐるぐる廻転させると、快よい無数の鈴の音が、鶴子の悲鳴をぬって快よく鳴り響いた。

それから——、グツタリとした彼女を更に左手と右足、右手と左足を括って床に転がし、旦那方の三本の鞭の雨の的として完膚なまでに打ちのめさせた。

そして、四方の縄の風吊り……。

▲何にしても、今日の責めにあの女は、何とか持ちこたえた。休養は二日間だ——。早速三日目には又、新らしい旦那衆に見て戴かなくっちゃあ▼

×

×

×

陳の一心の介抱が、案外早く鶴子を回復させた。だが、恋する陳にとつては喜んでいいのか、悲しむべきか。回復すれば、再び、恐ろしいショウが彼女を待っていたのだ。

第二回目のショウが始まる——。

良太と安が丸太棒をかついで現われる。

哀れにも狂える鶴子は、丸太の中央に手足を括られ猪吊りにぶら下げられていた。

「ええ——、これなるA村でとれた牝猪一匹。旦那衆のお好みどうり御料理願います」

彼女の手脚は、痛々しく荒縄で縛られて吊り下げられて、ヒクヒクと苦痛を表わしている。

彼女が悲鳴をあげぬも道理、革の嵌口具がピッタリとその口を塞いでいた。

「吠えぬわけじゃ。その革を外して、一度大声で吠えさせてやれ」
「承知致しました」

良太と安は、丸太棒を、天井から吊り下った太い縄の輪に掛けるのと、彼女の嵌口具を外し、鞭をふるった。

「ヒイ、ヒイ——ウツ」

と鶴子は激痛に叫んだ。丸太が彼女のもがくにつれて、ゆらゆらと宙に揺れ動いた。

ショウは熱中した。梯子に逆さまにはりつけた鶴子に、イルリガートルから、ドクドクと液体が注がれた。

「もっとだッ」

という声につれて、良太は汗をかいて、イルリガートルの液体を補給した。腹部は見る見る漲満し、ぐっと胸部に垂れ下ってふくれ上った。液体は彼女の体内を逆行して行った。

梯子を立て直すと、充満した腹の液体は、ぐぐと下腹部に下って臍から下が大きく妊婦の様にふくれ上った。

異様な音を立てて液体がぶちまけるように流れ落ちる。

その時、安の後ろに立っていた陳が憑かれたもののように鶴子の

縛りつけられた梯子の裾に走りよって跪まずいた。

△陳があんな芸当をやるとは思わなかった。こいつはとんだ飛入りだ。お蔭で旦那方は大喜びだった。こいつは面白いぜ——▽

こうして、第三回、第四回のショウには、陳の芸当が挿入されるようになった。既に陳自体が、ショウの被虐者の一人になっていたのだ。

そろそろ、この主が帰る日が近附いてきた。良太にとっては、とっておきの電気責めをやらなくてはならない。

△さて、うまくショックで癒ってくれたら十万円か。しっかりたのむぜ▽

E・S療法は、その前に、精神病者にラボナールかチクロパン等の睡眠剤を注射して行うことになっている。

だが良太は睡眠薬なしに実施しようとしている。

睡眠薬を使ってでは責めにならないからだ。

最後のショウの日——。二、三の緊縛と責めが終ると、兼ねて取寄せておいた理髪椅子を改造した拷問椅子に鶴子を座らせた。

手足を革バンドによって、確っかりと固定させる。弱電を頭部に触電させるため、必要な電導体を彼女の頭部につける。そしていよいよ「フランケンシュタインの花嫁」さながらに、頭部に彼等にとっては十万円を賭けた電撃が走った。

一瞬「ギャッ」という絶叫が走って彼女は悶絶した。良太が精神病院の看護婦から聞き囁った方法で、失敗しても命には別条ないとは知っていても、流石に気を失なった彼女の哀れな姿に、フト良心がうづいた。

陳が走り寄って革バンドを解き、気を失なった彼女を抱きかかえて消えた。

嗜虐を好むさすがの旦那衆も、余りの凄惨な状景に鼻白んで、そくさと座を立った。

「呀ッ、気がついた——。ツルコ、ツルコ！わかるか？ウン？わかるか？」

鶴子は混迷からさめた。

頭脳が割れるように痛む。

何もかもが彼女にとって何一つ覚えがなかった。ズキズキと体の節々が痛む。そっと触れると飛び上る程いたい。

手首の縄の跡、鞭の傷——。

混濁した彼女の脳裡が、今、自分が危険にさらされている事を咄嗟にさとした。

そして自分が裸であることも知った。

途端に激しい羞恥が体を包んで、痛みをこらえて、彼女はハタと胸を両手で蔽って、豊満な乳房を隠した。

「あ、あなたは誰れ？」

「おう、気附きましたですか——。私、陳。ずっと鶴子さんのお世話した。氣附いて私とても嬉しい。貴女は氣違いでした。ここへ連れてこられて、何回も何回も、無惨なショウに出ました——」

「わ、わからないわ。何にも——」

「あなた、病氣直す。家で十万円とられます。それに今、癒ること分ると危険です。氣違いのままいること安全です。私、あなたのことと何でもしました。正気になる、裸羞かしいが、もう二日の辛抱で

す。我慢するんです」

「あのう私——お便所が……」

「構うことありません。私います。いつでも役に立ちます——気が狂っている時、私、あなたの便所でした。何、構うことない。今迄通り私使って下さい。私、あなたの為なら、喜んで奴隷になります。それに外へ出てする、とても危険です」

正気に反った鶴子は、羞恥で全身がほてった。自分の体がどうな



が、彼女の気も心も打ちくだく様に続いた。

「御免なさい。私もその一人——。だけど私、貴女を心より愛します。けれど貴女は、ショウによって正氣づいた。病氣直った。それは悦ぶべきです」

陳は静かに彼女の肩をさすってやった。

間もなく羞恥にはにかみ乍らも、いつもの様に用を足さざるを得ない彼女の姿を瞼に描いて、陳の心は、激しい鼓動にゆさぶられる

っていたかも知らないのだ——。

「私、ショウって、どんなことしたのかしら——」

「精しくいう、貴女驚きます。お金ある人の見世物に、貴女縛られ、鞭打たれ、いろいろと虐待されました。それだけです」

「じゃあ、私は——」

陳は悲しげに眼を伏せた。余りにも数多くの旦那衆の騷りものにされただからだ。

「判っきりというあなた悲しむが、気の狂った間、沢山の人、あなたにひどいことしました。私その人達、全部知っています」

「あッ——」

俄破と鶴子は汚れたベッドに打伏した。激しい取返しのおかぬおえつ

のであった。

往った時と同じように敷布にくるまって、鶴子はA村の我が家に送り帰えされてきた。

「懸命に加治祈禱をやり、化学療法をも併せて行なったが、お娘ごには効目はなかった。だからお約束の金は一文もいらぬ。この通り戻しておく——」

良太は神妙にいった。最後の電撃で十万円儲けそこなったが、良太の懐ろにはショウの儲けがたんまりうなっていた。

「いよいよ手離すとなると未練もあるというものだ——いい女だったが、気狂いでさえなけりゃな」

良太は流石に別れるとなると、何か一抹の淋しさが伴った。

がっかりした様な、再び厄介者をかかえこんでウンザリした様な、源造一家を尻目に、ボロの出ぬうちにと、良太と安はさっさと車にのった。

「私、鶴子を座敷檻まで連れて行く。仕末して後で帰る——」

「余計なことを喋べるなよ陳。じゃあアバヨ」

陳を残して車は去った。

見送った彼は敷布を丁寧にとくと、鶴子の手を引いてそろそろと離れに向った。

「どうもお世話でしたな。矢張りこいつの病気は、どうにもならんかな。ああ困った厄介者じゃ。いっそ死んでくれれば助かるものを——」

源造を始め一家の者は二人のかたわらから、ぶつくさと不平を並べ乍らつづいた。

うつろ氣に聞いていた彼女の瞳が、一瞬きらりとするどく光ったのを、陳の外、誰も氣付かなかった。

「私、元どうりに娘さんの鎖はめまます。病気、なおせなかったお詫にここの座敷片附けます」

「えらい世話かけるでの。じきに又汚のうなるじゃろうが、ま、事のついでに頼むとしようかい」

一同の去つあと、二人は顔を見合せた。鶴子の臉に初めて、熱い涙がすーっと伝って流れた。

しっかりとお互の手が握り合わされた。

茶の間でチンチンと真夜中の二時がなった。

「鶴子は我が家の勝手知ったるところから、相当の金子と身の廻りのものを持ち出して、陳と打合せて駈落ちしました。源造は世間体からも鶴子の失踪を、ひたかくしに隠し、内心ホツとしていた事でしよう。いまごろ何処かの地の果てで、陳と鶴子は案外楽しい生活をもっているのかも知れません。陳がその後、鶴子の奴隷となつて、相変らず、人間便所になつてゐるかどうか、そこまでは誰も知らないであります」

ナイロン氏の長い話は終わりました。久し振りの彼の話は矢張り実があつたようです。

緊張をほぐす様に、ゴルフ氏が次いで話をつづけました。秋の月は益々冴えかえってきた様です。

第二十四話 悲願千人縛り

酒興の上とはいいい乍ら、浜名大作氏もとんだことを公約したもの

である。

株主総会の崩れの二次会で、K電興業常務取締役の浜名氏が、つい誘われる儘に大株主の岩木氏始め、この株主と酒席を共にしたのが、そもそもことの始まりだった。

数名の芸妓に取囲まれて、すっかり御気嫌になった岩木氏が、酔うといつもの癖で、鞆からとり出したのが数十葉の写真——

奇クの分譲フォトや、自身の傑作の責めや縛り写真を、得々と芸妓や一同に披露するのである。

岩木氏にいわせれば、ストリップやヌード写真は、今や素人やカメラ狂の初步のすること。病膏盲に入り、女体の深奥を探索するに、責め写真、緊縛フォトに如くものはなしと、一同を煙に巻き、彼が、如何に苦心してこれを蒐集したかを、そのウンチクを傾けて説明するのであった。岩木氏は誰憚ることもなく

「斯くいう私は、サジストであり、アブニストでもあります。世を挙げてのレジャー時代に、我々、レジャーを如何に有効に使うかに腐心している重役族は、すべからず猟奇を探索し、アブに徹すべきです」

と、しきりに、女体緊縛の興趣を力説するのであった。

「女は飼育すればする程、可愛い動物であります。重役と世間で呼ばれる私達が、世の亭主族の如く女房に飼育されている現状は如何に情けなきものでありますか——。私は敢然と女房を飼育し、緊縛女性の第一号として、女房の写真をとったのです。そして、ここに御披露する如く、既に、様々の職業の女を私自身この手で縛り、責め、且つはカメラに納めたのです。いうなれば、この写真の一枚一枚に、私の汗の結晶と、努力の報酬がかかっているのです」

芸妓達は眉をひそめ、しきりに岩木氏の悪趣味をけなし乍らも、眼は初めて見る、女体の緊縛のポーズに吸いつけられている。頬を染める女。取り澄まして見る女。嫌悪そのものといった表情の女——いや、様々である。

その一人一人の芸妓の顔を読んで、最も反応の多い、被虐を好みそうな女を突きとめるのが、これ又岩木氏の露悪趣味の要素の一つでもあった。席を変えて、小当りに当れば十中五六は、彼の思惑通り事は運んだ。

かくて彼の蒐集は徐々にふえて行くのである。

株仲間間は、又岩木氏の露悪趣味が始まったという顔でニヤニヤし乍ら、浜名氏の方へ廻してきた。

浜名大作は至極紳士であり、女遊びはしても、未だ嘗って、こうしたアブの世界に興味を抱いたことはなかった。唯、彼のたった一つの悪い癖は、人に負けることの嫌いなことだった。

廻される写真を次から次へと見て行くうち、浜名氏は二度許りギョツとした。

「おやッ、この女は、クラブ“YZ”の春美じゃないか——。おやおや、こいつは、僕の会社の秘書課の山田嬢だ——。これは一体どうした事だ。あのおとなしい山田も、“YZ”のナンバーワンの春美も、ギリギリに縛られおって……しかも裸で——ウーン」

浜名氏は些か度胆をぬかれた。大株主とはいえ、齢既に五十幾才かの岩木氏が、かくも妙齡の美女を、次々と自由に縛り得る才覚に、彼は次第に羨望と、軽い嫉妬を覚えた。

「岩木に出来るのなら、この僕にだって——年も僕は、彼より六つも若い五十才になった許りではないか——。こいつは女遊びより

も遙かに面白いかも知れんて——」

浜名氏は、ここで何とかして岩木氏に鼻を明かしてやりたい自負心にかられた。さりげなく写真を眺めるフリをして、彼は懸命に、その緊縛の仕方を頭に刻んでいた。

一廻り見終った頃、浜名氏はおもむろに口を開いた。

「いや、岩木さん、結構結構——。大いに眼の保養をさして戴きましたよ。ところで岩木さん、あんた悲願千人縛りの話をきいた事がありますかな——」

「えッ、悲願千人縛り——。ホホウ、千人の女を縛るとなると、ちっとやそつとの事じゃない。この私で、今の処、左様、二十人位かな——。一体誰方がそんな悲願を——？」

「ハハ、いわんつもりでしたが、写真を見せられたので、つい喋べる気になった——いや、実は私が、ホンのつまらぬきっかけで、只今進行中ですので……」

「えッ、浜名さんが——」

今度は岩木氏が、ポカンと呆氣にとられた顔になった。浜名氏といえは、仕事一点張り、真面目一方の、品行方正を絵に描いたような紳士だと思ひ込んでいたからだ——。

席にはべった芸妓達や株主仲間迄が、吃驚したように一斉に浜名氏を見つめていた。

「いや、大したことはありませんがね、ぼつぼつと——」

「それはそれは。それで、どれ位女を縛りました？」

浜名氏はぐっと詰った。実を申せば、一人だつて縛った事がない。酒の勢いがいわせたのだが、岩木氏は何処迄も真剣な顔付である。もうこうなれば一同の手前冗談ともいえない。浜名氏はめまぐ

るしく、脳裡で、早速にも縛りに応ずるような女を頭勘定し乍ら、表面はさも多過ぎて判っきりせぬといった体で

「左様——、五十人……いやもっと多かったですかな——」

「えッ、既に五十人も——。これは是非拝見したいもので——」

「ハハ、いやもう最近は、写真をとるのに忙がしくて、現象や引伸の間ありませんが、何れお眼にかけましょう」

「是非是非、ところで何時頃になりますかな。いやもう、私は一日も早く見せて戴きたいですな——」

「じゃあ、次回の株主臨時総会にでも、又この家で——」

「ウーム、あと三カ月ですな。こりゃ待遠しいですな」

「ハハ、何しろ千人縛りとなると、私も随分忙がしくてね、毎日一人づつ縛っていても、ざっと三年はかかります。しかも私は、同じ女は二度撮らない。絶対一回主義です」

「いや恐れ入りました。これはとても私の出る幕じゃない。これはこれは」

岩木氏はコソコソと写真をかき集めて鞆に納め乍ら、感嘆にも似た溜息を洩らした。

「念の為に聞きますが、それはまさか近頃の風俗雑誌の分譲写真も交っているのじゃないでしょうな。お恥かしいが私も白状しますと、今お見せしたフォートの半分位は、雑誌社から取寄せたものでしてな——」

「いやいや、全部私がじかに撮ったものです。その為に私は、写真には必らず私がとったという目じるしをつけております」

浜名氏はそんな風俗雑誌自体すら知らない。況してや分譲写真云々など知る筈もなかった。岩木氏にいわれて一度その雑誌を買って

見ようと、その時咄嗟に考えていた。

△三カ月で少くとも、五十人以上は撮っておかねばいかん。こりゃトんだ事になったぞ。会社の新規事業の計画よりコトだて——▽

浜名氏の負けず嫌いの癖が、とんだヒョウタンから駒で、ぬけぬけと岩木氏に公約したものの、さて、といって、早速縛れる女の目算もなかった。これからの、数多くの女との、縛りの交渉を考える、胸に鉛をぶち込まれたように心が重くなった。

△三年前から、ライカで時折、写真をとっていたのが、せめても女をとるのに役に立つかも知れんが、さてとなると——。こりゃえらいこっちゃ▽

x

x

x

浜名夫人は評判の貞淑な人である。夫の負けず嫌いで、今迄にも随分損をしたり、困った時もあったが、いつもにこやかに、愚痴や不平をそのためにこぼした事は、ついぞなかった。

その夜、浜名氏に今夜のいきさつを聞かされて、流石の美也子夫子も、ことがことだけにハタと困惑した。

△裸で、しかも縛られた写真を、人に見られるなんて、私死んだって出来ない事だわ。しかも悲願千人縛りだなんて、いくら何でも、少し頭がおかしいのじゃないかしら……、けれど、一旦いい出したら後に引かない主人の事だから、何としても今度の臨時総会までには、やり通すに違いないわ。私に、その第一号になれっていうけど——▽

深窓育ちの美也子夫人にとって、浜名氏の爆弾的宣言は致命的なものだった。

「どうしても駄目かい。僕は暴力を使って、そんな行為をしたくな

いのだ。何処迄も話し合いの上で、協力して貰うつもりなんだ」

「だって貴方——、自分の妻の裸のそんな写真を、他人にお見せになるなんて、余んまりですわ。子供だってもう大きくなっているし、若しチラリと何処かで、そんな事が耳にでも這入れば大変じゃありませんの。それに、私、この年で、子供も産んでいるし、自分の体に自信ありませんもの——」

美也子夫人はなるべく夫を刺激しないよう優しく拒否した。

「そりや僕だって、岩木のように自分の女房を裸で縛った写真を他人に見せる程、悪趣味じゃないさ。しかし、どうすればいいんだ。」

「私が聞きたい位ですわ。けれど若し私一人を含めたところで、到底及びきませんわ」

「そりやそうだ。プラス一に過ぎんからな」

浜名氏は、必死に承知しそうな女の顔を、片っ端から思い浮べて見たが、十指にも足りない。

△僕の会社のB・G七十人近くを、一斉に縛ったら、忽ちにして揃うが、とんでもない夢だ。バーの女で四五人、芸妓で二三人、それに秘書課の山田や、うちの女中二人を加えても、十人足らずじゃどうにもならん。さて困ったことになった▽

浜名氏はすっかり後悔して、宵の酒もすっかりさめ切って、蒼い顔で考え込んでしまった。岩木氏の努力が今更のように分る気がした。

「まあ、いい事があるわ。モデルを新聞で募集するのよ。どうせ、風俗雑誌のモデルだって、始めは募集の広告を見て、そうなったに違いないんですもの——」

「誰が募集するんだい？」

「私がやるわ。うんという条件を出せば、きつとくるに違いないんだから。貴方の為ですもの、羞かしさを忍んで、どこかの貸ビルの



見える。

事務所の片隅についたてを張り廻し、即席の脱衣室とスタジオに

事務所の一室で私が会って見るわ。女性

性は案外、同性を覗る眼が肥えているものよ。少し悪い様だけど、仮空の映画

会社のニューフェイス募集ってことに

にしてもいいし、絵のモデル、写真モ

デル、いろいろと名称を変えて、ジャン

ンジャン出して見るわ——」

▲なる程、女房は役者が一枚上だ。そ

れもよからう。女房の好みにあった女

性を、裏が片っ端からパチパチ撮す。

一回数分のモデル代に二千円もやれば、

まさか嫌とはいまい

浜名氏は美也子夫人の提案に、拝み

たい程嬉しくなって、無言でかくる彼女

の肩を叩いた。

× × ×
重役は時間が自由だ——。

浜名氏は美也子夫人と、今日もBビ

ルの三階の貸事務所の一室に陣取って

いる。

美也子夫人は、太い大きいロイド眼

鏡をかけ、ベレー帽に、軽やかな服装

で、如何にも何か芸術家振った女性に

つくってある。

夫婦で智恵を絞って広告した文が

「インスタントモデル募集。十分間二千元。但し百名限り。(午後一時から五時まで) 急就社スタジオ」

大阪の二流新聞全部にパツと出して、翌日一時前に夫婦がBビルに出向くと、何と四、五十人もの、いろとりどりの女性が列をなして並んでいる。Bビル始まって以来のことで、貸ビルに同居する、あちこちの若い会社員が、何かとそわそわして仕事もおちおち手につかぬ状態になっていた。

浜名氏は喜んだり、大いに照れたり、早速愛用のライカを急造スタジオに据えつけ、真白な、堅さのとれぬ、数本の買ったての縄を準備して手ぐすねを引いた。

モデルの交渉はすっかり夫人に一任してある。

美也子夫人は度胸を据えて、同性の気易さから、ズバリ用件に入る。謳い文句は紙にかいてある。

「お名前も住所もききません。ヌードモデルになって戴くのです。

脱衣に二分間、準備に五分間、撮影に一分間。着衣に二分間、合わせて十分間で二千元差上げます。雑誌、新聞等公けのものには発表致しません。メーカーは御自由です。唯一つ、私方の希望として、ポーズは必ず縄で縛った姿です。よろしければ、脱衣室へ御這入り下さい。撮影完了して帰る際、二千元をお渡し致します」

上品な美也子夫人の言葉に、モデルはふとつられたようにうなずいて、脱衣室へ入る。

堂々とスタジオに現われる女。羞恥に身をくねらす女。不安におどおどと立ちすくむ女。好奇心に辺りを見廻す女ETC……。

浜名氏は第一号の現われた時、ドキリと胸を躍らせ顔を赤らめたが、強いて落着いて、軽く胸に縄を二三巻き、くるくると巻きつけると、大急ぎでシャッターをきった。

余りに呆気なく終って、モデルがもしもじしているのを追い立てるようにして、浜名氏は冷汗を拭った。

モデルの頭にそつと挿した菊の花——、これが浜名氏撮影のトレードマークである。

数人を次々と終えて、流石に彼は疲れを覚えた。

「この調子だと千人縛りも、あながち夢ではないぞ。しかし一人二千元として千人で二百万円——。それに貸ビル料、フィルムを入れると、こりゃ相当の散財になるわい——」

色々に縛りの様相を変え、ポーズをかえてとると、十四五人で浜名氏はのびてしまった。

「こりゃ重労働だ——。会社勤めの比ではないぞ。この調子だと、百人は軽いが、扱、儂の体の方がのびてしまいそうだ」

彼は夫人に連絡して、尚も陸続と続く、モデルの列を打切って貰った。

不満のモデルに、交通費と明日の約束の番号カードを手渡して、やっと二人切りになると、流石に緊張がとけたのか、美也子夫人もぐったりとなっていたという次第——。

「今日も来そうかな——」

「ええ、昨日約束の番号カード渡した人が二十人近くもあったわ。もうそろそろ現われるでしょう」

「儂はお前に、謹んで礼をいうよ——」

「あら、私こそ——。毎日毎日退屈だったのに刺激が出来て、いい

人生勉強だわ。それに貴方だったら、昨夜なんか、まるで人が変わった見たい。急に二十才ぐらい若返った様だったわ——」

美也子夫人は、うるんだような眸で浜名氏を熱っぽく見つめた。

「この人にとっても、きっと回春剤になったに違いないんだわ。二十万円も惜しくはないわ——」

浜名氏は眩しそうに眼を逸らした。

「西園寺公は、若いお女中を両側に寝かせて、回春をはかったそうだが、僕はこうして次々と、一人一人違った女を縛ることによって確かに忘れていた生命の力の躍動を感じるようになった。ウン、実にいい女房だ——」

「美也子——、縛るということは難かしいものだ。僕は昨日の十四五人ですっかり種切れだ——。どう縛ったって似たりよったりだ」

「多分そんな事でしょうと思って……。ハイ、これ——」

こういって、貞淑なる美也子夫人は、浜名氏の前で風呂敷包みを解くと、バサッと数冊の雑誌を置いた。

浜名氏は一冊を手にとる。

雑誌は「奇譚クラブ」だった。

×

×

×

「と、どうも『奇ク』の太鼓持ちになりましたが、浜名大作氏も、ミイラとりがミイラになった例で、せっせと今頃は千人縛りに、意慾を燃やしている事でしよう」

ゴルフ氏は笑って、煙草にライターを近づけました。

「モデルひとりひとりの縛りの描写がないんだね——」

「とんでもない。ひとりひりを懇切丁寧に縛っていた日には、夜が

あけてしまいますよ。とりあえず百人ですからね——。『奇ク』を総ざらえしたら百人の縛りが出てくるでしょう。何しろ、浜名氏の縛りのお手本が『奇ク』ですからね——」

「何処まで本場で、何処まで嘘なの——」

ワイン氏が真赤な顔でからみました。

「みんな本場で、全部嘘さ——」

ドクター氏がいったので、賑やかな笑いが渦まきます。

クラブに静かな夜気が流れる頃——、八人の退屈男は、ゴルフ氏の「千人縛」の悲願をめいめいそっと胸に抱きしめて、散って行きました。

『奇譚三十九夜』の会合に出席希望者を募る。

辻村隆主催の「奇譚三十九夜

物語」で活躍中の八人の退屈男

に勝るとも劣らぬ暇のある紳士

淑女を次回の会合に、ゲストと

してお招きしたく、こゝに出席

希望者を募ります。

我れと思わん勇士烈婦の参加

をお待ち致します。御希望によ

ってはレギュラーとして毎回御

出席下さっても結構です。個人

の秘密は厳重にお守りします。

連絡場所明記の上お申込み下

さい。どのようなこととお書き

になっても御自由ですが、詮衡

の手がかりになる事項を出来る

だけ詳しくお便り下さい。

御出席頂く方には、日時場所

その他必要な事項を親展速達に

て連絡致します。貴方の豊富な

話題を以って、一夕を愉快に語

り合おうではありませんか。

△編集部辻村隆宛▽

— マゾヒストの夢幻小説 —

奴 隸 哀 歡

明 獅子鼻

私は、日々の銭湯に通うときが何よりも楽しい時間です。というのは私にとってはこの時間が、私だけが持つ秘密のプレーにひたることの出来る時間だからであります。

私は家を出るとき、こっそりと家人に悟られないように、シャツを脱ぎすて、素肌のうえに夏なれば浴衣一枚、冬だと古いレインコートを一枚ひっかけて家を出ます。四つ辻を曲ると用意した五十円の穴あき硬貨を両の鼻の孔へグツと押し込みます。ピリッ、とした痛さを伴って私の鼻孔は細長く上につり上げられて鼻は上向きになり、とても醜い顔になります。呼吸をすると、穴のあいっている五十円硬貨のため、ピーピーと笛のように鳴るのも哀れです。それを道行く人に見て貰うことで、私の自虐性と劣等感を極度に満足させ得るのです。特に若い女性に見て貰うことが、勿論このプレーの目的です。

私の銭湯へ行くのは大抵夜の八時から九時頃ですが、それでも映画帰りの若いアベックや、デートを済ませて嬉しい想い出を胸に包みながら帰ってくるBGが可成りの数です。銭湯は近くにもありながら、バスの停留場一つを越した処にある銭湯を選んで行くのも、より多くの人に観て貰うためであります。

先ず五十米ばかり前方から若い女性が来ると、上着を大きく開いて裸身を露出します。そして鼻の孔を大きくふくらませて彼女に近ずきます。汚いもののように足早やに横を小走りに逃げて行く女。キツと私をにらみながら、「まあ、汚ならしい……」といって過ぎる女。中には「キヤーツ」と叫声を挙げて逃げて行く少女もあります。別に女性を驚かそうとする気持は毛頭ないのでから、そんな人にはとても気の毒に思います。

こんなプレーが約半年も続いた、ある冬の夜。それは宵のうちから小雪のちらついていた寒い寒い一月の中旬でした。

いつもの道を例のとおり素肌に合オーバー一枚で歩いていくと、暗い道の右側に一台の小型自動車が停っていました。別に気にも留めずにその車に近づいて行くと、突然パツとヘッドライトが点されて、中から二十才ばかりの女が降りて来て、私の眼前に立ちはだかりました。私はもうその前から五十円硬貨を詰めた鼻の孔を大きくふくらまし、オーバを開いて裸身を寒夜に晒していた事は勿論です。

女は、「あんた、よい処へ連れったげるからこの車に乗りなさい」といいます。夢のなかではかすかに期待していた出来事ではあり



ましたが、現実となると一寸驚きました。急に言葉も出ないで茫然としている私を押し込むように女は私の体を車内に突き入れました。「早く早く、何をボンヤリしてるの……」という手早くオーバをもぎ取って、風呂行道具も共に路上に捨てると、私の両手にガチャリと手錠をはめました。警察の車かと思いましたが、そうでもなさそうです。

それから一時間も走ったでしょうか。車は郊外の丘陵地にある広大な邸宅の前で停められました。此処が私が現在飼育されている、私の女王様のお邸でした。

あ の 夜 か ら も う 一 年 は 経 っ た で し ょ う 。 最
初 は 妻 の こ と 、 娘 の こ と な ど が 案 じ ら れ ま し
た が 、 今 で は も う 完 全 に 社 会 人 と し て の 人 間
性 を そ う 失 っ て 、 女 王 様 に 仕 え る 一 個 の 奴 隷
と し て 、 た だ 女 王 様 の 鞭 一 筋 に 生 き 、 そ の 御
命 令 に は 絶 対 服 従 し 、 毎 日 の よ う に 苛 酷 な お
仕 置 き を 受 け る 私 は 、 女 王 様 の た め の 生 き た
玩 具 に す ぎ な い 私 自 身 に 満 足 し 、 こ の 世 界 で
私 な り の 愉 し い 使 命 を 抱 い て 新 鮮 な 生 甲 斐 を
信 じ て い る の で す 。

女王様は、世にも美しいお方です。房々と

した漆黒のお髪、理智的に澄んだお瞳、大きく健康そうな形のよいお鼻、体重五十六キロ、均整のとれた御立派な御体格。こんな立派な女王様から鞭打たれ、こづき回されて虐められる私は、体重僅か四十五キロ、色黒くやせっぱち、はるかに空みてる獅子っ鼻、全くこんな醜い男に生れてこの果報を受ける私は幸福でいっぱいです。

あ の 夜 以 来 一 年 余 り 、 私 は 足 に は 鎖
の つ い た 足 錠 、 手 に は 十 五 セ ン チ ぐ ら
い の 間 だ け 自 由 の き く 手 錠 、 腰 に は 皮
製 の ふ ん ど し が 喰 入 る よ う に 巻 き つ け
られ、鼻の孔には当時の五十円硬貨は抜きとられて、よく子供が玩具にしているビー玉、つまりラムネの瓶口にはいつている空色の硝子玉、あれよりも一回り大きい、矢張りガラス玉を押し込められています。それ故私の上向いた鼻孔は更に大きくふくらみ、小鼻のくぼみなどは全く失われ、鼻孔は大きく開いたまま閉じることは出来ません。この玉は、おそらく私が死んでも抜かれることはないでしょう。鼻全体が蒼白く灰色になって、そのうえまだウンと突っ込まれた硝子玉の前に、さびついた鉄の鼻輪を通され、長い鎖がそれに

ついていて、女王様がお呼びのときは、その鎖をひかれる仕組になっています。

女王様のお供を仰せつかって街へ出るときも、その鎖をひかれて、私は犬のように四つ這いになって、ヨチヨチ歩むのです。膝がしらで石ころの道を歩くのはとても痛くて、つい足が遅くなると強く鼻鎖をひかれ、お鞭が私の尻に乱打されます。膝がしらから血を流しながら、鼻での呼吸を全く閉ざされ、口を開けてハアハア呼吸をしながら、よだれを流しているのです、よく女王様から怒られ、ハイヒールの先でこづかれ、ビンタを受け、鼻輪を地にすりつけられて、そのうえから散々踏みつけられます。そのたびに痛さに堪えかねて「ヒイヒイ……」と声にならないお詫びの言葉を繰り返す私です。

それに生れつき鈍感な私はいつも御命令を聞き違えてヘマをやる時が多いのですが、そんなとき女王様は、散々鞭打たれたすえ、小さくなって足許で頭を土間にすりつけてお詫する私の顔をおみ足でお蹴り上げになります。仰向きに倒された私の鼻の孔へは、左右一本ずつの煙草が突きさされて、ライターで火を点けられます。そして同時に、洗濯機から出されたばかりの水びたしの下着類を口一

杯に押し込まれるのです。呼吸の出来ない苦しさと、煙たさに眼から涙をポロポロ流しながら、お煙草を鼻の孔から落さないようにして、それが灰になるまで、完全に吸い尽さねばなりません。若し途中で落したり、吸う力がなくなると、お煙草の火が消えようものなら、又鞭の雨を受けながら、何回でも、どんなに煙草が短かくなっても、ライターで火が鼻の先で燃やされます。その苦しさをじっと我慢していると、鼻毛がヂヂーッと音を立てて焼けているのがわかります。ヒリヒリする鼻、一杯灰の詰った鼻の孔を上向けて、女王様のお顔を見上げるのですが、椅子にかけられた女王様は、鞭をお握りになったままさも御満足そうにお微笑みになりながら、私を見下ろしておられるお姿が、モウロウと拝されるだけです。

「どう!! ちつとは骨身に応えたか……」
というお言葉。

私は一生懸命にお詫び申し上げるのですが、口が塞がれているので思ったように声が出ません。すると女王様は、

「横着もの、返事をしないか」
と仰っしゃって、又お手づから鞭が続けさまに、顔といわず胸といわず、腹、足と処を

問わず何回も何回も鞭打たれるのです。

その痛さ、辛さ、情なさ。でも私はただ身を悶え、のたうち回るしかありません。こんなことで私の体には血の流れる鞭跡の生傷が絶えたことはありません。これは性来愚鈍な私が、一日に一回は必ず受ける最も辛いお仕置の一つです。

十一月三日は、女王様の御誕生日です。その日は沢山なお客様が来られるというので、私はその前日から一睡もせず、水一滴も頂けずに、鼻輪の鎖をゴロゴロひきずりながら、手錠足錠の不自由な体を、冷たい広間のリノリウムの上をはい回って、冷たい水で拭掃除を命じられました。手の鎖が十五センチ余りしか開かないので掃除ははかどらず、それでも脂汗を全身に光らせながら、コツコツと床拭きを続けました。

気がつくと、もう東の空が白み、夜が明けたらしく、お座敷の時計が八時を打っています。突然、鞭を持ったパジャマ姿の女王様の御視察です。ハッと身体が緊張して、出来るだけ両手を広げて拭き出しましたが無駄です。広いお座敷のまだ八分通りしか拭けていません。俄然、いかめしい女王様のお声。
「まだこれっぽっちしか出来ないの。このな

まけ者!!」

お声と一緒に皮鞭は「ピシリ、ピシリ……」数限りなく私の背に、顔に、尻に、雨のように打ち下されました。

「ハイ、ハイ」

私は、ただもうその鞭の下で一生懸命、身体ごと雑布を往復させながら、こすり続けたのですが、突然鼻輪の鎖をピンと引かれて仰向けにのけぞりました。

「一度性根を入れ換えてやるから……」

引づられてきたのは、裏口の井戸場です。

女王様は女中をお呼びになつて、私の鼻輪をつるべの綱にしぼりつけさせられました。つるべは私の体重でスルスルと下り、私はそのまますっぽりと井戸の中へ吊り下げられたのです。滑車が止つ

て、私の身体は冷たい冷たい井戸水に腹の処までつけられました。もう生きた気持ちもありません。鼻の孔が上向いたまま吊り下げられているので、その痛さ苦しさに失神するこ



とも出来ません。

そんな苦しみが何時間続いたのでしょうか。やっと引き上げられたのは、もうおひる近い十一時を回っていました。井戸端の敷石

の上に引き上げられた私は、厳しい冷たさにこごえて声も出ません。鞭を持った女王様と女中さんの立っていられるのをかすかに見上げて、無意識のうちに平伏しました。

「さあ、もうお客様がお越しになる時間よ、お出迎えしないか」

「ハイ」

立ち上りましたが、眼がくらくらします。

お座敷の掃除は、女中さんがやってくれたのでしよう。私は命ぜられるままに、今度は御門から玄関へ通じるお庭の小石の上に正座し、鼻輪は短かくして地上に結びつけられたまま、尻を高く上げ気味にして平伏し、美しいお客様の御来場をお待ちするのです。

間もなく香ぐわしいお化粧の匂いと共に、暖かそうなオーバーの裾と、ピカピカと光るハイヒールを見上げたまま、大きな鼻を小石の中へ突っ込みながら平伏しています。

「まあ、これが美智子さんの奴隷なのね。可哀そうにこの寒いのに裸で……まあ、あの背中、傷跡、痛そうね、まだ血が流れてるわ。

余っ程悪いことをしたのね……」

「悪いことしたんじゃないのよ、美智子さんのご気嫌が斜めだったのよ……」

口々に私を話題の中心にして通って行かれます。中にはソツと私の背に手をあててみて「あら、冷たいわ、生きてるのかしら……」

「人間もこうなってはもう駄目ね」

と、見はなして行く奥様。

そんな声を聞き、じっとその恥かしさを堪えながら、私は井戸につけられて冷たくこたえきった身体を、冷たく痛い小石の上に、鎖のついた足を行儀に揃え、ひれ伏しているのです。

十二、三人もの美しいお客様が通られたかと思われるとき、又女王様がこられました。

「くるのよ。いつまでボンヤリしてるの！」

と、いって、ギュッと私の頭をお靴のかがとで踏みつけられます。

「ハイッ」

驚いて飛び起きた私は、鼻輪をひっぱられてお座敷の中央へ引きすえられました。

美しく着飾った女のお客様たちの視線は、一様に、鼻輪を引っ張られて這入ってゆく傷だらけの悲しい私の姿に集中します。

次にはどんな仕事を命じられるのでしょうか。ビクビクしている私は、お座敷の中央に据えられている事務机の上に仰向けになつて寝かされました。手錠足錠それから鼻の鎖も取り去られましたのでホッとしたのもつかの間、両手両足は机の脚に、その鎖で堅く縛りつけられ、首だけが机の袖から外へ、ダラリと垂れ下るのです。したがって大きな鼻の孔

は天井に向けられ、その大きく開かれた二つの鼻孔へ、今度は太い洋蠟燭が突きさされました。そして仰向けに縛られた私の胸から腹へかけては、銀盆に飾られた美しい豪華なデコレーションケーキが載せられています。ここの私は、人間燭台と人間机との役をしなければなりません。もちろん微動だも許されず、呼吸さえ止めて全身を静止していなければならぬ仕事です。

やがて女王様のお手ずから、私の鼻の孔に突っ込まれた蠟燭に火が点されました。ジーと燃える蠟。そして熱い熱い蠟涙が私の鼻の孔を埋め、ふくらんだ小鼻を伝って顔に流れます。その熱いこと。

鼻は蠟涙で完全に詰まられていますので口から吐くか細い呼吸、それも余り大きく呼吸すると蠟燭の火が消えるでしょうし、第一身体を少しでも揺がせば腹の上のデコレーションケーキが崩れます。若しそんなことにでもなれば、お仕置を受けるぐらいのことでは済みません。呼吸を詰め、手足を縛られて、身体を静止して、熱い蠟涙を顔に受ける苦しさ、お客様方は私の苦しんでいる姿をお酒の肴にして御馳走を食べ、笑いさざめいていられます。哀しい身分の私は昨夜から水一滴も頂い

てはいません。

やがて腹の上のケーキにナイフがさされ、ケーキに点された小さい蠟燭の火が消えると女王様を囲んで歌や踊りの宴がたけなわとなり、けんらん眼をおおうダンスパーティーが始まりました。

そして私の鼻の孔の太い蠟燭が全部消え尽す頃、そのパーティーは終り、いよいよ今夜のお祝いは閉会されました。お客様は三々五々お帰りになります。夜は更けてもう十一時を過ぎています。

私も机から降ろされまして、今度は御門の外のお堀にかけられた石橋の上で、又手錠足錠をかけられ、鼻の鎖は橋のらんかんに縛られ、蠟涙のいっぱい詰った鼻の孔をお客様の方へ見せて正座してお客様をお送りするのです。宵のうちから降っていた雨は本降りのポタン雪に変わり、裸の背に冷たく痛くボタリボタリと降りつけます。

お客様のお帰りは、急の大雪で一人ずつお出ましになるので、なかなかかどりません。車の着くのを待つ間、お客様方は私を犬か猫のようにおからかいになって楽しんでいられます。

「冷たいかい、ホホホ……」

「鼻を上げてごらん、フフフ……」

「もっと上向いて、鼻へ雪を受けるのよ。そしたら少しでもその蠟のかたまりがとけて楽になるんだよ、馬鹿だねえ」

などと散々暴言を吐いて、中には「鼻をお見せ」といって、私が涙をのんで鼻を少し前へ出しますと、洋傘の先でコツンコツンと堅く詰った蠟を突いて行くお客様もあります。

その時、玄関から女王様が、お客様お見送りのため、お出ましになり、私が皆から虐められているのを御覧になって「ホホホ」とお笑いになりましたので、皆もこれに和してドツと笑いの渦が、ポタン雪と一緒に広がりました。

私は、こんなにも虐められながら、

「有難うございます、有難うございます」

とお礼を申しながら、皆が面白がってコツンコツンと傘の先でつつかれる鼻の孔をわざと突き出して、皆様のよいお遊び道具にされています。

やっと皆様がお帰りになると、あとは又会場に使われたお座敷の後始末を、鼻鎖を引きづりながら転げ回り、這い回ってやっと済ませました。

そのうえで女王様の御寝所に恐る恐る這入って行きます。温いスチームの通った御寝室で、ふっくらとした寝具にくるまってお休み

の女王様の御寝台の脚許へ正座平伏します。

「今晚は有難うございました。次のお命令を頂きにまいりました」

女王様は、かすかにお眼を開かれ、やおらお身体を起こされて、

「御苦労だったネ。今日はいろいろ忙しい目に合わせたから一つご褒美をあげる」

と仰っしゃいます。お優しいお言葉に、私はもう恐れ多くて、身を縮め、頭を板の上にすりつけて平伏しました。

すると再び女王様の美しいお声。

「いつもの函を持っておいで……」

いつものお函とは、女王様のお小用をお入れする。蒔絵の書いた美しい木製の一リットル入り枳型になった塗り函です。これを捧げ持ちながら、再び御寝室へ這入って行き、うやうやしく頭を下げてお函を高く捧げて跪まざります。

やがて、「さあ」といって返されるお函。

「有難うございます」

私は連続一昼夜の苦しかった仕事から解放され、ご褒美を捧げ持って私の寝室——お庭先の冷たい雪の積った小さい犬小屋——へ引下るのです。

今宵の女王様のご気嫌、特にうるわしいお顔を拝して私も幸福で一杯でした。(了)

愛好家の記録



わが身を灼く屈辱感

とやま・かずひと

針

左の手首にアセをかいで、時計のバンドでこすられて、いつのまにか、カキコワシから、うんでしまった。

ペニシリンがうてない体質で、呑みグスリも、なるべくならさけた方がよい—と医師に云われ、永いことほうっておいた。

シツコイうみ方で、仲々口があかない。そんなところを、四谷の料亭のマダムにみつかったしまった。

『ずいぶん永いようね、あたしが治してあげましょようか』
こちらが、イエス、ノウも云わないのに、

和裁用の針をとりだし、ライターの火をつけて、それを灼いた。

「さ、だしてごらんさい」

灼いた針を、うんだところをめがけてつきさし、口をあけて、ウミを押しだし、あと、メンソレでもぬっておけばスグ治る、あたしは、いつもそれで治すから—とマダムは云うのである。

ズブリー針はかなり痛かった。

案の定、米粒くらいのウミのカタマリが押しだされ、忽ちサッパリしてしまふ。

傷のあと始末などどうでもよい。
美しいマダムの手ににぎられた針が、ヒフをつきやぶって、グサリとつつ込まれたとき

の、M的な感覚。痛みもあるし、何よりも、女のひとから、じかに痛い目に合わされた、その快感と云ったらない。

おまけに、マダムの言葉がよかった。

「あたしね、こうやって、人さまに針をつきさすの大好きよ。思いきり、グサリとやるでしょ。何とも云えないわ。ううん、キズなんかどうでもいいの、ただ針をさすのが面白いのネ。どう？ 痛いでしょ。痛がられると、よけいおもしろくなっちゃうの。あたし、少しヘンタイかしら」

医学統計

Gという脱脂綿のメーカーから、新発売の携帯用生理綿のPRについて相談をうけた。

宣伝関係の企画は、かすころの本職だから協力をすることになったわけだ。

G本社では、試用にいつて、大型マツチ箱大の実物見本を、十ダースも、オフィスへ届けてよこした。

生理綿を、男がもらっても意味ないが、デザインその他を考えるのにはやはり、実物をよくしっておく必要があるわけだ。だからインスタントコーヒーの仕事をたのまればコーヒーが、セロテープの仕事を引き受ければ何ダースかのセロテープが、オフィスへ持ちこまれるわけである。

百人ぶん以上の、生理綿の山をデスクに積みあげて、オフィスに現れる女性に、片はしから進呈することにした。

モデル嬢、雑誌記者、B G、銀行の集金係と、老若美醜をとわず、女性とみれば、綿を進呈する。モノがモノだけに、みんな恥ずかしそうに、ハンドバッグのなかなどへつつ込んでゆくのがおもしろい。

「これあげる。ただし、たのみがあるんだ。調査をたのまれてるのでネ、使ったあとの感想をきかせてほしい。ついでに、面倒でも医学的な統計もとってるんで、使用済みのヤツを返してほしいんだ。」

カラカイ半分に云ってやる。

ところが、おもしろい後日譚ができてしまった。

Sというビジネス雑誌の、渉外係のお嬢さんで、こちらの冗談をまにうけて、ほんとうに、使用済みのヤツを、丁寧に箱に入れ、デパートの包装紙でくるんで、「いつかの、おたのみになったもの」

と、用談のあと、帰りしなにソツとかずひこの手におとして、ソソクサと帰っていた。

うかつにも、前にそんな冗談を云ったことを忘れて、ズシリと、妙に手に重いS嬢からのプレゼントを、ボンヤリと眺めていたことだった。

グラビヤ

『週刊現代』誌、九月二十四日号のグラビヤ頁を開いて、ドキリとする。

「わが家自慢のお風呂」という特集で、ある女流作家の、トイレつきのバスが紹介されている。奥にタイルばりの浴そう、つづいて洋式便器、ごていねいに、トイレットペーパーまで見える。

もちろん、女流作家のポートレートも、ちゃんとはいつている。

たしかこのひと、かずびこと一つ違いくらいの同年輩で、戦前は、若さと、才能と美ほうをうたわれたひとだった。お年は召したが、しかし美しさは失なわれていない。

幸福な便器をうらやましく見入りながら、グラビアを切り取って、秘蔵のスクラップブックに採取した。

ホレぐすり

「漫画読本」10月号一〇三頁「マラヤのホレ薬」の一節。

マラヤでは満月の夜に（初潮をみた）娘たちが一晩中踊りくるい、明けがた近く小屋にかえって眠るが、その場合、娘たちのからだから出る不浄物をいっさいがっさいカメに入れてとっておく。すると行者がやってきて、これをもらいうけ、呪文を唱えながら幾日間も煮つめたものを銀のツボに入

れて保存する。これが靈験あらたかなホレ薬になる……。

これの原文は、大宅壮一著『黄色い革命』にあるそうだが、マラヤではホレぐすりに、女性のそれを、コヒーにまぜて、相手の男性にソツと吞ませると、効果一〇〇パーセントという云い伝えがあり、それを体験した日本人男性のはなしは、前に、このノートでも紹介したことがある。

七つの愉しみ

同志からは材料をもう一つ。二〇四頁一二二頁にわたり、タイトルは『ビデ七つの愉しみ』。

ビデについては今更くわしく説明の必要はあるまいが、親切にも、同志がゴチックで、かんたんに説明している。詳細はそれにゆずるとして、テーマは七つ。

いちばんはじめは、美しいビデのスケッチが紹介され、つづいて珍らしい、かわつた、おもしろい、すばらしい利用法が、つぎつぎと登場してたのしい。

くわしくは、同志をみて頂くとして、ビデというものの、吾々のあこがれのものであり、かずひこは、おのれ自身を、ビデに使用される空想を愛することを告白したい。やがて、わが国でもビデ使用が常識になるうが、待遠しい。



三条卓史 作画

「おばちゃん、これ、ブルマーに縫って」

ある日、私は黒い朱子の布と、五センチ程の幅の、白いゴム紐とを持って、裏の小母さんの処へ行った。

小母さんは、縁側近くのミシンの前で、白い割烹前掛の縫い端の糸を、小さな手鋏でチョキン、チョキンと切っていた。

「そうだ、もうすぐ運動会だったわね」

と小母さんは笑いながら、膝のまわりの白い布を押しやると

「清ちゃんの腰廻りはどの位だったか知ら、ちよっとこちらへいらっしやい」

と、傍らのメジャーを持って私を呼んだ。

この小母さんはおせんさんといって一年程前から、うちの長屋に住んでいた。

この家は私の家の丁度裏手にあって、最初

物置にしていたものを、おせんさんのために、少し改造したもので、二人のいる処から、狭い庭（といっても空地のようなもの）を隔てて、私の家の道具倉が見える。粗末な造りだけれど、奥まった、ひっそりとした住居であった。

おせんさんは、この長屋に一人で住んでいた。年の頃は三十一、二で、色の白い、小造りの美しい人であった。主人はいるのだが、ダム建設の人夫頭とかで、年に一、二度帰る位で、ほとんど一人暮らしであった。私の母の遠縁に当るとかで、時折私の家へ来て、母といろいろ話をすることもあった。

おせんさんは、スカートの上から私の腰廻りを計ると

「ずい分大きくなったわね。もう中学三年になるの？ 清ちゃんは大柄だから、まるで大人の寸法よ。股下の寸法を計るから、ちよっとスカートを上げて……」

と微笑みながらいった。

私は一瞬たじろいだ、立ったまま紺サージのフレヤーのスカートの裾を両手で持って

擦り上げた。

「ずい分大きくなっているの、ぐるりと計って見ましようね」

おせんさんはそういうと、私の横へ寄って足の間へメジャーをすーッと通して引き上げた。そして

「股割り六〇センチじゃ、少しきつすぎるよ、うね」

といいながら、何回も計り直した。

丁度、その時、台所口の方で

「こんちわア、八百屋で……」

というご用聞きの声がした。おせんさんは慌てたように私の傍を離れた。

○

その翌日、私はおせんさんの家へブルマーを貰いに行くと、丁度入口の傍に荷台の綱を解いたままの自転車置いてあった。

私は誰が来ているのだろうか、一寸入るのをためらったが、その自転車の後の泥除に、白いエナメルで「中田被服店」と書いてあるのを見て、——なアんだ半物屋のおじさんかな——と心で呟やきながら格子戸を開けた。

中田被服店は、おせんさんにエプロンやサロン前掛などの縫製を頼んでいる店で、頼ら顔の小父さんが、大きな張りぼての竹籠に仕

立物を積んでこの家へ出入りしているのを二

三度見かけたことがあった。

「おばちゃん、ブルマー出来た？」

といいながら私が入って行くと、ミシンの前へ腰を掛けているおせんさんの姿が、一瞬中田のおじさんの影にかくれた。いや、おせんさんの後ろにいたおじさんが、私の姿を見て咄嗟に位置を変えたように思われた。

「あら、清ちゃんだったの？」

おせんさんは、中田のおじさんの向うから首だけ出すようにして、ちらりとおじさんの顔を見たが、

「裁ってはあるんだけど、おじさんの急ぐお仕事があったので、まだ縫ってないのよ」

そういつて眼を仕立物の方へやった。花模様のプリントのサロン前掛が、ミシンの下の辺りに散らばっていた。

「済まないけど、夕方来て呉れない？ それまでには縫っておくから……」

「ええ、じゃアそうする」

と、私は何だか私自身がきまりが悪いような気持ちでそのまま外へ出た。何だか見てはならないものを見てしまったようで、顔がほてっていた。

私が無気なくおせんさんの足許を見た時、

おせんさんの形のよい、白い足の左右の親指が、鑄鉄製のミシンの踏み板の棧に、細いプリント布の切れ端で結び留められているのに気が付いたのだ。

——あれは、小母ちゃんが結んだのじゃアない、自分で結ぼうとすれば、ミシンのテーブルが邪魔になって、どうしても結べない筈だ——そう考えると、いつもミシンを踏んでいる時には、両手をテーブルの上に置いているのが、その日に限って白いその手が見えなかった。

私は家へ帰ると、家人に気付かれないようにそっと倉へ入った。ギイーと内扉を引くと暗い闇である。手で周囲を探るようにして南の窓辺に近付いた。その倉は道具倉で、古い箆笥や夜具戸棚や、屏風を入れた箱などが入っていた。私は手探りで隅の小抽出しのついている木箱を抱えて来て窓の下に置いた。高い窓を覗く足台にするためである。私は出来る限り蝶番のきしむ音がしないように、少しずつ開いた。

背伸びした私の眼に蒼い空の色が映った。少し苔のついた瓦屋根と、板びさしとが映った。そのひさしの下は縁側で、縁側のすぐ近くにミシンがあった。私はまるで怖い物でも

見るような気持で胸が騒いだ。

ミシンの向うにはおせんさんが腰を掛け、そのすぐ後ろに、中田のおじさんが立っていた。おせんさんの足指は、矢張りミシンの踏み板に結び留められていた。真黒なタイトのスカートが、少し開いた二本の足の膝頭を覆っている。そこから上はミシンのテーブルに遮られて見えなかったが、ユの字形のミシンの機械の向うにおせんさんの胸があった。純白なブラウスの短かいフレンチ袖からすななりと伸びた両腕の上膊部に、花柄の平紐が喰い入っていた。無論、両腕から先は見えない。花柄の平紐は、サロンエプロンの紐として、昨日おせんさんが長く長く縫っていたものである。

中田のおじさんは、おせんさんの後ろで、その花柄の紐を手繰っていたが、やがて束ね終るとおせんさんの頸へ両手を掛けて静かに後ろに引いた。おせんさんは仰向けになり、何かいつているようだったが、二人とも声は聞えなかった。おせんさんの身体は腰を腰掛けに乗せたまま弓なりになり、倉の窓からは太鼓の皮のようにピッチリ張ったタイトスカートのお腹の辺りが微かに見えるだけであった。私には、中田のおじさんが、どうしてそ

んなひどいことをするのか訳が分らなかった。また、おせんさんも、おじさんのそんな仕草に対して、なぜ強くはねつけないのか不思議に思われた。そんな事を考えている時、中庭の方で母の呼ぶ声が聞えたので、私は急いで倉の窓を閉めると、そっと中庭の方へ出て行った。

日が暮れてから、おせんさんが私のブルマを届けて来た。母と上り框で笑いながら話しているおせんさんの、昼間平紐の喰い込んでいたと思われる二の腕を、それとなく見たが、その時は、脇近くまで袖のあるワンピースを着ていたので、それを確かめることができなかった。

○

それから一週間ほど経った或る日、おせんさんが、顔色を変えて母の処へ来た。おせんさんの亭主がダム建設の現場で、大怪我をしたのだそうだ。おせんさんは母から旅費を借りると大急ぎで出て行った。何でも黒部の峽谷とやらへ行くのだそうだと母がいていたが、十日ばかり過ぎた頃、おせんさんは、白い布で包んだ木箱を抱えて、しよんぼりと帰って来た。

やがて夏も過ぎ、軒下に吊されていた盆提

灯も取り外されて、すすきの穂の揺れる初秋がやって来た。

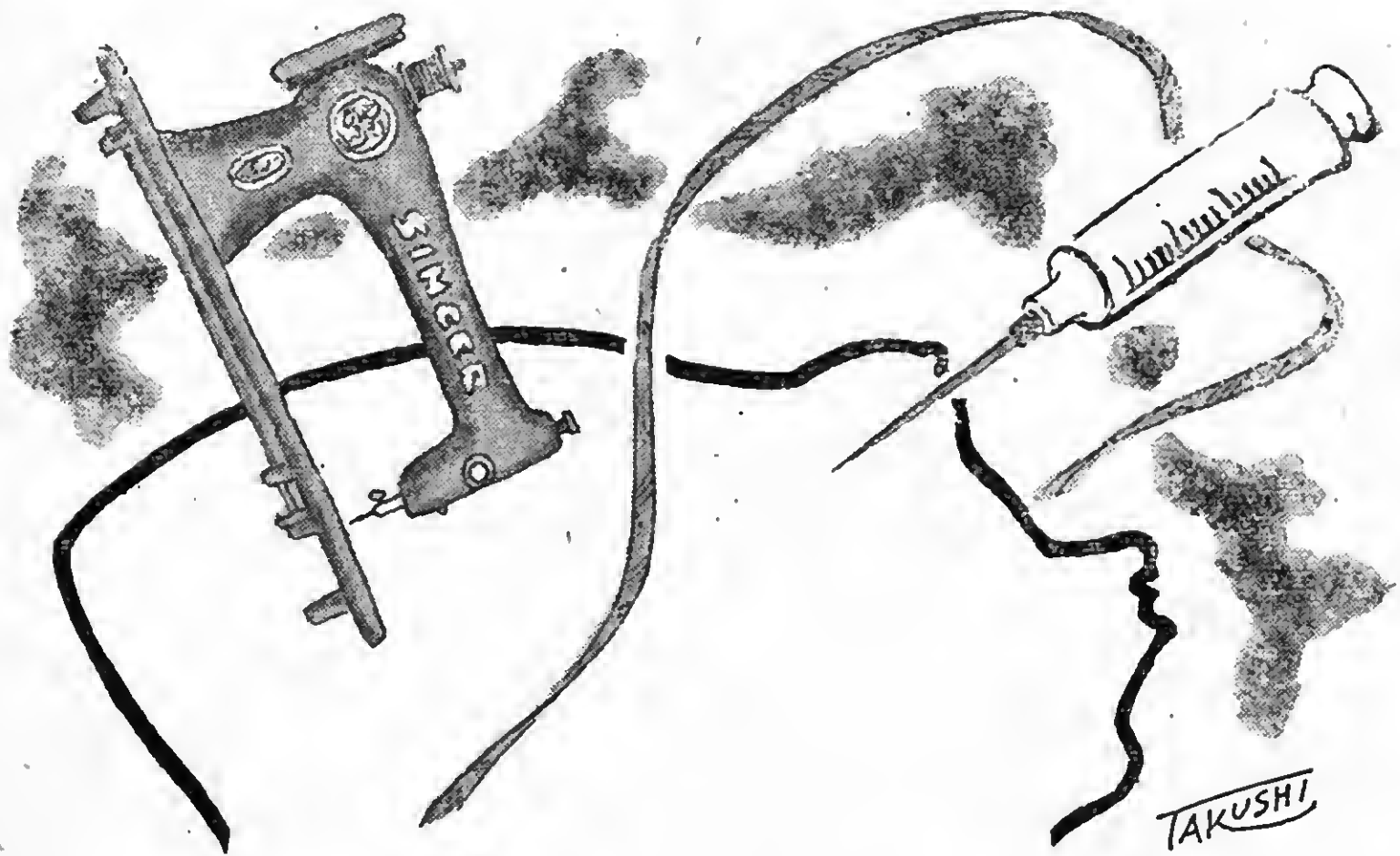
おせんさんは一生懸命仕立物に精を出すようになった。中田のおじさんの代りに、若い男の人がリヤカーで裁断した布を運ぶようになった。私はその後も何回か、こっそりと倉の窓から覗いたが、おせんさんはいつも独りで一生懸命ミシンを踏んでいた。

或る日、私は夜中にふッと眼が覚めた。便所へ行って帰ろうとすると、廊下の隅に置いてある金魚鉢を、見た事のない野良猫が狙っていた。私は「シッシッ」と、声を掛けたが庭の沓脱石の処で眼を光らせて去ろうとした。私は庭履き下駄を突っ掛けてその猫を追った。月が蒼白く中天に懸って、あたりはしんと静まり返っていた。

ふと気が付くと、私は何時の間にか倉の前に立っていた。私はその時、何かのものに憑かれたように倉の扉を開けていた。

おせんさんの家の縁側には腰に硝子の嵌った障子が閉って、部屋の中にはまだ灯りがついていた。夜業をしているのか知ら———と思ひながら窓の鉄扉を閉めようとした時である。

障子に影絵のように映っていたミシンの影



に重なるようにして一つの人影が現われた。障子の蔭なので顔は見えなかったが、頭の髪の形や、肩のいかり工合で、中田のおじさんである事が直感された。私は慌てて窓枠にしがみついた。

その男の影は、右手に捻じ廻しを逆に持って、その柄でミシンの頭部に立っている糸巻き棒をコンコンと五六度左右から叩いて、左の手で抜き取った。

——なアんだ、ミシンの修繕をしているのか——と案外に思ったが、そうではなかった。男の影が消えると、入れかわりにおせんさんらしい女の影が映った。その影は動いたびに大きくなったり小さくなったりした。影がミシンの頭へ片手を触れた時、男の影が後ろから映って、女の腕に手を掛けて後ろに廻した。男の口の辺りから、細い紐の影がゆらゆらと揺れている。男は片手で女の手首を後ろで握ると、もう一方の手を女の胸へやった。女が二三度上体を揺すっ

ている間に、その手は器用に上衣のホックを外し、腕へずらせて、手首を持ちかえる拍子に、するりと脱がせてしまった。

男は口に咥えていた紐の端を手にとって、女の両手首を背で縛った。それから、その端を胸へ廻して、ふっくらと盛り上った乳房の上下を二巻きして後ろでぐいと引いた。それからが大変である。

男はおせんさんを抱くように、腰掛を足場にしてミシンの上へ立たせた。それから後ろの紐を引いて、そろそろとミシンの頭を跨がせるのである。おせんさんは、膝を曲げ、腰をミシンの頭の上に落す。タイトのスカートが膝からずり上ってミシンのプリーリーの所でたくれている。男は女の足首を握ってテーブルの両側に伸ばす。おせんさんは、両手を後に縛られたまま、ミシンの上へ馬乗りになれたわけである。

まだこれだけではなかった。男はおせんさんの両足をミシンの下で縛り合わせようと引っ張っていたが、テーブルの幅が広いか一緒に引付ける事ができない様子であった。男の影が一たん消えると、今度は長柄の箒を持って現われた。それをテーブルの下に通して、今度は思い切ってその両端に別の紐で左右の

足を括り付けた。おせんさんの上体が二三度左右に揺れた。テーブルを膝で挟んで安定を保っていたその膝を竹箒で開かせられて、上体の安定を失ったためであろう。

男は今度は日本手拭の端を結んで輪にしたようなものを女の頸にかけて後ろへ引いた。女の上体はミシンの頭の上で反り返り、腹が大きく波打った。その手拭に、又別の細紐を通してテーブルの脚に引き付けて結んだ。

私は、ミシンの上に仰向けに馬乗りになれて、身動きも出来ないおせんさんの黒い影を見て、さぞ苦しいだろうと思った。あたかも自分がそうした姿にされているようで、足がすくむ思いであった。

それから暫らくの間、男の影が障子から消えていた。おせんさんの頭がかすかに動き、腹部が異様に波打っているだけであった。中田のおじさんは座敷に腰を下して煙草でも吸っているのだろうか、うすい煙のようなものが漂っていた。

やがて、影が動いて現われた男の手に、半透明の管が握られていた。よく見るとそれは注射器のようであった。

息を凝らして見ているうちに、その一本はおせんさんの影坊師に吸われるように同化し

た。とたんにおせんさんの影が苦痛を表現してぐっとのけぞり、ヒクヒクとふるえているのがよくわかった。注射器をはこんだ手の影がひっこんだが、その手には何も持たれていなかった。注射器はおせんさんに刺し込まれたままなのだ。私は思わず眼を瞑った。

男の影は更に次の注射器を取り上げると、再びゆっくりとその針先をおせんさんに近づけてゆく。こんどは針先の狙っているのが、奇妙にくびれて張り出している豊胸らしいところがよくわかった。サッと注射器が動いた。

——うえッ——

という呻きが、洩らすまいと耐えていた堰が切れたように聞えた気がして、私は思わず耳を掩った。

私が再び顔を上げて見た時、半透明の細いガラス管は、おせんさんの胸の隆起にブラ下って、さっきまでのおせんさんの影坊師を奇異な形に変えていた。黒い影絵だけにわかるはずがないが、最初の注射器も同じように片方にブラ下っているのではないかと私には想像されて自分の胸が痛んだ。

それから間もなく、おせんさんの影が、二三度上下に揺れた。天井から下がっている電灯のコードを外して、その位置を変えたらし

く、障子が次第に明るくなるにつれて、おせんさんの影はすとと障子の腰板の方へ下がっていった、そのまま私の視界から消えてしまった。

○

十日ほど経った或る日、おせんさんは母の処へ来て長い間話していた。

亡くなった亭主の遺骨を抱いて実家へ帰るというのである。

おせんさんはいよいよ家財道具を片付ける際、日頃使っていたミシンを私の家へ置いて行った。

「私はミシンはよう使わないけど、清ちゃんが学校で習うようになったら、お稽古用になるでしょ」

母はそういつて引き取ったが、

「お部屋には何処にも置き場がないわ」

と、倉の中の丁度窓の下に置いた。そのミシンのテーブルの上へあがって窓を開けると、今はおせんさんのいない家の堅く閉ざした雨戸の傍に、赤い鶏頭の花が秋風にゆらゆらと揺れているのがよく見えた。

丁度、あの夜の奇怪な影坊師が揺れていたのを真似ているかのよう……。

讀者通信の女性を縛る

「ひろ子緊縛記」

辻村 隆



男性マゾのモデルの志願者が大分来ているので一度見てみないか、という連絡を受けていたので、尼崎まで所用で出掛けた帰途、編集部を訪ねてみることにした。

「マゾ・モデル募集」に応じて送られてきた影しい手紙の束。私はその一つ一つに目を通してながら、その熱心さに気押されるような気持ちだった。遠方からの志望者も案外多い。そして、呼び出しを受けたら、旅費自弁で早速飛んでゆく、というのが三通もある。しかし中には、自分の所へ出張してきてくれないかという虫のいいものもある。その住所を見れば福井県とある。私は、この中から適当なのをピックアップ・アップして、三人ばかりに連絡してもらう様に依頼する。

「それで、女の方のモデル志願者の手紙も来てるかね？」

私は手紙の束を箕田氏に返しながら、一応そう尋ねてみる。

「うん、三通ばかり来てるがね。これは十月号の読者通信に載せたよ、今印刷中だがね。広島市の高田静子っていうんだ。あとの二通はこれだ。十月号には間に合わなかつたから十一月号の読者通信に予定してるんだ」

「どれ、どれ、一寸読ませてくれよ」

私はその一通を手にとってみた。

突然の手紙御許し下さいませ。

私は本誌の愛読者です。

はずかしい話ですが、私は元赤線で働いて居った者です、その時にうけた事が今では私の苦しみとなって居ります。

なぜかといえは初めていじめられたからです、はだかにされて、うしろ手にくくられちちから足の先まで身動きの出来ない様にされて、ふんだり、けったり、つねられたり、三

日にあげずにいじめぬかれたのです。だから今は家にかえって居りますけれど、なにも親によろこばす様な事は出来ず、いつも小使いに困っております、出来る事なら人夫になりたいと思って親にいったのですけれど、承知してもらえません。

「今まで力仕事などした事のない者が出来る筈がない」といってだしてはくれませんので誠に申しにくい事ですけれど、私の様な者をいじめて少しでもお金を下さる様な方(男)が有りましたら、すぐしらせて下さいませ。

どんな事でも致します。一度この身はお金にした身です。お金のためなら、どんな苦しい事でも、しんぼう致します故、どうか、おせわして下さいませんか。

かきたい事はまだ有りますけれどもなんといいてかいてよいか分りません、かつてな事は

かりかいて誠にすみません。この手紙つき次第にお返事下さいせ、一生のおねがいです、ではくれぐれもおたのみ致します。

福岡県八幡市××町〇〇番地

飯塚 久仁子

「ふん、こりや、手紙だけ見ていると、一寸金釘流っていうところだな、それに大分遠いじゃないか、もう一つの方を読んでみよう」

〇

初めてお便りします。私は二年程前からの御誌の愛読者ですが、最近号の口絵や写真のすばらしさ、もう本当にうっとりとして毎号拝見しております、ずっと古い号も市内の古本屋や時たま大阪へ遊びに行ったとき探し求めて大分たまりました。殊に古川松子さんの書かれたものが大好きです、あの、息も出来ない位に強く嘯まされた猿ぐつわは、私も一度はされてみたいと、いつも思っております。

申しおくれましたが、私、只今洋裁店に勤めております二十三才になる女性です、実家は湯浅の方ですが、洋裁学校を出てから、ずっとこちらへ厄介になっております、別にきまった休みというものは無いのですが、その



かわり自分の好きなとき、交替でいつでも休みをとれます。「鑑賞用女性」の梨花悠紀子さんや「私を責めて下さい」の東浦ひかるさんが辻村隆様に縛られているのを誌上で拝見して、いつも羨ましく思っております。

辻村隆様、是非、私も一度責めて下さいませんか。辻村様の構成による六月号の一番はじめのフォトなんか大変気に入っています。私もあのように胸をぐるぐると括られ、そしてゴムのオムツカバーでくるまれ、レインコートを着せられたら、どんなだろうかと胸をわくわくさせております。もし、辻村様にひしひしと縛られるようなことが出来たら、私はそんな日の一日も早くくることを願っております。

和歌山市××町○○番地△△荘

竹野 ひろ子

辻村隆様に是非縛られたい——特に古川裕子好みで、ナイロンのマスク、おむつカバーにくるまれ、コートを纏って縛られるのを好むとある、それに猿轡は、不可欠の第一要素であるとも強調し、是非、私の夢を叶えて下さいとのこと——

辻村様にひしひしと縛られる日の一日も早

からんことを切に希むと結んである。

(和歌山市 竹野ひろ子)の、末尾の通信者の名前を心に刻むと、私は思わず箕田氏に対して叫んでいた。

「こりや素晴らしい。わざわざ、私を名ざして是非、辻村隆様になると、これは私としても、手を拱めいてはいられないじゃないか、そうだろう」

「物凄く、君に御執心らしいな。ひとつ御興をあげてみるかい。十一月号の読者通信に載せる予定の分だが、君の眼に止っては仕方がないからな」

「うん、相手の都合によっては、やってもいいが、勿論、未婚だろうな」

「そりゃそうさ、年令は二十三才としてあるが、何なら、明日でも連絡しようか。勤務先



の電話番号まで、ここに書いてあるよ、和歌山ならダイヤルを回して即時通話だから、すぐ掛るよ」

「手紙では、古川裕子好ましいけど、生憎と、こちらは余り、裕子式な、ゴムのにちゃにちゃしたのを好きじゃないんでね、東浦ひかるのように、ズバリ緊縛一本槍の方がやり易いんだけど——」

「一寸、最初は彼女の希望を叶えてやりゃ、あとは何とかなるのじゃないかな、そこは君の腕次第というところじゃないか」

「じゃあ、兎も角、連絡してくれる？」

「そうするよ、今晚はもう晚いかう、早速明日に電話した上で返事することにしよう、明日の夕方、いつものじ喫茶で精しく打合せしようじゃないか」

その翌日、私は仕事を大急ぎで片付け、夕刻、じ喫茶まで出掛ける。彼は既に来ていて奥のテーブルから私を招いた。座るなり、「いい声の娘だったよ。なんでも今の洋裁店で受け取りの仕事をしているらしいんだが、もういつでも、独立できる腕を持っているんだって——」

「へえ、そりゃ大したもんだな。で、いつ撮る？」



「彼女は、いつでも休みは、とれると言うんだ。それで、御意の変らぬうちに、明日の午後三時に、この喫茶店へ来る様に云ったよ」

「明日とは、又急だな。で、何か目じるしでもあるの？」

「サングラスを右手に持って、白いガーゼのマスクをしてくるって——」

「白いマスクを……フーン、こりゃ大分熱の入れ方が違うね。ところで、名前は矢張り、竹野ひろ子と云うの？」

「それで電話が通じたんだから、本名だろうな」

「大胆だね、いよいよ“私責めて下さい”第二号現われるというところかな、箕田さんも行くんだろう？」



「あゝ、行って顔を見たいね」と云いたいところだが、辻村君じきじきの御名指しだ。邪魔になってもいけないから、今回は遠慮するよ。その代り、もし協力的だったら、次は是非ニューフェイスとして、うまく紹介するんだぜ」

「勿論云われなかったって、その気さ」

そこで、私達は明日の、竹野ひろ子の緊縛

の構成について色々、打合せした。

私には縄類はあっても、ひろ子なる女性の好む、おしめや、ナイロンカバー、レインコート等の小道具の持合せはない。

御苦労にも、箕田氏は、私を喫茶店に待たせた儘、車で、大急ぎで、それらのものを取りに帰ってくれた。

私は彼から預かった嵩だかい風呂敷包みを

さげて喫茶を出た。

未知の女性、竹野ひろ子の容貌をさまざまに心に描き、臉に浮かべ乍ら……。

何卒、美人でありますように——。

× × × ×

U喫茶の出入口の近くのテーブルに陣取ると、私はピースをくわえた、シオルダーバッグに三脚、それと大きな風呂敷包みを見て、レジのヨッちゃんが、意味ありげにニコリと笑った。

私はこのヨッちゃんなる娘を一度食事に誘い、その場で数葉の緊縛写真を、さりげなくこぼして、それとなくモデルに勧誘したが、見事に肘鉄をくった、ホロ苦い思い出の一幕がある。

だから彼女の、このニコリは、私のいでたちから見て、既に、その意図を察してのことに違いない。それに、この喫茶で、梨花悠紀子嬢や、東浦ひかる嬢とも数度おちあっているから、今更この娘には隠しようもないし、隠す気もない。

箕田氏の伝言や、モデルの彼女達へのメッセージを、このヨッちゃんは、むしろ一種の好奇心も手伝って、易々として引受けてくれるのである。



閑話休題――

午後三時を廻っても、それらしい娘は一向に現われない。喫茶の扉が開かれ、女の子が室内を覗くように入ってくると、私はハッと、その方を凝視する。ヨッちゃんまで氣を使って、入ってくる女客の様子に注目している。

「遅いのね」

ヨッちゃんが隣の客へメニューを持ってい

た帰りに立ち寄り、私に云った。

「何しろ、ニューフェイスでね、向こうは僕の顔を知らないから厄介さ――」

「美しい人？」

「莫迦ッ、見も知らない顔って今いったらう

――」

「あつ、そうか――」

中島そのみを一廻り小さくしたようなヨッちゃんは、可愛らしい眼をくりくり廻しておどけて見せた。

扉が又開く――。

薄いコバルトに白い模様を散らしたワンピースの清楚な長身の娘が、音もなく入ってきた。白いマスク――。

左の腕にさげた白いハンドバッグ、そして右手に今年の若い女の間で流行している濃緑のサングラスを持って――。

△この娘に違いない！▽

私は直感した、すっと立上って入口に驚然と立つ娘に近附く。

「竹野ひろ子さんですね？」

「……」

娘は頬をパツと染めてうなずく。

「辻村です」

「あつ！」

彼女は意味もなくマスクの内で低い声を挙げた。そして、慌てゝマスクの口に手をやった。

ヨッちゃんが、吃驚した眼付で、私達を眺めている。

「座りましょう。どうぞ――」

私は席を変えて、奥まった、いつも箕田氏

と座るシートに座を変えた。

不満げなヨッちゃんの眼を背にして――

「余り突然で、急なものですから……」

ひろ子さんはマスクを外すと、小さくつぶやくように云った。ハリのある綺麗な声だった。切長の稍小さい理智的な瞳、少し顎の張ったしゃくれた感じ――色白の広いひたい、綺麗な歯並び――。

謂わば、教養が容貌に歴々と現われているといった、私の苦手とする部類に入る女性である。

「和歌山にお住いだそうですね」

言葉も丁寧にならざるを得ない。

「え、目抜き通りなんです。ブラクリ町って云うの、変な町名でしょう」

「学校は――」

△これは相手によりけりだが、ひろ子さんのような女性には聞いてやるべきである▽

「高校は和歌山ですけど、大阪のN洋裁学院にずっと通いました」

口が柔かくほぐれると、今度は彼女が私の身元調査の番だ。私も差支えない限り応答する。

「随分、私を御執心の様ですが、何かわけでも――」

「恥を忍んで申し上げますけど、私、もう一年前から、奇クの愛読者なんです」

「何も恥じゃない――」

「だって女でしょう。だから――」

「女性の読者も随分と多いんですよ。ところで……」

「え、それで、辻村さんなら、色々のモデルの方を手掛け、又女性ともあって居られる

でしょう。だから、“鑑賞用女性”や“私費めて下さい”が事実なら……」

「事実なればこそ、今、貴女とも、こうしてあっています。そして、又これが駄文となつて、本にのるかも知れない――」

「矢張りのせますの？」

「撮影すればね。差支えあれば仮名にして、色々の設定もフィクションにしますよ」



「いゝえ、ひろ子で結構ですわ。世間は広いでしょうから——」

「話の本筋に行きましよう、どうして、古川裕子が好きになったの？」

「あの方の文は、何かしら、私自身の気持ちにピッタリするんです。

雨の日、レインコートに身をくるんで、頭からすっぽり頭巾をかぶり、体中汗ばみ乍ら、雨にずぶ濡れになって街の中を歩くと、古川裕子さんの、文中の人になって、レインコートの上から、ぎりぎりと締めつけられたいような——」

「私には、その時の感傷がもう一つ、しっくりと分らないんだけど、編集長の意図もあって、一応準備はして来ました。教養ある貴女の事だから、よくお考えの上での事と思いますけど、後悔はしないでしょうね。」

「通信を出すくらいですから、覚悟はしてお



ひろ子さんは眼を閉じてうなだれた。

「堅く約束して下さる？」

「いゝですとも、別に全裸にならなくたって構いませんよ」

「きつとよ、それに……」

縛り以外のことは何もなさらないということも……

「いゝですとも——」

緊縛に慣れ、古川裕子に陶醉する彼女も、乙女としての恥らいが強いのだろう。でも、このように、はっきりした物言いの態度は中々しっかりし

りますわ。辻村さんを信じてね」

「じゃあ、出掛けましょう」

「あッ、も一つ、私、申し難いんですけど全裸にはなりませんことよ。どうしても、必要ならとりですけど、パンティだけはね、どうしても、いや」

「パンティ一枚までなら、いゝと言うわけですな——」

た所がある。

私を半ば信じつゝも、一対一の緊縛の場の豹変を恐れているのかも知れない。

「本当よ——」

くどい程、彼女は念を押した。

私は、彼女の帰宅が少しでも早かれと、難波から浜寺まで車を飛ばすことにした。

×

×

×



った趣きね」

彼女はハンドルを握る私に声をかける。

「一枚とりましょうか——」

「ええ、お願いしますわ」

私は大急ぎでシヨルダーバッグから、愛用のカメラをとり出すと、レンズをかなり開いた、夕暮れが早や迫っているからだ。

風車をバックに三枚——車から顔を出したものと、サングスをはずしたものの、掛けたものの、これが竹野ひろ子さんの素顔である——浜寺まで一気に飛ばした。石津川を越すとそこには、もう松林が見える。

婆さんひとりの、K氏の浜寺の別邸は海水浴のシーズンも過ぎ去り、二階の間は、ひっそりと静まりかえっていたが、海水浴に先月の末、子供ずれで来た時と同じ、部屋の装おいだった。

大阪で予かじめ、K氏に電話で連絡しておくと、磊落な彼は、いつでも二つ返事で、この別邸を提供してくれる。

絹川、梨花、四方、桜井の諸嬢と共に、箕田氏も再三再四、このK氏の別邸を利用してゐるから、私も箕田氏も留守番の婆さんとは至って懇意だ、一枚渡すと大喜こびて、風呂の準備から食事の支度までしてくれる。



写真をとるからと云うと、絶対二階へ近よらない

我が家の様にガレージに車を入れ終り、私は竹野ひろ子の待つ二階へと再び上っていった。

堺の臨港工業地帯の埋立工事現場を過ぎると、和歌山市に向う国道二十六号線の左側にオランダ風の風車が点在し始めた。

「変わった風車でしょ、いつも南海電車の車窓から見ていますけど、真近に見ると又違



× × ×

不安と緊張と昂奮で、彼女の顔は硬くこわばっていた。

何を命ずるでもなく、私は

黙々と、三脚にカメラを装着し、ライトを配置し、風呂敷包みを解き、シヨルダーバッグから縄をとり出していた。

化粧するでもなく、呆然と彼女はワンピースの裾を華やかに開いて横坐りに座った儘、私の動作を眺めていた。

——とうとう来るところまで来てしまった、これから私は、どのようなにして縛られ、虐められるのだろう。すべては未知の出来事が、これから展開されるに違いないのだわ

彼女の心を分析すれば、そんな言葉が飛び出すことだろう。

「その服の儘でとって見よう、床柱を背にしてね」

私は徐々に飼育する必要か

ら、先ず彼女に恐怖心を抱かせぬ様、服の儘で緊縛第一号をとることにした。彼女は素直に床柱を背にして坐ると大人しく初めての縄を受けた。

「あの……猿轡は？……」

「あ——そうそう、貴女は猿轡絶対主義だったね、どうしてなの、また——」

「ぐっと口を締めつけられると息苦しいような緊迫感が、私を被虐の世界に導いてくれるのですわ。だから、猿轡は、私、いつもひとりでプレイしているように、本当に口の中に何かを押しこんで、その上からきゅっと、強くしめて頂きたいの」

「それじゃ、縛って痛くなっても声を立てられないから、分らないじゃないか」

「私、モデルでないでしょう。だから写真は二の次でいいの。本当いうと、撮らなかつたって構わないけど、それじゃ辻村さんに悪いでしょうから……」

「……………」

「本当に縛られ、本当に猿轡されて、その被虐の陶酔に浸れたら、私としたら、それで満足なのよ」

「家でも、時々そんなことするの？」

「ええ、私はアパートの一人住居だもんです

からどうしても、そんな機会が多いんですの、自分で自分を縛るってことは案外難しいけれど、そんな時、素肌の皮膚の透き通る、ナイロンのレインコートを纏った上から、自分でぐるぐる巻きに、きつく体全身に巻きつけて、最後に余った縄を後ろ手にした両手にぐるぐる巻いて、その端を握るの。猿轡をして、そうして畳に転々としていると、ジーンと背骨を刺すような陶酔感が走るわ」

「よし、わかったよ。じゃあ、思いつ切り、そのよく喋べる口を塞いで締めつけてやることにしよう」

私は、堰を切ったように美しい声で喋べる彼女に、多少煩らわしさを覚えて、形だけでなく、本式に口中に布を押し込んで猿轡をし乍ら、これが竹野ひろ子の自慰の前戯ではないかななどと、フトそんな連想が脳裡をかす

めた。

理智の勝った、インテリの女性に、案外自慰の多い事を諸種の本で知っている私は、竹野ひろ子も、よかれ悪しかれ、この種のインテリ臭い女性に見え出して来たのだ

▲こんな女が、案外燃えると凄いんだ、手を出したら、火傷しそうな女性なんだ。自重自重▽



服を着て、猿轡をはめた床柱縛りを一、二枚――、こんなのは、初歩の第一歩で全然面白くもない。

しかし、竹野ひろ子は、ぐったりと眼を閉じ、既に緊縛の陶酔に浸りつつあった。

「服がしわになっても不可ないから、脱いだらどうだね」

猿轡はずし、縄を解いてから、私はフイルムの入れ替えのため、

カメラに寄った。

フイルムを入れ替えて

顧って見たが、彼女は依然として、そのままの

姿勢で伏し目がちに畳の

目を数えていた、着衣の

ままとはいえ初めて異性

の手で縛られたことに対

して、彼女なりの感慨に

耽っているのだろう。し

かし彼女の心の中は、私

にはわからない。

「さあ、早く服を脱いだ

ら、どうだね」

私は彼女のワンピース

のベルトはずし、脱衣

を手伝ってやる、やっと、服を脱いだ彼女は、今度はそれを胸の前で、しっかりと両手で抱いて放さない。シュミーズ一枚、といっても、深窓の麗人？にとっては、恥しいのだろうか。

私が手で引っぱっても、背をかかめて中々放そうとしない。なんという恥かしがり屋なのだろうか。仕方がないので、私は彼女の左の腕をとり、その手首を握って、ぐいと逆手にして引っ張った。しかし、右手は依然として、ワンピースを胸のところで抱えたままである、自分の服で胸の膨らみをかくそうという滯ない努力である。

服を引っ張っても彼女が放そうとしないので、右手も後に回し、床柱のところで手首を縛り上げた。今や、第二段として、シュミーズ姿の緊縛が実施された、胸から膝の上に落ちた服は、私がす早く、横へはねのけた。

床柱の背で両手を縛り、別の縄で両脚も縛って、床柱に縄を引き寄せた。

引き寄せた弾みで、ぐらりと彼女の体は傾むき、左腕に白い細縄が強く喰い込んでいった。私は慌ててセルフタイマーにして、彼女の髪を掴むと、倒れかかる彼女の体を辛うじて支えた。

若い女特有の弾力性のある身体が、細縄を引きちぎらんばかりに緊張させて倒れかかり支える私の手も、はねのけるようにして、縄を肌喰い込ませてゆく、彼女一人のプレイも、この様なのかと、私は一瞬呆然として、この有様を眺めていた。

『襲われる女』というテーマで一連のシリーズをシュミーズ一枚の彼女をモデルにして、

セルフタイマーで次々と撮り終えた私は、何の躊躇いもなく、彼女の上半身を裸に剥いてしまった。脱いだ服で、豊かな乳房を押さえ、シュミーズの裾を押して膝小僧をかくしていた彼女も、私が後手に縛り上げるや、諦めた様に上半身のあらわな肌を私の眼前にあらわした。

見かけによらぬ豊かな乳房は、娘盛りの盛



熟をまざまざと見せ、淡紅色の乳首の可憐さが、そこにありありと、ひろ子の処女性を如実に示していた。

胸の上部に二筋、乳房の下部に二筋、そしてお臍の上部に四筋の縄がからみついて、形のよい乳房がむっくりとこぼれる様に縄目から顔を出す。

余った縄を臍の下部から腰へかけて回した



が未だ縄尻は大分残っているので左太股を縛って止める。ごろりと畳の上に転がす。足で二の腕の縄目でくびれた所を踏みつける。

彼女は、このポーズのひとつひとつが、いつかは奇巧の誌上を賑わすのを意識してか、努めて真正面の顔を避けるように、顔を下向けにしたり、或は、うっとりとした表情で顔を閉じたりした。

しかし、鼻柱の上まで顔の殆ど半面をおおう猿轡は、ひろ子自身の顔を、判別のつきにくいものにさせた。そして、涼しい眼の表情だけが、彼女の美しさを殊更強調している様に思われた。

シュミーズの裾をめくって、太股縛りにしてあるので、わずかな蹠きでも、肉づきのよい両の太股がにゅっと短くなった裾から顔を出すので、その度に彼女は膝頭の方に恥かしげな視線をやる。

抱え起して猿轡の手を拭締めつける、股に掛った縄が締って痛いのか「ううう」と呻めき声を出す、口の中まで布片を詰め込んだ本氏の猿轡なので、何に言っているのか私には判らない、これが彼女、望みの姿態なのだろうか。

私が縄を解くと、素早くシュミーズの肩を通して胸を隠した、その動作が如何にも初々しく見えた。

手錠をはめ、足輪をつけて、正面から撮ろうとすると、彼女は色眼鏡を要求した。

「これで猿轡をすると、まるで月光仮面そっくりだよ。貴女の顔なんて、てんで影を潜めて何処にもなくなるよ」

「それでいいのよ。そんな自分の姿を見つめ



絡まる鎖を見下していた。

数時間、私は彼女を或いは押倒し、或いは荒々しく抱き起し、又髪の毛を掴み脚で蹴倒して、様々な緊縛の肢態を数本のフィルムに納めた。六米のエヤー・レリーズのゴムパイプが終始、私の手元

で握りつぶされていた。

自ら演じ、自ら撮り、約一時間ばかり、流石に疲労を覚えて、フト腕時計に眼をやると、針はすでに六時を指していた。

確かにひろ子はマニヤとしての緊縛の醍醐味を味わったに違いない。しっかりと赤くうるんだ瞳が、適度の疲労とけだるい満足とを示していた。猿轡

てみたいのねえ、辻村さん、この眼鏡をかけた私の写真、きっと下さいね——」

私は再び、ひろ子の口中から溢れ出るくらいにぎゅうと手拭を押し込み、その上から、しかりと猿轡をした。

ひろ子は正面に私を見て微笑んだようだった。色眼鏡で遮蔽された瞳が、まるで羞恥から解放された一個の生きもののように、私の前も顧みず、手錠のはまった両手首を凝視し



の奥に洩れるうめきが、間歇的に彼女の五体を震わせていた。

「そろそろ止そう、もう六時だよ」

ひろ子の体をとぎほぐすと、私は煙草に火をつけた。のろのろと彼女は猿轡を外し、静かに縄に麻痺した両腕をもんでいた。

「とうとう、おしめもビニールのカバーも使わなかったのネ」

「あッ失敗った。すっかり忘れていた。どうもどうも、私が縛ると、どうしても私式の緊縛本位の嗜虐に当り勝ちになる。切角、わざわざ持って来たのに残念だったね」

「いいわ、この次で——」

「うん、この次にきつと使うよ。これ許りでやることにしよう」

「随分、痛かったわ、私自身なら、加減出来

るけど、全然容赦しないのね」

「痛かったら、どのモデルもすぐ痛いっていうんだ、悠紀子さん以外はね、でも貴女は、猿轡で、ものが云えないから、私には分らなかったんだ」

「股縛りは特に痛かったわ」

「痛いって？」

股縛りなんて言葉を、平然と云う彼女に、私は先ず先ず飼育第一日は成功だと思った。

口中に押し込んで唾でじとじとになった手拭を、私はさりげなくシヨルグーバッグに終い乍ら、これを、”とやまかずひこ氏”に進呈すれば囁かし随言の涙を流されることだろうと、フト思ったりした。

「何だか、縄を解かれてみると、あちこちが痛んで来たわ」

竹野ひろ子は、肩をしかめて、そっと服の上から乳首を揉んでいた。

私が彼女の初めて縄を受ける淑やかな姿に思わず、フト刹那の激情にかられて、桃色の乳首をブライヤーでぐいと挟んだのが、今になってこたえて来たのだろうか——

「随分、乱暴なさったんでしょ」

「緊縛と嗜虐に囚ってはね、併し、貴女はそれによって陶酔感を得られ、男性たる私は、





貴女との最初の言葉通り、約束は固く守ったつもりなんだがね」

「……………」

ひろ子はうつむいてなんとなく頬を染めた、そんな時、インテリ臭味は影を没して、赤裸々な乙女の姿だけが、いじらしく私の眼に焼きついた。

「今度はいつ？」

ひろ子はささやくように、甘い声で問いかけた。

「今月中は私も仕事で忙がいから、じゃあ次は来月の初めにしよう、貴女はいつでもお休みはとれるんでしたね」
「ええ、前の日までに電話して下されば、なるべく、早くして頂戴ね、持ちどうしいわ、私。」

「その時は、これさ——」

私は箕田氏から預かった、風呂敷包みを一振りして見せた。

× × ×

黄昏の国道十六号線を、私は和歌山へ向って飛ばしていた。傍らで、ひろ子は私の肩に頭をもたせかけ、車窓から入る快よい海風に頬をなぶらせながら、初めて味わった緊縛の愉悦を甘く反芻するように、じつと眼を閉じていた。

「今度お逢いしたとき、今日お撮りになった写真、全部見せて頂戴ね」

「ああ、いいよ」

「奇クへこの写真のせるの？」

「ああ編集長に渡して、文中に数枚、それに巻を追ってチラチラとね、ニューフェイス竹野ひろ子『黒眼鏡の女』なんてね」

「今日の出来事、みんな書くの？」

「ああ、書くつもりだ」

前方のヘッドライトの交錯する度毎、瞬間の間に、私の心は運転に緊張していた。返事もつい上の空だった。

フト、首筋にぬくみを覚え、それがひろ子の私に与えた、喜びのキスとする頃に、車ははや、孝子峠の急坂を下っていた。

(終り)

女性の切腹

凶 礼 式

数 寄 咲

ずいぶん前のことなのですが、偶然の機会に、「小笠原流凶礼式」という、昔の写本——美濃紙へ毛筆で書いて綴じた本を、一日か二日ばかり、借りて読んだことがあります。つまりはら切りをする時の、服装や、肌の脱ぎ方、刀の持ち方、お腹へ刀をつき立ててからどういうふうに切るか、切腹が終ったら、その死骸を、どんなふうに着におさめるかというようなことを書いた本です。この写本を書いた人は、たいへん絵の上手な人で、ひとつひとつの説明に、細い毛筆で、挿絵が大きく丹念に描いてありました。その中、男性の切腹のことは、一応省きまして、おんなが腹を切る場合のことだけを、記憶しているだけ、書いてみます。

挿し絵はよくわかるのですが、写本の字は、くずし方がむずかしくて、わたくしのよな学力のない者には、とても読解できませので、お恥しいことですがとび読みをいたしました。中康弘通先生の御著書や、他の切腹についての著述などで、この小笠原流よ

りも古い写本の解説を読みましたので、それを補って、皆様にお知らせいたします。諸先生方の御諒恕をひとえにお願いいたします。

わたくしの読んだ、「小笠原流凶礼式」は、江戸時代の元禄以後に書かれたもののようです。つまり、江戸時代中期ですから、封建の社会も秩序が整然として、その反面には、武家の生活も、儀式ばって、故実がどうのこうのと、うるさくなった時代です。

切腹する前には、食事をして、それから入浴をするようになっていたようです。その食事の献立てまで、汁は何で、おかずは何と何でと、実に詳細です。入浴してから髪を洗います。こんどは、その髪の結い方が大変で、おんなの髪を右と左に分けて、両方ぐるりと廻して、ちょうど、頭の右と左に、二つ束髪が出来るとなかに、結び上げるのだそうです。これから、自分の手で、自分のお腹をかき切って、死の世界へ飛び込むという人に、献立てや、髪の結い方などは、どうでもいいじゃないかと、ちよっと滑稽な感じ

もいたしました。

この「小笠原流凶礼式」で、おんなの腹切りを、男とはっきり区別している点は、おんなの場合には、犯罪人としての切腹ということとを、ぜんぜん考えていないことです。封建の時代だって、おんなが、人を殺したり、悪人の仲間になったり、そのほか死罪にあたる罪をおかすことだって、沢山あったことだろうと思うのです。こんな場合に男のさむらいならば、検視の役人が「切腹を命ずる」といったような口上を読みあげて、検視の正使、その従者、切腹場の取計らいをするさむらい達など、十数人の人の目の前で、切腹をやっているわけですから。ところが、おんなの場合には、ごく少しの例外を別にしてそんな儀式的な切腹を、やらなかったらしいのです。

いろいろ総合して考えますと、おんなの場合には、藩主——つまり殿様から、切腹の命令が出ないうちに、おんなの自宅で、ひそかに切腹してしまうのが、いちばん普通の方法だったのだそうです。



小笠流凶礼式
おんゐの腹切り

ですから、凶礼式に書いてある、おんなの腹切りは、だいたいおんなが、殉死する——追腹を切る場合の作法を書いたものようです。殿様が病死して、その家来のさむらいが、夫婦揃って腹を切って、殉死したような場合のことを言っているようです。藩主の奥方が病死した場合に、奥方付きの奥女中が、追腹を切る場合もあったでしょう。

おんなが敵討ちをして、殿様の命令で、検視の役人以下おおせいのさむらい達の前で、男と同じように腹一文字に掻きさばいて、後世にまで名を残したというようなことは、二三にとどまらなかったようです。だけど、それは、ほんとにまれな例のようです。ごく普通には、おんなのはら切りは、誰も見ていない密室で、しかも、二枚折り屏風を、二双向い合せに立てて、つまりびょうぶの中で、誰にも見られないで、心静かに腹を切る、ということが作法として書かれています。

検視の役人が、おんなの家に来てもけっして、切腹の室へは入りません。別室で、おんなの腹切人——（そういう言葉で書いてあります）——と、静かに面会します。おんなは、検視のさむらい

いに、「ご苦労様に存じます」というような言葉をのべて、腹切りに使う短刀を片手に持って、しずかに腹切りの室に入ります。屏風の外には、夫とか、親とかが、ひとり控えているだけです。切腹の室には、屏風の外に、たいがいの場合、棺が用意されています。棺は、今のように火葬するのではなくて、土葬するので、人間ひとりが、すっぽりはいるような、大きな陶製のかめです。おんのは、自分が、割腹してから入れられるお棺を見ながら、もろ肌をぬぐのです。ちよっと、どんな気持ちだったでしょうね。わたくしだったら、もう、どきどきして、気が遠くなっちゃいますかね。

それから、着物は腰から上は、すっぽりはだかになるのが作法です。挿絵で図解してありました。

おんが、刀を腹につきさして、一文字なり十文字なりに引き廻したようすを見て、屏風の外の夫か、または親が、別室で待っている検視にそのことを知らせます。そうすると、検視の役人のうち、正使だけが、ひとりで屏風の中へ入って、おんらの腹の傷口をあためます。おんらは、苦しうにあえいではいませんが、まだ生きています。検視のさむらいは、おんらに向って「お見事なご切腹でござる。」というようなことを言って、さっさ

と引きあげて帰ってしまうのです。

検視のさむらいが、帰ってしまったから、切腹室の屏風の中では、腹を切ったおんらの切腹人が断末魔の苦しみに、じっと堪えて坐っているのです。このとき、屏風の中の切腹人の介抱をするのは、夫とか、親とかの、ごく近親の人だけです。それから後でこの屏風の中で何事が起るか、小笠原流凶礼式は何も書いておりません。氣丈の女性ならば、自分で血の短刀を取上げて、みぞおちから、たてに切り下げることもあるでしょう。夫が、切腹した妻の喉を切って、介錯することもあるでしょう。なにごとく、屏風の中で、他人に見られずに行われます。

おんが絶命すると、その場で用意の棺を屏風の中へ入れて、おんらのからだを棺の中におさめます。これで切腹は、完全に終了することになります。

これは、女が切腹することを、あらかじめ殿様の許可を得た場合ですから、切腹の時間も予定してあったわけです。しかし、実際には、女性の場合には、お上から命令のない中に、こっそり自宅で切腹してしまう場合の方が多かったようです。したがって、検視の役人が、切腹の場に立合うということすら、非常に稀なことだったろうと思われまします。

昔は、何分にも、ゆうちょうな時勢でした

から、女性が切腹したから、すぐ役人が飛んでくるといふようなことはありません。今日のようには、自殺だ、それっ。と、パトカーがサイレンを鳴らして、五分か十分でやって来る、というわけにはいかなかったでしょう。届出があつてから、半日も一日もたつて、やっと検視の役人が来た、という場合の方が多かったようです。

頼山陽の高山彦九郎伝によりますと、彦九郎が、九州の旅館で切腹したときのことを、こんなふう書いておられます。

「刃を腹に刺し、ともに劇談して、夜分に至る。吏来たる。燭をとって之を検す。」

昼間切腹した彦九郎は、短刀を腹の傷口から抜かないで、そのまま日が暮れるまで、ほかの人達と話しをしていた。切腹検視の役人は夜になって、やっとやって来た。(今日のようには電灯などはありませんから) ろうそくの光で、切腹した腹の傷口を検視したと書いてあります。彦九郎は、役人が帰ったあとで、もう一度短刀を取り直して、今度は、お腹一尺以上切つて絶命しました。まったくゆうちょうなものです。刀を腹につき立ててから、絶命するまでに、半日以上の間、時間を、ゆうゆうとやってのけたのですから、あきれる外はありません。



(一) 乗り方の様式

女性が馬に乗る場合「決して跨いで乗らない」という「常識」については三月号で触れました(72頁。なお35年4月号、山本・ファントジア11の項参照)。

サリケイトー「あのあなた、まがって乗るんでしょ、メイムさん」

メイム「いいえ、いえ、いえ、腰かけ乗り

マゾヒズム通信

馬 と 女 性

鞍

良

人

ですの。大佐が腰かけ乗りを習えといってきたかなかったものですから。あのう本当のレディーの乗り方は、これに限るんだと申しまして、とても、あの品があるって。馬鹿ですね、もちろん。だって今の時代に腰かけ乗りなぞする人ありませんものね。でもあたしこれしか乗り方知らないんですの。あああノ「メイム叔母さん」という映画台本に、以上のようなセリフがあります(原文英文、訳文

は研究社版による。三十四年十二月号、原「芸術評」参照)

ニューヨークから、ボーリガードという男に連れられて南部ジョージア州ペカウッド農園へ来た無軌道娘メイム叔母さんが、ボーリガードの女友達サリケイトーに謀られ、歓迎のためと称して狩に誘い出される場面です。結局「腰かけ乗り」しか心得ないメイムは冥想号という荒馬に乗せられて、あぶない目に



会うのですが、幸いにたすかった上、キツネを捕えました。

(二) ヴァルキリ及びアマゾーン

狩に連れ出されるとは知らないメイムは最初、サリケイトー(「南部一のとこずり娘」)から、馬の話を持ち出されたとき、「あたし馬は大好きですわ。だって、ニューヨークでは一日だってあたし、長靴はかない日はないんですよ。毎朝明け方に起きて中央公園を一回走りかけ抜けるのが日課ですの」と話しました。

結局、乗馬用具も、馬もサリケイトーから提供されることとなって前項の通り狩に参加することとなったわけです。首尾よくメイムが乗りこなし終えた時、ボーリガードは叫びました。「万才三唱だ、みんな、この可愛いヤンキー・ヴァルキリのために！」

この「ヴァルキリ」というのは、北欧神話にある軍神オーディンに仕える「戦の乙女達」です。オーディンの命により、金銀の兜、紅色の胸甲を着け、投槍を閃めかし、翼ある白馬に打ち跨がって人間界に舞い降る。そして戦場を駆けめぐって、戦死者の中から特に勇敢な働きをした者を選んだ上、それらを抱い

て虹を渡り、ヴァルハラ館に連れ込む。そこで、はなやかな饗宴を催して勇士の霊をもてなします。(34年10月号「麻生氏意見」に紹介されている。「愛の喪章」の項参照。)

空中を馬にて駆けるヴァルキリ

勇士の霊をうたげに招く

ギリシャの神話で、馬を得意とする女性はいうまでもなく「アマゾン族」です。五月頃でしたか「アマゾンの女王」という映画を見ました。この映画では、武勇を誇るアマゾン族も最後の方で男盗賊軍に攻め込まれ散々敗北するのですが、枷を解き放った男奴隷達の活躍でやっと助けられるのでした。アマゾン族が負けるのでは本当は面白くありません。せっかく映画をつくるからには、敵をギューギューに屈服させて大勝利を収める方が楽しい。

日経新聞に藤島武二作「アマゾーン」という絵が紹介されています。説明記事には「アマゾーン」は、女だけで国をつくって一人の女王によって治められていて、弓と日月形の盾を武器とし、また斧あるいは槍を用い、すべて馬に乗って戦ったという。作者は、あかい海水着を着た少女をたくましい馬に乗せ、なごさを漫歩させている。スポーツを通して健

康美をあらわそうとしたもので、その題意も、前述のアマゾーン族にちなんだものであろう。海と砂浜を背景にして少女と馬が放胆なタッチでえがかれているが、波打ちぎわの黒い仔犬の白と黒との対比など藤島の装飾性もよく示されている。(一九二五年第五回帝展に発表した作品である。(隈元謙次郎)「日経8月11日「美の美」」)

女性が海水着のまま馬のりになった映画のことは「馬化白書」で触れました(34年9月号96頁)。あの「エデンの海」は、もう相当昔の事となってしまうから、再映画化をしていただいてよい頃と思います。巴の役を演ずるにはどの女優がよいでしょうか? 写真では、これも昔のことになりますが、水着姿の一群のアメリカ少女が砂丘を馬で駆けて行くのが「ライフ」誌上にありました。

日本でも湖畔のキャンプ場などで近年見かけられる風景です。

いさましき馬蹄のひびき近づくに

馬上は水着の乙女なりけり

姫われら水着のまままで跨がれば

馬上の快感いやつのり来る

馬の背に水着姿で跨がれば

なおさら烈し乙女らの責め



美人われ馬のり姿水着にて

責め楽しまん心ゆくまで

ビキニ・スタイルの乗馬写真は「別冊笑の

泉」三十四年十一月号（オールグラビア版）

「高原ムード」の項69、71、72の各頁及び「女の画報」誌四月号「おんな上位で遊びましょう」の項117、118、119頁にそれぞれ出ています。118頁には三つの情景があつて、その一つは、一頭の馬に三人の女性が乗っています。

一人がスラックス姿、次が全裸、最後の人がビキニです。最初の人だけ逆向きに跨がって片手を上げています。「ハダカで跨った感じはトッテモ素敵」とか書かれています。全裸乗りは結局三つあるのですが、いずれも鞍の上です。（以前35年6月号で紹介しました大室高原の裸乗りは鞍がありません）

大胆なビキニ姿で騎乗せよ

ボーイハントは容易なるらん

裸にて馬のりすれば乙女らは

天にも昇る不思議な心地

「別冊土曜漫画」6月号グラビア特集「馬と

緑」は8頁にわたる裸馬とモデルの女のフォト。女（浅草新世界出演左のり子）はいずれも上半身は真裸で、そのうち二景がスラックスばきの馬のり。残りは乗っては居りませんがパンティ一つといういでたち。「さあ海まで一駆しよう。白い砂に足跡がつきると、その向うに青い海と青い空が広がる」というような文句がそえられています。

コンクール一位を誇る肉体美

肌もあらわに馬を楽しむ

責め馬を鞍も置かず試みよ

パンティ乙女快からん

馬の上パンティ姿で令嬢は

リズムに酔えり快くして

水着姿ではありませんが、ショートパンツの女性が白馬に跨ったカラーフォト「五月のうた」が「アサヒ芸能」誌にありました（5月14日号巻頭）。「しなやかな牝馬の曲線には若い女性が与えるある種のおこがれがひそんでいる。天を駆ける白馬への郷愁を表現してみたかった」（モデル・佐々木正代、馬仁川

競馬場ミスタカユキ号）「すみ渡った空、遠景に山脈、近景にビルがそそり立っている。色彩が鮮かで好ましい。

白うまにモデルの女またがれり

赤き縞地のシヨーツスタイル

ふくよかな腿むき出しに馬に乗る

シヨーツスタイル鞍置かずして

シヨーツはき腿もあらわに跨がれば

馬の背ゆれてリズム楽しき

（三）ピーピング・トム

「それならお前、真っ裸で馬に乗って街中を駆け廻れるか？人出の多い市場もだぞ。もしそれが出来たら、お前のいう通り市民の税金を軽くしよう。」いくら馬好きな妻ゴダイヴアでも、まさか、そうは出来まいと考えて、コヴェントリの領主、マーシャ伯レオフックは、彼女の願ひ出にそう答えました。

自分が、唯、そうしさえすれば重税に苦しむ市民が救われるのだ——そう思い直したゴダイヴァ夫人は、それ位わけのないことでは

ないかと自分にいい聞かせるのでした。彼女は
はおふれを出して、某日は正午まで、何びと
も固く家をとどして外に出ぬようにと全市民
に命じました。その日がやって来たとき、こ
の若き美貌の夫人は長い豊かな黒髪の外には
蔽うものとて一つなく、敢然と愛馬の背に打
ち跨りました。そのいみじき心ねに深く感
じた市民達は、みな戸を固く閉ざして彼女の
命令に協力しました。

しかし、わが家の戸口にひずめの音が近ず
いた時、どうしても、たまらなくなつた仕立
屋が一人いて、彼は戸のすき間から貴き夫人
の乗馬姿を一目拝もうと致します。彼の視線
が馬上に注がれた、その瞬間に目がくらんで
しまったのです。(後光さす肌にくらみて目
なえせし奴隷は土に這いつくばれり八月号
山本節夫) 十一世紀の英国の出来ごと。世
にせんさく好きな人をピーピングトム「のぞ
きのトム」と称するようになったのはこの仕
立屋の名前に因んだといわれています(例え
ば富山房大英和辞典を引いて見ましょう)。
婦人は夫のいうがままに裸体騎行をなした
り。市民は婦人の篤志に感じて敢て婦人の騎
行を見んとする者なかりしに、独りトムとえ
いる裁縫師窓より覗いて裸体の婦人を見、不

思議にも其眼潰れて盲目者になりたりと。」
さしあたり小生などもトムの末裔なのでしよ
う。(映画「ピーピングトム(血を吸うカメ
ラ)」はゴダイヴァ物語と関係ありません)

裸形にて町中馬で駆け抜ける

心ね優し伯爵の妻

コヴェントリ祭りの催の一つとして、一六
七八年五月三十一日から、野外劇ともいわる
べき「ゴダイヴァ行列」が祝われるようにな
り、これがきそく的に一八二六年まで続けら
れ、ゴダイヴァパレードはコヴェントリ祭の
名物とさえなるに至つたといわれています。
もし今でもまだ復活されていないのなら、是
非復活していただきたいし、日本でも、この
美談に因んだ催を始めてほしいものです。コ
ヴェントリの市民を重税から救つた十一世紀
の美挙(ゴダイヴァ騎り)をテニソン(十九
世紀、桂冠詩人)は詩に歌いました。コヴェ
ントリ市、ハーフォード通りにはピーピングト
ムの像があり、これはおそらくセント・ジョ
ージにかたどられたものであらうと大英百科
事典にみえます。——が、これはどういうこと
なのでしょう? セントジョージというのは勲
章や、貨幣、絵画で、その馬上竜退治像がな
じみ深い英国の守護聖者です。ピーピング・

トムが馬乗りで竜退治などするのは変だとす
れば、退治される竜の方ですか? (それだと
「奴隷は土に這いつくればれり」のイメージ
に合いますが。)

のぞきみてまなくらみし仕立屋は
竜の如くに退治されしか

(四) ハーディの短篇小説に 登場する騎馬女性

「内外の文芸作品」からスクラップせよと要
望されるむきもありますので(34年10月号麻
生氏意見)、海外の文献に疎い小生ながら、
ピーピングトムの出た序でに同国のハーディ
短篇に出る騎馬女性を紹介いたしましたよう。

(1)「——何と、驚いたことじゃありません
か——城壁の正面から一人の婦人がつと現
われて、たった一人の供を連れきたきり、ま
っすぐ馬を野原に乗り入れると、そのまま
味方の兵が一面にたむろしている丘の方目
指して、づかづか進んで参ります」「妹の
方では頭を振ったきりうなずかうとは致し
ません。足早に幕内を出ると、そのまま馬
に乗ってまたお城へと帰って行きました」
「彼女が丘を降りてその間の地面を越え、
打ち乗る牡馬の白い尾先が稜堡の陰に見え



なくなると、今まで目の前に見ていたときよりも遙かに妹の身の上が彼には案じられて参ります」(「アンナ・バックスビー夫人」より)

(2)「三人ともナイト爵位をもった名門の出であります、それがまた姫に会う方法といたら、お互先を越されまじと思う心配の余り、夜も日も明けぬといった有様でした。姫が馬で出るところ、徒歩で出るところ、何処でも構わずその途中を遮って引き止めます。」「姫の方でも」「常には勇氣もある陽性の女人で、あわてることなどもめったになく、嬌態とまでは行かずとも多少大胆な諧謔をも弄せる氣質」でしたが「そう男たちの方から熱心に真剣に出て来られると、さすがにお附き合いが心配にもなつて来ます」(「ペネロピー夫人」より)

(3)「ここに容色稀代、花を欺くその美貌のために、その地方の殆どすべての貴顕紳士から、おもねられ、いい寄られ、そして素性を損ねられてしまった一人の令嬢が住ん

で居ました。最初のほどは、この令嬢も皆からちやほやされるのを喜んでおりましたが」「何度も何度も繰り返えされている間にはいつとはなしに喰い倦きがして、つい無理もない反動から社会的にいつて下の方にばかり目を附けるようになりました。」

「——即ち、普段は駿馬に跨り、小馬馬車を駆り、そしてあらゆる人々から恭々しい敬礼を受けている年若の女人と、ぶらぶら歩きをして材木伐採の指図をし、邸の広庭に池泉をしつらう若者とが夫婦になったというのです」(「ストーンヘンデ侯夫人」より)

(4)「ここに才色兼備」で「年若な姫が一人住まって居ました。この姫はその天稟に加えて、なかなか堂々と大風な、自分の思うことはどしどしやってのけるといった女でしたが」「この姫がかれこれ十九ばかりになったある日のことでした。お供の若者をたった一人連れたきり、叔父の家近くにある森の一つに馬をだくらしていた(彼女は

怖れを知らぬ女馬乗りだったのです)と、だくらしているその途中に馬が伐り倒した木の根っこに躓いて膝をついた。」(「アイズンウエー夫人」より)

以上はいずれも「貴女物語拾遺」(ア・グランプ・オブ・ノーブルデイズ)に登場する姫君達です。訳文は黒沢清訳(春陽堂文庫)によりました。

(1)は、革命戦争のとき「民党」側の軍が、「王党」側のある居城を包囲します。包囲軍を指揮している貴族が、いまは敵側になっている相手にとついでいる、自分の妹の身を案じているところです。兄に会いに来た妹は、「兄上はこのような不忠の徒に味方してわたし達を苦しめようとなさいます」となじり、降参することはもちろん脱出することさえ肯じませんでした。(2)は三人のナイトにしつこくいい寄られたペネロピー姫が、三人共に結婚を承諾した結果、夫になった男は次々と死亡し結局三人に約束は果たしたものの、三番目の夫は、このままだと自分も死ぬのではなか

ろうかと不吉なものを感じて外国へ逃げ出してしまします。姫は甚だ不名誉な噂をたてられた末、重い病に罹り、やっと夫がかけつけて戻った時にはもう助からない程重体でした。(3)は、身分いやしき男と、ひそかに通じた姫でありましたが、男がしのび会いに来たとき、男は急死してしまします。死体の始末に困った姫は、ずっとその男を恋しく思っていた身分の低い娘に一切(生れた子供まで)を押しつけて世間体を繕うことに成功しました。しかし後、子供が立派に成人した姿を見ると、相手の女との間に争いを起すこととなるのでした。(4)「怖れを知らぬ女馬乗り」など、なんとなくしたわしげな女性ですね。事実、姫の美に目がくらみ、魂うばわれ無暗と慕う男が現われ、やっとのことで結婚してもらうところまで漕ぎつけたのでした。しかしその男に、結婚した前歴があつて、別れた性悪女が実はまだ生きていることを知ると、この嬌慢なマリア姫は、まだ南米にある夫の家に着きもしない途上で、怒ってさっさと故郷に帰ってしまします。男は失望のあまり、救い難くもみじめな破綻者に陥らされてしまうのです。後、華族の夫人におさまったマリア姫の邸の庭師に住み込んで、あわれな最後を

遂げます。作中、「姫の方にもつい男虐めの喜びといったものが感じられて参りました」「この我儘気儘な婦人は忽ちその本性を表して怒氣満面」「今はもう性格の一部ともなっている傲慢な酷しさ——華族に成り上つた身の榮達に、持って生れたその性格が強まりこそすれ弱められはしなかったその高慢さで」とか、或は「彼としては懲罰的待遇をうけられようと思われたのです」「彼女の侮蔑も愛と思われるばかりに心ぬくもり、短いっけり」などというようなところが出て来ます。

新聞のデパート広告に、裸馬に婦人が跨った馬上像の載っているのがあつて、「楽しいスカートです。さっそうと歩いてください昔イギリスの女性に愛された乗馬ズボン」デバイデッドルックが、今ヨーロッパで流行しています。そのデバイデッドルックで乃武夫がB・Gジュニアの方に楽しいスカートをつくりました。キヌロット風に開いたストラックス風の「デバイデッドスカート」です」とありました(8月12日朝日夕刊)。

こんなところからも窺えますように、若き「貴女」達は正に馬好きだったのでしよう。

しかし馬のりするのは「貴女」に限らないのです。「そんな恰好で彼女が入って行っても、誰も驚かなかつた。百姓の細君が馬に乗って出かけるのは、当時は今よりもずっと普通のことだった。」と述べてある作品(「萎えた腕」)があります。この「彼女」というのはガートルード・ロッジという二十五、六才の若妻です。夫の前妻(ローダ・ブルック)の夢の中に「薄色の絹のドレスを着、白いボンネットをかぶって」立ち現われ、寝ているローダをからかい半分、ギューギューに押えつけて苦しめました(「胸の上に乗っている「ガートルード」の身体はだんだん重くなつてきて、青い眼は意地悪そうに彼女の顔を覗き込む、やがて、からかうように左手を突きだすと、はめている結婚指輪がローダの眼を射るようになった。癪にさわって堪らなくなる同時に身体の重さで呼吸が詰りそうになつた」)。それがため彼女は死にものぐるいになった相手に左腕をつかまれて床に振り落とされたのです。

それ以来というものの、つかまれた箇所が萎えしほんで行き、それに比例して夫の愛からも、うとんぜられ勝ちとなるのでした。何とかして直そうと、いろいろ薬品も試みましたが



がよくなりません。そこで最後の手段としてひそかに意を決し、魔術師に教えられた通り死刑囚の首に触れるおまじないのため刑場まで出掛けることとなったのでした。

「最初車で行こうと考えたが、考え直して馬で行くことにし、普通人の通る道は避けようと思った。もっとも夫の厩舎にはどうひいきめに見ても婦人用の乗馬といえそうな馬は、彼女用の牝馬を飼ってくれるという結婚前の夫の約束にもかかからず、さしあたって一頭もいなかった。しかし荷馬車用の馬は立派なのがたくさんいた。中でも女丈夫とでもいいくらいの一頭は、ソファのような幅の広い背をしていて、この際の役に立ちそうだった。事実それまでにも、ガートルードは気が鬱してくると、時にはそれに乗って散歩に出かけたこともあった。その馬を彼女は選んだ。」「馬は、重たい足どりでのろかったが、しっかりした馬で、挽馬ではあったが、足並の乱れない馬だった。」（上田勤訳による）

ガートルードの「騎馬行」はプレジャーのための騎馬とはいえないわけですが、楽しみのために乗馬を愛好する女性も居ります。

「ジュームズは物静かな、家庭的な、読書好きの男なので時折細君のオリヴァとの間に、溝を感じるのでした。細君（オリヴァ）は乗馬や、馬車のドライブや、戸外の散策などが大好きでしたからね。ところが、いつもあちこちをブラつき廻っているステイヴンの方は、至って家庭的な細君（エミリー）を持っていました。」この二組四名が或る日、一緒に海に臨む遊園地へ出掛けました。活動的なステイヴンが、ジュームズの妻であるオリヴァを伴って、ボートに乗って嬉しげに沖へ漕ぎ出して行ってしまったあと、残ったエミリーはジュームズにいました。

「あの人達が結婚なさって居たら、それこそ似寄りの御夫婦になったでしょうに。」

「私、ときどきステイヴンの心にはオリヴァが一杯になっていると思うのよ。あの人（オリヴァ）が駄馬の一匹に乗って、駄足でうち

の外を通っては、良人の気を惹く時なんぞは殊にそうだわ……私にはああした事はとても出来ないわ。私、馬はどうしても怖くて駄目なの」

「僕もどうしても馬党じゃない。家内のために好きな振りはしてるがね。」ジュームズは呟きました。（「ハードカム家の物語」福島文之助訳による）

そういうように、洋の東西を問わず馬のりを楽しみにしている女性は限りなく居ることは間違いない。本場の馬が居なければ回転木馬で代用しても、馬のりの味を楽しむうとするらしいのです（10月号「春木告白」112頁35年4月号「山本ファンタジア」131頁）らしいどころではなく、そうであるからこそ回転木馬（メリー・ゴー・ラウンド）という「すばらしい装置」が発明されたと見られるのです。（それに、本当の馬なら怖い女性でも、この「装置」によって救われることも考えられます）この馬の運動に身をまかすことによって恍惚感に酔っている女性をハーディ

はえがいています。

「その陽気さはホメロスのえがいた天国の展開であった。……その光の手前を、多かれ少なかれ横顔を見せた何十の人間が、右に、左に、交叉したり、上ったり、クルクル廻ったりして目まぐるしく動いているさまは、夕映を背景にした蚊柱のように見えた。その人たちの運動はまったくリズムに合って、機械仕掛けで動いているかに見える。いや、やがてわかったが、本当に機械仕掛けで動いていた。」

「見ればすばらしい装置で、おようどいま、盛んにまわっている。円の真中に例の楽器があつて、その調子に合わせて木馬の面々はグルグルまわっている。」

「木馬の一つ一つが、本当の走る馬のように高くなったり低くなったりするのである。それも二頭ずつならんだ馬の、一方が高くなつたときにもう一方は踏み切ろうとするように調節してある。乗り手たちは、この現代の最も愉快な遊戯の、本物の馬のような上下運動にすっかり魅惑されている。はじめのうちは、乗り手の一人一人を見わけるとはむずかしかったが、やがて何人かまわっている美人たちの中から一番美しい少女を選びだした。真赤なスカートに黒っぽいジャケツ、茶色の帽子に茶色の手袋をした

少女だった。女は馬の運動以外、完全にすべてを忘れていた。その顔は夢の中のような恍惚感に酔っており、いまだけは自分の年も経歴も顔かたちも、まして自分のなやみも、念頭にない。」

「男は、いま眼の前のこの若い女が、まるで天国にでもいるように幸福そうなのを見るのは、まことに心の晴々する思だった。」

「いままでに見たことのない造化の傑作、まわってくるたびに彼女は男の心に一層深い印象を残すのだった。と、とまる時がきた。乗り手たちの溜息が聞えた。男はグルツとまわって、女がおりて来そうな見当に歩いて行つたが、女はそのままである。

（馬責むる乙女ごころの楽しくて
跨がり止めず馬潰るとも）

あいた鞍がふさがりはじめたが、女は明かにもう一回つづけるつもりらしい。男は彼女の馬のわきへ歩み寄って、快活に、面白かつたですか、とたずねる。"とつても"女は目をクリクリさせて、"こんな面白かつたこと、わたし生れて初めてだわ！"「"こんなすばらしい機械がどうしてできるんでしょうねともいった。"」

「自分は都会より田舎のほうが好きでもある。それというのは君のよう

な娘さんがいるからさ、などと」男がいう。

「そのときメリー・ゴー・ラウンドがまた動きはじめた。浮きうきした娘の眼には、いまの美青年の姿も、市の広場の燈や群集も、そのむこうの家々も世界全体も、前の通りにグルグルまわりはじめた。」

「馬の足がまた鈍ったとき、男は女のわきに寄って、もう一まわりどう？と誘った。」

「女はもう一度廻われることになった」（女あるじ）

ハナム夫人は「家を出、市場にむれる群集の中に入つて行つたが、すぐに、馬上のアンナを見つけた。とまるのを待ちかねて夫人はきびしくいった。"アンナ、どうしてそんな勝手な真似をするの？十分だけの約束だったじゃないの？"アンナはポカンとした。うしろのほうにひっこんでいた青年が応援に出て来た。"どうぞ叱らないで下さい"丁寧な彼がいった。

"わたしが悪いのです。馬に乗ったところが実に美しく見えたので、わたしがもう一度と引止めたのです。"」（「西部巡廻裁判途上」ハ朱牟田夏雄訳Vより。但し円カッコ内は原文にありません）

結局、男はあきらめてもあきらめきれない、不覚の結婚をしてしまふ運命になるのです。が、それというのも実に「馬に乗ったところ」



に見とれてしまったことに始まるのでした。

ハーディではありませんが、新中国の小説が絵入りで新聞に紹介されていたのでついでに申します。「梁斌(リアンウー)の作品『緑林行』(河北省のある湖畔の馬賊部落が舞台)では——馬賊の首領に美貌の娘がおり、これと党の地下工作員が知りあう。二人が裸馬を走らせてピストルを放ち、腕前を比べあうあたり、あの果しない大陸の空にひびく銃声がきこえてくるようである。:(竹内実)」

馬の上はてなき曠野かけめぐる

馬賊の娘鞍も置かず

(五) 女子大学生と馬

今年も去る四月二十三、四の両日、世田ヶ谷馬事公苑で女子大学生の馬術戦が展開されました。

大学の姫ら競いて集まれる

馬術の試合誰ぞ勝つらん
鞍の上若き力のみなぎれば

火花すさまじ乙女の拍車

その模様は、「週刊大衆」4月17日グラビア「ウマに乗れるかしら」(全三頁)に収められています。「女性の馬術ブームの粋をゆく第七回関東女子学生馬術リーグ戦が、馬事公苑で行われ、熱戦十五試合青山学院大学が今年の優勝をさらった。選手たちはかけ声もいさましく馬を乗り回していた」

馬術部の女子学生(学習院大学)の紹介は昨年の5月20日朝日新聞夕刊の写真に出ました(それは沼雑報三五六に詳しい。35年8月号)。「近ごろの娘さんは馬をこわがらなすぎて困るんだそうだ。去年、青森で若い女性が障害に失敗し、転落死した(24年12号沼雑報二九九及び麻生氏意見八十二V参照)いくら母たちが「せめて障害だけはやめさせて下さい」とクラブに頼みに来ても、「趣味としては高尚よ」とどんな荒れ馬にもおくせず、たづなさばきもあざやかに、どんどん飛んじゃ

うそうだ」

ちか頃の女子大生の大胆さ
荒れ馬蹴たて障害を飛ぶ

母親の願いをよそにおそれ無く

娘馬駆けり障害を越ゆ

「女性自身」創刊第三号(33年12月26日)に女子学生の障害とび写真がありました。山脇短大生杉岡かよ子(21才)。「可愛い馬。ハツとするスリルと爽快感。口ではちよつといえませんが。とにかく馬の顔を見ると、たまらなく乗りたくなるんです」キリリとした口元が、言葉すくなに語ってくれた。(東京乗馬クラブにて)」

馬に障害を飛ばせるとき事故をおこすことがあります。「(札幌)三日午前十一時半ごろ札幌市北大馬場での北大招待全日本女子学生馬術競技大会障害飛越個人戦に出場した東京世田ヶ谷区北沢二八ノ六、東大教養学部二年中原亘子さん(20)は、横木をとびこす時落馬、北大病院に収容されたが頭を打って重体」——新聞に出た記事です(8月8日朝日)

障害を飛ばせし時ぞ落馬せる

女子東大生負傷ぐやしも

東大生といえば、樺美智子さんの騎馬写真もある。友達にくつわを取らせています。「スポーツが好きで、乗馬姿の写真を見せておかあさんをおどろかせたあなたも、大学進学が近づくと、当然忙しくなりました」(母樺光子手記・週刊朝日35年7月3日号)。

騎馬姿遊びしころは高校生

安保の女傑散りて今なし

京都大学にも騎馬女性が居て、オリンピック選手荒木雄豪(コーチャー)と一緒にうつっています(週刊文春35年4月4日号)。

それからカラーフォトでは五島いづみのが美しと思います。これは障害飛びではありませんが、乗馬好きな娘の喜びが見事にあらわされて楽しい。乗馬靴も黒ばかりで、娘ざかりのどっかりと跨がった彼女の首には桃色のネッカチーフが大きく結ばれています。「歌人五島茂氏・美代子さん次女いづみさん(22)・学習院短大国文科二年」……三年前からあこがれの藤間藤子先生のお弟子の末に入れていただき日本舞踊の稽古をはじめたが、名取さんになるまではお嫁にいかないという。お稽古がないと体が変わるとかいて、去年の夏休

みに軽井沢で貸馬に乗ったのが病みつきで落されても馬の弁護をしている。無類の子ども好き、動物好きで、馬でも犬、猫でも向うから笑いかけて、話しかけて来るといふ家庭的な娘でもある。(五島美代子)撮影田沼武能

(婦人倶楽部35年2月号「うちの娘」)

いつ見ても馬上姿のゆたかなる

歌人の娘年頃にして

(六) 馬のり短歌

御存知の如く35年4月号で山本節夫氏が、与謝野晶子の「三尺の柳を折れば大馬に春は女も乗らまほしけれ」を紹介されました(ファンタジア)。麻生氏も「キュロットに草の架つけ帰りきし美しき疲れをわれは妬めり」等の解説をなさいました(35年6月号)。

婦人雑誌には大てい短歌、俳句の頁がありますが「婦人の友」九月号に、北海道の女性が読んだ馬のり短歌がありましたから紹介しましょう。

馬飼ふと今をさかりのむらさきの

あやめの原に馬乗り入るる

(村田好子)

山本節夫氏の女王短歌シリーズ(六月号奇クサロン)は人間馬を巧みに歌いあげた傑作

これから先も続くよう楽しみにしております。又、一般雑誌で見つかった女性乗馬の歌などもその都度お教え下さい。

北海道の女性調教師については、文芸春秋二月号に出た「北海道の女」(オーシャン牧場の娘)を山本氏があますところなく紹介されました(六月号ファンタジア。5月号の麻生氏意見も参照)。その調教師(大井昭子・治子姉妹)は「週刊現代」誌のグラビア「姉妹の牧場——ダービーに賭ける夢」にもあります(四月九日号)。三頁にわたるこのフォトは、最初の頁で、姉妹が一頭の馬に乾草をたべさせています。その裏面の頁で、治子が馬に乗り、昭子が車になった牧場機具を運転しています。「このオーシャン牧場は、広さ約五十町歩の競馬専門の牧場であるが、昭子さんの経営法は、全く独創的なもので、馬の「フンバリ」を強くするために牧場に傾斜面を多く設けたり、牝馬をアメリカから空輸したり、独特の飼料を作ったりして、北海道でも「ヌーベルバーグ牧場」といわれている。」

雪の原馬つぎつぎに乗り馴らす

まきばのあるじ娘きようだい

(七) レジャー婦人



調馬嬢の調教は、道楽ではなくて家業ですが、レジャーの娯楽としての馬のりは単に女子大生だけに限らないのです。新聞に「ニューヨークの乗馬記事がある」「……いま一つ乗馬という古い遊びが復活はじめた。これもファースト・レーディ、ジャクリーン夫人が大の乗馬好きだからだ（ニューヨーク木谷支局長）」（4月29日朝日）。その写真「復古調？の乗馬熱盛り返す日曜日朝のマンハッタン風景」では、HORSES看板のかかった馬場の入口から騎馬男女が今、一鞍責めに出発いたします。

ケネディの夫人にならないあちらでは

レジャー女性の遊び馬のり

あちらだけではありません、某週刊誌の報ずるところでは、我が美智子妃も乗馬の練習を始められた由。本当なら沼先生が大よろこびなさるでしょう。美智子妃が上達して、その馬上姿が雑誌を賑わすようになれば、どれ程国中が若い騎馬女性で氾らんする事でしょう。そうなると馬不足で大変でしょうね。（

週刊読売8月27日号グラビアには、ショートパンツスタイルの女性がラケットを片手に軽井沢を闊歩している写真があつて、「美智子妃以来、ラケットは軽井沢のトレード・マーク」と誌してあります。そのつづきの頁では二人の少女が嘻嘻として貸馬を御しているところが出ています「日本版『西部の町・北軽井沢』はきょうも馬蹄のひびきと、オモチャのピストルの音にあげられている」

美智子妃も馬の稽古に励むらしい

いよいよ殖えん騎馬する女性

新聞写真にも「天高く……にぎわう乗馬学校」が出ていました（8月28日朝日新聞）。

「レジャー生活」誌六月創刊号では、「乗馬の魅力」と題するグラビアが、四頁にわたつてあつて、荏原の宮本信子（26）の紹介がある（総計十場面、延べ十七の女性騎馬姿「東急アバロン乗馬学校は現在会員一三〇名、昨年からグッと婦人が多くなって、全会員の三分の二を占めており、二〇才から三〇才までが、圧倒的。大半はお勤めの余暇を利用して

いる」そうだ。

——いよいよ馬場へお出まし。大きな動物を自由にあやつる爽快さが乗馬の第一の魅力だそうだ。

——速歩、ひとむち入れると馬は信子さんのご注文どうりに走り出してくれる。全く可愛いワ。

——乗馬をえらんだのは「あんまり人のやらないスポーツ」としてだという。週に二〜三回。「馬はこわくもないし、むつかしくもなかった。落馬は一度もありません。いまはまだ走れるだけだが、障害を早くやりたい……」

——乗りまわして三十分、私はグッタリ……

手綱とる姿勇まし馬場の中

レジャー楽しむ婦人らなれば

五月頃であつたか、ある土曜日の午後テレビで、特殊技能を持った子供達の様子が次々と紹介されました。その中に「少女馬術士」が出ました。「東京・渋谷の大野豊子（中学

三年)、三枝子(小学五年)の姉妹」で——この乗馬像(豊子)は新聞にも出ていました(T.V番組紹介欄)。

馬術する少女の家庭豊なり

五万円なり馬の飼育費

「週刊女性」2月4週号には、宝塚歌劇団女優が大島の山麓で馬のりを楽しんでいるグラビアがありました。「椿の花の咲くころ」——「三原山の帰りコースになっているところだが、美しい山すそを見ながらヒトむち当てれば——夢の楽園に遊ぶよう」(月組、香路まさみ、ひでみ、高ひろ)。

またがりて楽しき限り踊り子の

腿たくましく馬上にはずむ

(Ⅷ) サーカスの馬

馬の尻を地につけさすには、サーカス娘がどんな風に馬を訓練するか、その模様を麻生氏が紹介されていました(5月号麻生氏意見)。そして「片手綱で、馬の尻を鞭打っている女性を後から」写真に撮っては、とのおすすめもありました。

小生は、まだ撮れておりません。しかし馬が手綱と鞭で責められ、蹴られ、どうにも進退きわまって、あえなく潰ぶされてしまうア

イデアは可哀そうに思いました。

絶えまなく交互に責めるムチ手綱

サーカス娘馬のり潰す

(Ⅸ) 森 繁 馬

「週刊夫婦」誌にピンキノ対談というのがあって、4月19日号のは、「モリシゲさん、お馬にならない? 乗ってあげるわ」という題でした。対談は森繁久弥と叶順子が行う。

(森繁) 立派なものだった。とくに、ナオミがハズを馬にして、ハイハイ・ドウドウなんていうところはよかったよ。ぼくは馬になりたいと思ったくらいだからね。

(叶) あら、馬になりたいなら、いまでもよくつてよ。

(森繁) そうか、じゃ馬になろうかな。でも、やめとこう。きようは人眼がうるさいしね。そのうち、二人っきりのときにしよう。それに、君はいますラックスをはいてるだろう。やはり、下着一枚のほうがいい。

(叶) まあ、いやらしい。

(森繁) みんな、女性はそういうんだけど、どうしていやらしいのかね。せっかく馬になるんだもの、平凡じゃつまらないじゃないか。下着一枚の方がいいというの

は、君に魅力があるからだよ。魅力がなければ、そんなことはいわないと思うな。

(叶) じゃ、わたし、女冥利につきるって、満足しようか知ら。

(森繁) そりゃそうさ。男性なら、みんなそう思うよ。

(叶) でもね、あの映画、わたしにはとてもシヨックだった。ファン・レターくる層なんか、がらりと変っちゃったでしょう。

「痴人の愛」以来、中年の男性なんか殖えちゃった。そしてね、すごいファン・レターなんかくるの。

(森繁) 馬になりたいって?

(叶) ええ、そんなのもあったわ。ぼくらもっと大事にしてあげるなんて、しやあしやあと書いてくるのよ。いけすかないったらないわ。

(森繁) なるほど。ファンってのは、わりかし正直なこと書いてくるんだな。

(叶) 正直すぎるわよ。

35年6月号で、「思い切り活潑に馬を駆けさせてみる趣味」をこの女優が持っていることに触れましたが、その出典は35年1月5日朝日新聞夕刊「夢のワンカット」欄です。曰く、「それにジャンヌ・ダルクの映画化なら



どうしたって総天然色のシネスコでスペクタクルになるでしょう。私はもともと活潑なのが好きだから、馬に乗って思う存分かけ回してみたい。西洋の剣で立ち回りも面白いじゃない」。

森繁が馬つとめると云い出せば

ナオミの女優引き受けにけり
思いきり馬かけさせて立ち回る

映画に出たしジャンヌダークの

男性が女性の馬になるアイディアとして、麻生氏は「ペア・テスト」利用法（あなたは出世ダービーの勝馬になれる？）を紹介された（三月号）

ペアテスト試してみようと恋人を

馬に仕たててS子またがる

美人騎手ちから尽きたる恋人を

なおも組敷き責めを楽しむ

重圧に押しひしがれて馬あわれ

乗馬の女神鞭やめ給え

又、乗馬の代用に少年馬を愛用している、やくざ女性（佐藤きみ）の記事がありました

（7月号）。この人は「三度の御飯より馬のりが好き」な人で、プレイせずにはいられないらしいのです。馬志望の男には「とことんまで」乗ってくれるそうです。（5月号奇クサロン、西田良江「女囚と少年囚」も少年馬をむやみに責めます）

ボーイ馬われまたがりて責めぬけば

見事に潰れ息も絶えだえ

馬ならん希望の男みな来たれ

わが尻下に敷きて潰さん

馬プレーではありませんが、下着だけになった中村玉緒が復讐の潮万太郎の背に馬乗りでアンマする映画がありました。「女のつりはし」でした。潮の妻役が矢島ひろ子で、下着姿のよその女が夫を尻に敷くのを見て怒り玉緒を夫の背から突きつける。女アンマ（メクラではない）は落されても落されても乗り直して揉みます。矢島ひろ子という女優は、倉仁氏写真「馬化狂通信」にもありました（8月号）、乗馬服装のよく似合う人だと思えます。あの大映カレンダーはカラー刷りで

騎ってこそ居りませんが、馬場に立つ彼女の姿が魅力です。

君知るや大和乙女の心意気

乗馬ズボンのあし踏みしめて

（藤山秀緒）

グラマ女優の馬のりの話に関連し、8月号で柳井敬子さんの発表された「揮夢譚」（海棲生物下着）は愉快でした。グラマ女優談「生きていると思うと、あまりきつく締め上げたり、脚を組んだりするのは一寸可哀想なような気もいたしました。が、そのように運命づけられた生物である以上、その特徴を生かして利用してやるのが最もいいのじゃないでしょうか。兎に角、肌触りは最高で……自転車などに跨って乗ったりした時、先日、乗馬に行ったときもですが、「キューッ」という小さな鳴声のようなものが聞えたように思うのです……。」

馬に乗る女優のフンドシ生きたれば

苦痛のあまり悲鳴あげたり

九月号の第一口絵に「座敷牢の女王とスパイ」があったのが気に入ります。捕われた25才のスパイ男が、ブラジャーとパンティの上
に赤マントを羽織った30才の女王に連日人間
サドルの責めを受ける図。

わが顔のおおむけなるをペツタリと

上からふさぐ女王の尻

映画「ブラックタイツ」を見に行ったら、

その前に題名は知りませんが外国短篇が映写されました。その中で娘さんがスカートも派手にひるがえしながら、郊外地のようなところをサイクリングしてひた走りにドンドン行くところがありました。よくそういう姿に見とれている数人の悪童ども（小学生でしょう）がいます。あるとき木かげで自転車から下り立った彼女が、どこかへ立ちさると、すかさず残された自転車に彼等がしのびより、ついその時まで娘の股が摩さつされていたそのサドルに唇を寄せるという珍らしいシーンがあったのです。隣席の女性が溜息をつきました。（悪童のしたことが、娘にみつきりでもしよなものならサドル責めに遇うかも知れぬと内心はらはらしました。）

全部未発表の最近撮影のマゾ・フオト（絹川文代——海野弘三）
大手札印画紙（9×13センチ）焼付 各組三枚一組 三〇〇円（送共）

略号(とれ)

美しくも氣高い女王様の足下にひれ伏して、その麗しき御み足の垢を舐めさせて頂き、踏みつけられ蹴り倒されて、有難く奴隸の誓いをさせられる幸福な男のフオト物語。

略号(へん)

女御主人様の喜びを感じずる男が、美女の
とに、最高の喜びを感じずる男が、美女の
寝室に伺候して、親しくその液体と固体
とを捧げ頂き、感泣にむせぶという麗し
くも悲しきフオト

略号(かお)

ふっくらと肉づきのよい足の裏がM男
の顔にぴったりとふさがり、やがて全体
重がかかると鼻も口もひしゃがり塩辛い
足の指が口に、鼻も口もひしゃがり塩辛い
ているので、只、顔を振って呻くだけ。

略号(あし)

「この横着犬奴が」と、さんざん鞭で仕込まれた挙句、女御主人様の素足の指先や足の裏を舐めさせて貰う犬男。無理矢理、口の中へ押し込まれる足の拇指、しかし首輪を持たれた犬はどうもできない。

略号(そく)

嬌慢で美貌を誇る妖女の生きた玩具となつて、氣ままな思いつきで脇腹を短刀で抉ぐられ、肩先を切られて血まみれになりながらも、美女に傷つけられる幸福に酔うマゾヒスト。

略号 (くひ)

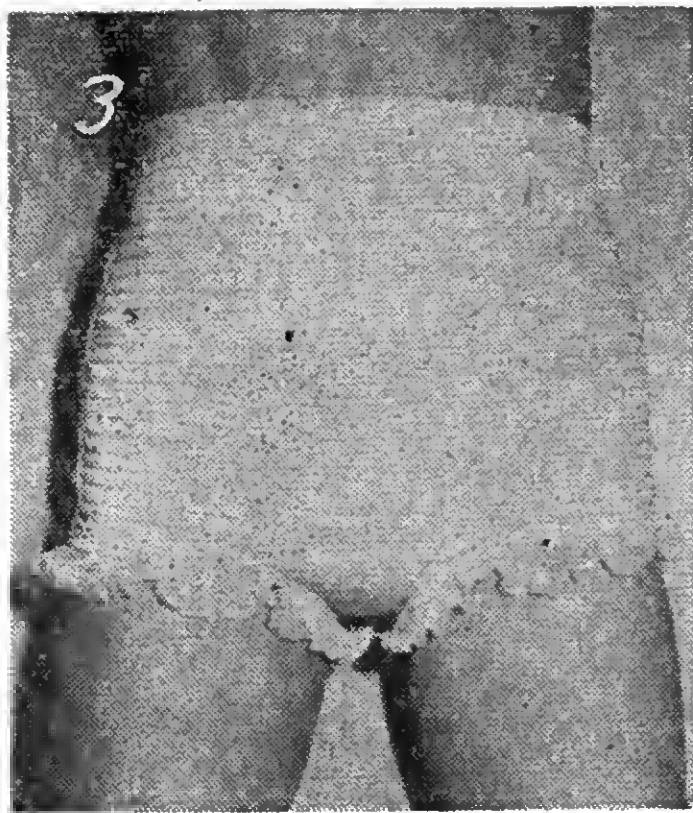
すうらりと長く伸びた白い脚がM男の首をがっつきと捕える。後手首を揃えて括れた男は這いまわって逃げるが、執拗な脚はしなやかに動いて首を締めつける。今や断末魔の恍惚境が訪れるのだ。

略号(いぬ)

男、首輪を締めて鎖を持たれた可愛い犬
預けをし、ムチうたれながら仕込まれる
犬の芸。うまく覚えたら女御主人様の
食べ残しを足の指に挟んで貰って頂く。

略号(しり)

勝ち誇った生々とした美女と、女の大
きな尻の下に呻吟してもがくMの醜男の
哀歎と喜悅とを織りまぜて、絶妙のコン
トラストをもって描いた、快心のMフオ
ト。是非Mの慰安のために一組を。



<おむつカバー

マニアの記録>

試作室レポート

関根 彰

私は機会あるごとに、若い女性に質問しました。

「貴女は生理帯を見たり用いたり

するとき、どんな気持ちがするでしょうか?。赤ちゃんのおむつを取り替えているのを見たときはどう

でしょうか?」

…と。

残念ながら、この間にはつきり答えてくれた方は殆んど居りません。女性として生を享けた以上、大抵の場合、生理帯やおむつカバーと縁をもたずにはいられない筈です。だか

らこそ、私と共通した愛着を、これらのものを感じている女性も多いのではないかと私は想像しているのですが……。

私は元来、フェチシストとして種々なショーツ、ズロース、コルセット等を愛用して来ましたが、ゴムの持つ独得の魅力に惹かれ、生理帯からおむつカバーへその興味の中心が移るにつれ、市販されていない型や、特殊な材質のものを求めるようになって来ました。そこで、自分で市販の品を改良したり、或いは新たに製作したりするようにしました。

ここにその一、二を御報告申し上げます。

おむつカバー・コルセット

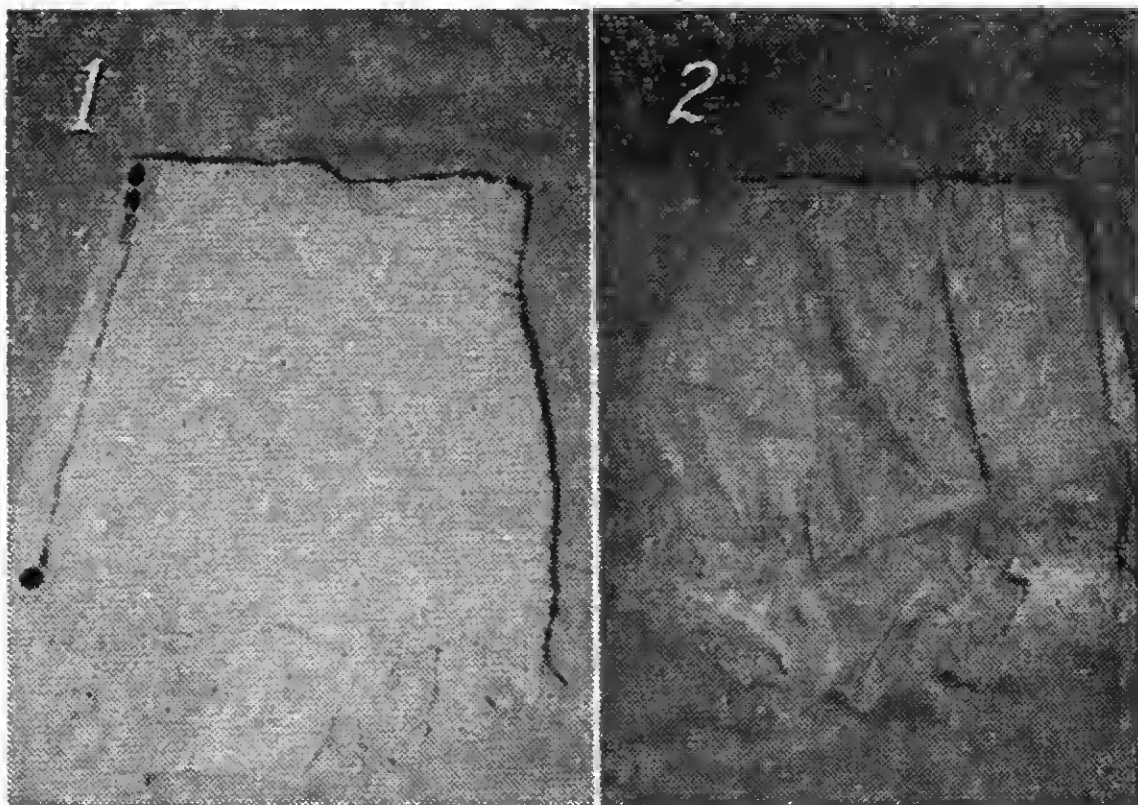
私も当初は市販のおむつカバーに満足していたのですが、やがてよりピッタリしたものを求めるようになりました。そこで、いろいろと考えをめぐらせた末に出来上ったのが、このおむつカバー・コルセットです。

コルセットのピッタリとした緊縛感を持ち、且つ、ゴムの特色が十分に生かされるという希望が、ほぼ完全に達成されたという点で私を嬉しがらせてくれました。

以下、材料、工作、使用上の所見について、順を追って述べてみます。

一、用意した材料。

パンティ型コルセット。ゴム布。フリル。チャック。ミシン糸。パネホック三個。バイアステープ一米位。型紙用紙。コルセットはパネティ型を使用しました。尚、これ



はデパートの特売品の安物で、総ゴム系織のものです。パネル付のは締りは強いのですが、工作が難しい上に、出来上りがすっきりしなかった経験がありますので、今回はわざとこれにしたのです。

理由は、パンティ型のコルセットは、もともとキッチリしていて穿く時は楽ではありません。それにゴム布を貼るのですから滑りが悪くますます穿きにくくなります。私は他にもゴム布貼りのパンティ

内側に貼るゴム布は、蔵前の間屋さんでわけて貰ったもので、黄色の上質薄ゴムです。

二、工作。

先ずコルセットを着用して、ウエスト、ヒップ、腿廻り等を何カ所も計った上型紙を作り、それに合せてゴム布を裁断しました。次にコルセットの脇を解きました。此処にチャックをつける積りをしていました。チャックを使う

を持っていてその使用経験から、片方を開けておいて、穿いてからチャックで締めるようにしようと考えた訳なのです。

縫製は、一番先に裾口のフリルをつけました。収縮しているコルセットの裾をひっぱりながらフリルを縫いつけるのは少しむづかしかったのですが、まがりなりにもどうにか出来ました。つづいて裁断してあったゴム布を縫いつけ、チャックをつけ、裾口に一コ、ウエストに二コのパネホックをつけて仕上りです。

こう書けば簡単ですが、仕上げるまでの一つ一つの作業には、やはり細心の工夫と入念さを要しました。一番難しかったのは、コルセットを着用した時と同じぐらいの伸張度にひっぱった状態で、ゴム布を縫い貼りする作業でした。でも、苦労はしましたが、根気よく慎重にやっただめか、わりあいによまく行きました。

こうして出来上がったのが、写真

のもので、(1)が外見。(2)は内側、ひっくり返してゴム布を外に出して見せたもの。(3)は着用したところです。

使用感は、私にとっては全く素敵の一言に尽きます。片側をチャックにしたのに、やはり穿くときには一苦労します。それに想像はしていましたが大変にむれます。使いようによっては立派な貴衣になるだろうと思います。

この結果から、私は、オールインワン(ブラジャー、ウエストニッパ、コルセット、ガードルが一つになったもので、一枚で全部の役目を果たスファンデーション)にゴム布を貼ったら、きっと素晴らしいものになると思って、目下研究中です。

尚、この型の欠点は、あまりにもキッチリとしているため、おむつかバーとして実際に使用できないことです。

そのかわり、着用したまま外出することが可能なのでおむつかバ

1の目的からはずれましたが、これはこれなりに私をよろこばせてくれました。

生理帯兼用おむつカバー

生理帯とおむつカバーの共通点に就いて考えてみましたが、大人或はベビーが使用すると云う違いこそあれ、いずれも防水性を狙っている点に於ては全く同じものです。だが、その防水必要度は自ずと相違があるのは当然で、おむつカバーは、防水性の点に於ては、どの生理帯よりも完全ですが生理帯がおむつカバーのように、全部ゴム張りでは、むれて衛生的によくないのと、それほど全体に防水性を必要としないので、製品化されているものは、二重式か、一重式かの差はあっても、いずれも一部分だけにゴムを使用してあります。

そこで私は、私の改造癖を発揮して、この両者を一つにまとめたものを造ってみました。これを設

計製作するに当って、次の事を念頭に置きました。

一、従来市販されている生理帯に劣らないものにする。

二、使用中に目立たぬようにするため、出来る文薄手の材料を使い、ぴったりと作る。

三、おむつカバーとして使用する際、生理帯の替ゴム用のボタン等が、肌に当らぬように、取付位置を考える。以上、三点に留意して作ったのが、写真(4)・(7)にみるような生理帯兼用おむつカバーです。実際の製作、使用に当っては

従来のおむつカバーに替ゴムをボタン、又はホックで取つけた方が簡単なのですが、そのためにはおむつカバーを、ピッタリとゆるみなく作らねばならず、そうすると今度は、おむつカバーとして

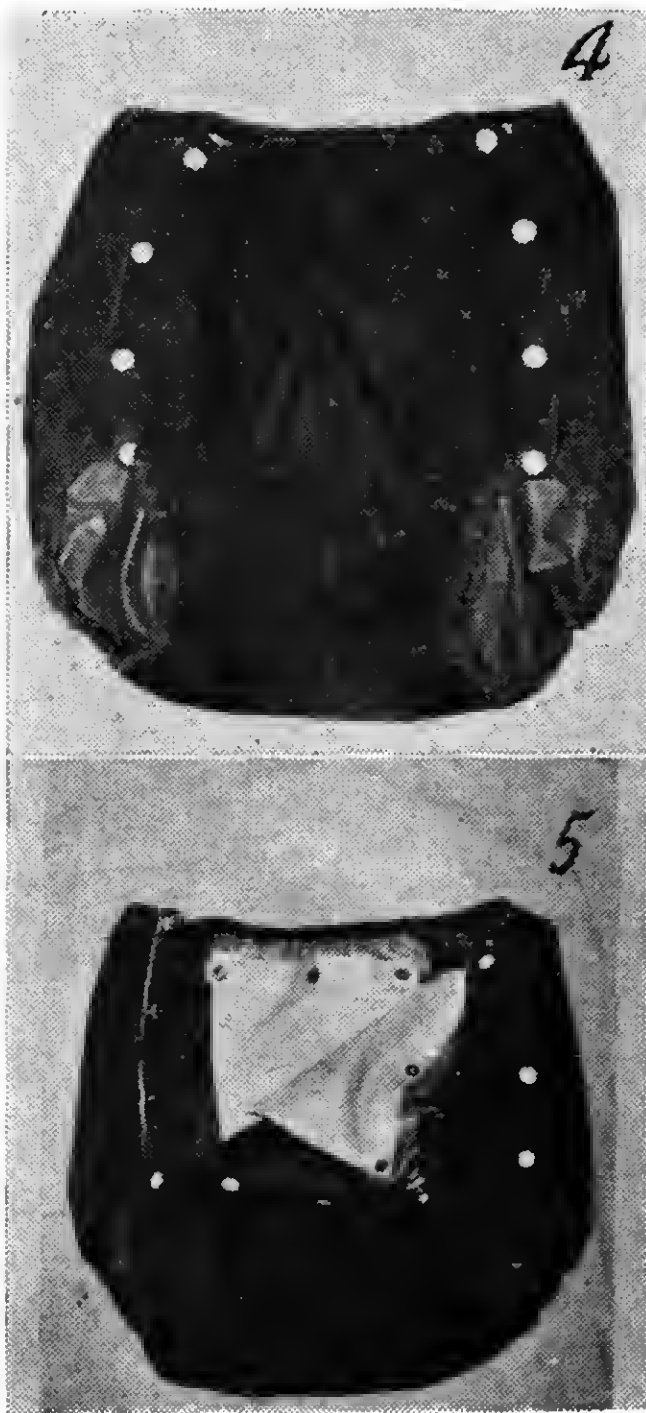
使用の際、充分なおむつを当てる事が出来ません。おむつカバーを大きめに作ると、替ゴムの効果は全くなくなってしまいます。そこで、おむつカバーはやや大きめに作り、腰の所から巾の広いベルトで替ゴムを吊って、替ゴムだけはピッタリするように致しました。その結果、略々、両方共満足出来る結果が得られました。以下、材料、加工、使用後の所見等に就いて、述べてみましょう。

一、使用した材料。おむつカバー用として羽二重ゴム引布(特殊

加工品)一米強。生理帯替ゴム一枚。替ゴムを吊るベルト用の薄ゴム三〇糎四方位。バネホック十五六個。ゴム紐を腰囲り用七〇糎位のビニール)二十糎四方位。型紙用紙。糸等。

おむつカバーは、成可く薄手に作る目的で、特殊加工のゴム引布を使用致しました。生理帯替ゴムは薬局で求められましたし、替ゴムを吊るベルトは、前回に使ったゴム布の余りで充分足りました。

二、加工。この場合やはり先





ず型紙を作りました。おむつカバーの方はあまりだぶつかないようにするだけです、実測したサイズに十糎位プラスして作りまし

た。ただ裾口だけは、少し小さい目にしました。尚、ひもをつけるのを止めて、腰まわりには、ゴムを入れておきました。

縫製は簡単で

したが、替ゴムを吊るベルトは切りっぱなしでは裂けそうなので、縁を五ミリ

位折って、ミシンをかけ、前後のウエストの所を縫う時には注意して、ベルトを止める所を一緒に縫いつけたので、わりあいすっきりしたものにになりましたし、替ゴムをベルトに取りつけた時の長さが、おむつカバーより十糎位短く

なるようにしましたので、具合良くなりました。

裾口は、ゴム布を折り返して中にゴム紐をいれました。裾口にはウール、スポンジゴム等をつけたのが普通なのですが、私はゴムの折返し作り出す微妙なひだが好きなので、これも敢えて折返しを採用した訳です。

替ゴムの取外しに就いては、一般の生理帯では、ワイシャツ位のボタンを使っていますので、それをその儘利用致しましたが、実際には、この替ゴムは取外しせず、替ゴムを取りつけたベルトそのものをおむつカバーから取外すようにしています。ベルトとおむつカバーの着け外しは、バネホックを用いました。

使用してみての感想は、おむつカバーとしては、普通のものの変りありませんが、全体にぴったりしていますので、仲々快適です。何しろ薄手にする為に、表地とゴムを別々に使わず、特殊加工のゴ

ム布だけで作ったので、普通のメリヤスのズロース等より、ずっと薄く、それでいて、おむつカバーとしての性能は充分なのでゴキゲンです。生理帯としては、替ゴムの位置が悪く、二回つけ直しでしたが、その結果、ピッタリとするようになり、至極、具合が良ろしいです。何よりも他にはない両方同時に使えるものというのが、私にとっては非常に愉快なのです。

尚、今回の製作は、実用的にのみ片寄ってしまったのですが、腿の裾口にレースをつけたり、腰まわりや腿のゴムを調節式にしたりすれば、更に面白いものになっただろうに……と悔んだり、次の試作プランにふけったりして楽しんでいます。

△倉に成人氏へ▽十月五日御送稿の「馬化狂随筆」に依りますと既に六回分の写真を送付済の由ですが、当方には八月号に掲載した四葉以外は届いております。

創作

老画家の手紙

榎 本 秀 彦

八月中旬の蒸し暑い夜だった。寝苦しい一刻をすごして、いつか夢路にたどりついた英子は、圧迫されるような胸苦しさに折角はいった眠りを破られた。うつともつかず目を開いた瞬間、どきっとして、思わず叫び声を立てようとしたがその時はもう遅かった。

「泥棒！」と叫ぼうとしたが、それも声にならぬうち、大きな手で口を押えられてしまった。

「おい、はやく電灯をつけろ！」

口を押えていた男は素早く英子の身体の上に蒲団の上から馬乗りになり、膝で彼女の手を動かぬように押えてしまった。やがて賊の

手で点じられた灯の光で英子は、初めて二人の男の姿を見た。英子の上に馬乗りになっている男は三十五六だろうか、小肥りのがっちりした男で、ハンチングを被り、半袖の開襟シャツに鼠色のズボンをはいていた。いま一人は青味がかった派手なズボンに同じく開襟シャツの二十二三才の男。

「泥棒じゃねえよ。静かにしな、命にや別状ねえから。うちの先生がね、お前さんを暫くモデルに借りたいっていうので連れに来ただけさ。でもな、騒ぐと一寸ばかり痛い思いをしなけりやならんよ」

小肥りの男はこう静かに云いながら、慣れ

た手つきで、予定の行動のように、ポケットから手拭のような布を取出すと英子の口の中に押し込み、いま一本の手拭で、その上からぎゅっと強く猿轡をしてしまった。

英子は声も立てられないので、枕から頭をはずし、のけぞるようにして、男の圧迫から逃れようと抵抗したが、手も胴も締めつけられていてどうしても動けない。

「おい勝、手と足を仕末したいから手伝ってくれ」

「はいきた」

青ズボンの男は英子の枕元へ来ると、蒲団の下でもがいている彼女の手をとらえた。

「いま蒲団を剥ぐからな、いいか？」

英子は逃れるなら今だと思った、男が馬乗りから下りて蒲団を剥いだ時、思いきり足で男の胴を蹴った。男は不意打を食って横倒れに腰をついてしまった、英子は急いで身体をよじって、手を振り切ろうとしたが、ぐっと逆にねじあげられてしまい、「うふっ」とうめいたまま、こんどはうつ伏せに押えつけられてしまった。

「駄目々々、そうは問屋がおろさねえ。でも女にしては中々力があるな」

逃れようとして蹴ったことが、かえって逆効果になってしまい、小肥りの男はにやにやと気味悪い笑いで口元をゆがめながら、英子の乱れた足元に視線をやった。

「おとなしくしろといったのに分らねえな。おい勝、こうなりや遠慮いらねえ、ぎゅっと強く、縛りあげろ。おっと待った、このまま縛ったんじや面白くねえ、少々時間をかけてやろうかな」

「そうだよ兄貴、一つゆっくりやりましょうよ」

「よかろう、ひんむいて縛ってやれ」

二人の男に押えられてはどうにもならず、やがて帯を解かれ浴衣をぬがされパンティ一

つにされてしまった。

男たちは彼女の暴れる足を、用意して来た麻縄でぐるぐる巻きに縛りながら

「さすがバレリーナーだ。均斉のとれた肢体すっきりした脚の線、円味を帯びた腰、隆起したすばらしい豊胸、柔かい頸から肩へのなだらかな流れ、訴えるような瞳……」

「兄貴、大分先生の影響を受けて科白がうまくなったなあ。しかし大した代物だ、これじや、先生も大喜びでしょう」

英子はもう抵抗するのを止めて、じっと眼をつむった。それでもなくても仰向けに寝かされているので、後手に縛られた手首の縄目が



食いこんでしびれるように痛んだ。恐怖と羞恥と混乱のため頭がぐらぐらして、自失とも何ともいい、ようのない、茫然たる気持ちに襲われた。

英子が観念したのを見て、男達は煙草に火をつけた。青ズボンの男は疲れたのか、少し離れた窓際へ寄ってごろり横になって、吐き出すように煙草を吹かしている。小肥りの男は上気したような熱っぽい顔をして、英子の傍を離れようとしなかった。

英子には男の視線が電流のように感じられて胸を波立たせ、身をもがき続けたが少しでも動こうとすると縄が余計食込んで痛んだ。

「兄貴、あんまりゆっくりしていると、先生に叱られますぜ」

「うん、もう十二時過ぎたか、じゃ、そろそろ出かけよう。女中の方は大丈夫かい」

「大丈夫ですよ。僕の得意の高手小手というやつで縛り上げ、猿轡も絶対外れないというコツを知ってるから、今頃、押入れの中でおとなしくしててでしょう」

小肥りの男は残念そうな表情で内ポケットから小さな薬瓶を出し、彼女の猿轡の鼻孔に近いところへ一二滴垂らした。英子は咄嗟に麻酔薬だと思ったが、どうにも息をせぬわけ

にはいかず、出来るだけ我が身に痛みを与えて眠らぬようにしようとしたが、何時の間にかだんだん意識がもうろうとして来て、そのうちぶらんこに揺られているような気持ちになったかと思うと、ぐんぐん暗黒の世界に引き込まれるように意識を失ってしまった。

失神した英子にとっては随分長い時間のようない気がした、又、何処へどうして連れ出されたのか知らない。酒に酔っているような気分からだんだん意識が回復され、瞼のあたりが明るくなったので、物憂い重たい瞼をそっと開いた時は、或る画室風の建物の一室だった。画室といってもバンガロー式の山小屋みたいな設計で、その部屋の隅にあるベッドの上だった。寝巻はいつか、海水着に替えられていた。英子は悪夢から醒めたように跳ね起きようとしたが、両手と両足がベッドにくくりつけられてあるので、どうにもならなかった。

やがて西口のドアがぎいっと軋んで開くと、もう六十を越したろう、面長の背の高い男が入って来た。年令の割に豊かな頭髪をばさばさにかきあげ、太い縁の眼鏡の奥に鋭い眼光が、ちらっと英子の方を見ると、そのまま無関心のように部屋の東隅にあるキャンバ

スの前に腰を下した。絵具のついた上衣や無雑作の仕草のなかに、一見したところはやはり画家らしい風貌もうかがえた。

暫くすると、同じ入口のドアの外にがたがたと乱れた二三人の足音がしたかと思うとさっとドアが開き、先刻英子を襲った小肥りの男と青ズボンの男が、芸者風の粋な浴衣を着た若い女の両手を抱きこむように押えながら、嫌がるのを無理に引きずって連れて来た。女はすでに猿轡をはめられていたが、抵抗したらしく髪の毛や浴衣がかなり乱れていた。

「先生、この女は中々強情なんです。わたしは着衣のモデルだから承諾したんで、ヌードなんか嫌だって云うです。一寸の間だ、三十分位だと云っても、どうしても云うことを聞かないです」

「そうか、いや言うことを聞かない方がスリルがあっているよ。金で雇えるモデルなんかいくらも居るんだ、そんなのに興味はないよ。真剣に抵抗する女の肌の苦悶の表情。そこには不思議な、哀愁と歓喜と憧憬の美があるのだ。わしは人間の心の奥に眠っている、この赤裸々な、野性と魔性を徹底的に剔抉して絵にしてみたいのだ。かって西欧の絵画に

もこうした試みはなされた。しかし、そこにはどこかしらに宗教とか、道德とかの煙幕が張られ、逃げ道が用意されている。道德的であるということより我々人間にとっては不道德であるということの方がより困難なのだ。逆説めいているが――」

老画家はやや昂奮した面持で語った。或は男達に対していうより、英子に聞かせるためであったかも知れない。

「先生、まあ難かしい理屈は分りませんが、いい女を虐めるのは悪い気持ちじゃありませんな。何とか英語でサディズムとか云うんですってね。僕も小学校の時、六年生の女生徒に可愛い娘がいましたね。近所の踊りのお師匠さんの娘でしたよ。僕より一つ年上、よく遊びに行つて、二階でいじめっこをし、その娘を帯で縛ったもんです。そうしたら、その子たったら、もっときつく縛つてよと甘えるように云いましたネ」

青ズボンの男は思い出をなつかしむように云った。

「勝公、なかなかしやれたことがあったんだね。じゃ先生、この女、いつもの順序で責めましようか？」

老画家は無表情のまま頷いた。

アトリエといつても、よく見ると普通のアトリエとは全然趣好の変つてゐるものだった。北側に舞台のような装置がしてあり、テーブルや椅子の家財道具の外に、二間ばかりの広さに芝居の舞台のように笹簀があり、庭石や松の木が装置されてあつた。そして何より奇異の感に打たれるのは、部屋中あちこちに置いてある種々様々な責め道具だった。壁のあちこちに額や写真が飾つてあつたが、いずれも女の責められてゐる写真や絵ばかりだった。松の幹に腰巻一枚のまま縛られて、雪責めにあつてゐる女、がんにがらめに縛られて庭石の側へ投げ出されてゐる裸婦。高手小手に縛られ天井から逆さ吊りにされてゐる女。これらは何れも日本画風の線と色彩で描かれていた。洋画風のものとしてはベッドに仰向けに縛られ、胸の辺りに三匹の蛇が赤い舌を出しながら這いまわつてゐる図で、バックの強烈な色彩と裸女の美しさ、白さや苦悶の表情が鬼氣を帯びて見る者の眼に迫る。この他、野外で撮影したらしい責めの写真が二三枚あつた。

老画家が頷くと、二人の男はその連れてきた女を北側の舞台の中央に引張つて行くと自然の松を擬した中央の太い柱に坐らせて縛

ろうとしたが抵抗して坐らぬので、立つたまゝ後手に柱に縛り、二人で足を一本ずつ持つて前へ引張るようになると、上半身が徐々に下へずれて来て自然に足を投げ出して尻をつくようになる。上半身が下にずれるとき腕や背が松の柱にすれて痛むので、女は思わず苦痛の呻き声を立てるのだった。

「強情を張るから痛い思いをするんだ。さあこれから本筋だ、大いにわめくがいい」

小肥りの男はこういうながら青ズボンと共に部屋を出て行つた。やがてどこかでひゅつと口笛が鳴つた。すると、部屋の外にでも待機してゐたのだろうか、一匹の犬が勢い込んで走り込み、松の柱に縛られてゐる女に向つて襲いかかった。犬はすでに訓練してあると見えて、女の浴衣の袖口をくわえろとばかりりと食い破つてしまった。袖を食い破ると、今度は襟元をくわえ、ぐいぐいと引張つて、胸をはだけ、上半身の着物をすっかり剥ぎとつてしまった。いよいよ着物の裾をくわえようとしたので、女は足をばたばたして追おうとしたが、そんなことは馴れたもの、犬は巧みに身をおろしながら裾をくわえ、帯をくわえ、とうとうすっかり剥いでしまった。残るのはズロース一枚。正に人間より巧みな業

だ。そして得意然として噛み裂いた着物の一片をくわえたまま老画家の足元へやって来て、尾を振っている。この間老画家は一言も発せず、じっと女の表情を見つめていた。

英子はベッドの上で見まいとしても見ざるを得なかったこの瞬間の出来事に愕然とした。それはもう恐怖などを通り越した妖奇の世界だった。やがて自分もこんな目に逢うのではないかと思しながらも、一方、妙に落着いた気持で眺められたのは自分でも不思議な位だった。

女は、急に恐怖から羞恥の表情に変わり、出来るだけ身体をすくめて、老画家の視線から逃れようとした。

老画家は腕を組んだまま、身動きもせず、じっと女の身体の動き、表情の変化を凝視していたが、どうも不満足らしく、失望したように舞台から眼を離し傍の犬の頭をなぜながらなにか



考えに沈んでいた。

間もなく良いアイデアでも思いついたのであろうか、元気よく立上ると、チェツチェツと舌打した。するとその合図で犬は先程入ってきた入口からドアを押して、さっさと出て行ってしまった。

犬から破れた布片を受取った老画家はすかずかと女の傍へ近づき、半メートルばかり離れた位置にそれを置いた。そして又元に戻って来て舞台を見直した恐らく凄惨の雰囲気を出すための構図を考えたのだろう。彼としては恐らく着物などもこの場合破れ残りが肌についている方がよかったのかも知れない。いや、それ以上に、彼は悶えのたうちまわる被虐の女の苦痛と陶醉がかもし出すあの不思議な妖美の世界を求めていたのに相違ない。単なる恐怖や残酷や淫猥であってはならない。あくまでも根底をなすものは美だ。美学

のない嗜虐は変質者だ。——どうやらこれが彼の持論ではあるが、少くとも彼が女たちにモデルとして以上に、はずかしめたことがないということは事実だった。それどころか彼の求めたモデルに対しては十分な謝礼すら出していたのだった。しかし彼は、職業モデルや自分から志望して来る女には全然興味がなく、誘拐とか拉致とかによる手段によってモデルを求めた。これは彼の持論からしても当然のことで、悦虐の世界に悪魔的美を追求する彼としては、異常の中の緊迫と陶醉だけが情熱の源泉だった。

さてここで、彼、すなわち老画家の素性について少し詳細に述べねばならぬだろう。実は彼は老画家でもなんでもなく、一見画家らしく見せかけているだけであって、絵具に汚れたブラウスやキャンバスは単なるカムフラージュに過ぎない。アトリエの設計や道具にしても、画家の眼から見れば恐らく奇異の感に打たれるであろう。

x

x

彼はもともと富裕な家庭に育った一人の善良なサラリーマンだった。彼の父は財界でも一寸名の知れた実業家で、二三の会社のほか鉱山も持っていた。彼は大学を出ると父の会

社に勤め、何の苦勞もなく出世街道を歩んだ。やがて傍系会社の総務部長の娘であるK子と結婚した。そしてK子の美貌と共に、はた眼も羨しい新婚生活は、友人たちや同僚たちの羨望と評判の的だった。

結婚後三年経ってもまだ子供のなかった彼等は、よく旅行や登山に出かけた。彼は学生時代に山岳部にいたし、K子もテニスをやっていたりしたので、冬のスキー行なども毎年缺かしたことがなかった。そしてK子の近代的な明るい容姿はどこでも人目を引いた。

其の時の旅行は、冬にしか来たことのない信州の温泉を選んだ。それも遊客のあまり行かない素朴な山の湯宿を探して廻る計画だった。四日目に着いたこの湯宿は、客は彼らの外に二三組居るだけで、南北を山々に包まれた溪谷の中腹の静かな山間にあった。

その日は少し風があるけれど、空は日本晴で、澄んだ空気に青葉は目覚めるような鮮やかな色彩で山を埋めていた。

「あの真中の高い山、N岳かしら……？」

K子は坂を曲った所で、彼の方を振り向いて尋ねた。彼らは晩い朝食を済ませると浴衣のまま裏山に登ったのだった。余り人の通りそうもない細い道で日蔭側は露で足が濡れた。

三十分ばかり歩いた岩かげの草むらで彼らは腰を下した。二人は寄りそうようにして、宿から持ってきたサイダーを半分ずつラッパ飲み干した。

あたりは時々チツチツと小鳥の音がするだけで静寂そのだった。彼はK子の肩へ手をまわすと抱きこむようにして接吻した。二人は恋人同志のようにはしゃいでみたくなった。

「もう一度キッス！」

いつもなら、なんでもないとK子は今日は甘えるような眼で、

「いや！」

と、両手で彼を押し返した。彼も冗談半分に云った。

「いやなら、無理にでもするよ。縛ってしまうがいいかい？」

「いいわよ。縛れたら、縛ったって……」

「よし、君の浴衣の帯紐を解いて、縛ってやるから」

「駄目よ！ これは、駄目、駄目！」

「駄目もくそもないよ、さあ縛るぞ！」

彼は解かせまいと押える帯紐をとうとう解いてしまい、K子の両手を後ろへ廻して縛ってしまった。

「どうだ降参したか？」

「降参なんかしないわ!」

「よし、そんなら着物も脱がしちゃうぞ!」

彼はこういつて浴衣を肩からはずし、双肌脱ぎにさせてしまった。

すると嵐のように今迄に感じたことのない不思議な気持が二人を襲ったK子は胸を激しく波打たせていた。

「寒くない?」

と彼がはだけた浴衣をかけてやろうとする
と、彼女はわずかに首を振って、そのまま仰向けに寝転んだ。彼の前には露わに盛上った豊胸が明るい五月の陽を一杯にうけて、あたかも誇示しているかのように大きく息づいていた。

そんなK子が、彼は一層愛ほしくなると共に、今迄どこにひそんでいたのだろうか、新らしく発見されたこの女の野性と魔性の妖しい美しさに思わず茫然として見とれていた。

K子は後手に縛られた手が痛んできたのだろう足を縮めて、横向きに身体の位置を動かした。しかし彼女の顔には何ら苦痛の表情はなく、むしろ満ち足りて何ものかを夢見ているかのように軽く眼を閉じていた。自然と時間は彼らのためにだけあった。

二人が起き上がった時、近くへ啼き移って来

た老鷲がぱつと飛立つ羽音が聞えた。

宿に帰る道すがら、彼はあたりの風景が一変しているように思えた。そして自然が人間とこんなに密着して感じられたのは初めてだった。

東京に帰ってから半年はまたたくうちに過ぎてしまった。信州の山での出来事があって以来、彼らの生活には別の世界が開拓され、彼は益々は深く激しくK子を愛するようになった。しかし運命は突如不幸をもたらした。その年の暮、K子は川崎の親戚へ行った帰りに自動車事故のため即死してしまったのだ。彼は狂人の如く嘆き悲しんだ。そして十年近くも再婚を拒否し通した。

いや、勧める人の熱心さに負けて、二度も妻を迎えるには迎えたが、何れも長続きせず離婚してしまった。それっきり紆余曲折の生活を経て独身で今日まで過して来たのだ。

× ×

さて、女の足元へ着物の切れ端を置いて戻って来た老画家(画家ではないが話の都合上今後もこう呼ぶことにしよう)は暫く女を凝視していたが、やっぱり駄目だと失望した面持で柱のベルを押した。すると又先程の男が

二人やって来た。

「どうです、気に入りませんでしたか?」

小肥りの男が尋ねた。

「駄目だ、今度は十番をやってみてくれ」

番号で責めの種類が定まっているらしく、「十番」と命令されると、男たちは部屋の隅に立てかけてあった大きな厚板を運んで来た。それを部屋の真中に据えると、舞台の柱に縛りつけてあった女を降し、暴れるのを無理矢理に厚板の上へ押えつけて、両手は組んで頭の上の方へ縛りつけ、両足は開いて板の隅へそれぞれ備えつけてある縄で縛りつけた。縛りおわると青ズボンの男はコンデンスミルクの缶をあけ、刷毛で女の肌へくまなくこれを塗りつけた。

準備が終って、二人の男が部屋を出て行くや否や、又ひゅうと気味悪い口笛が鳴って、今度は先刻の犬でなく白毛の美しい狎が走って来た。そして、女を見ると、くんくん鼻をならして、これも馴れたもので、足裏の方から女の肌に塗られたミルクを舐め始めた。くすぐったい。堪らなくくすぐったい。女は自由の利かぬ体をくねらせたり、のけぞったりしてもがいている。

老画家は女の蠢めき、顔の表情の変化の一



つやも見逃すまいと凝視していたが、やがてまた失望したように、眼をそらせるとベルを押して男たちを呼んだ。

「この女、帰してくれ。風呂へ入れて、モデル料を忘れぬようにな」

不気嫌にこう云い捨てる英子の方をちらりと鋭く見た。英子は、眼を避けることの出来なかった有様。いや、これは予定した彼の計画であつたかも知れないが初めて見せつけられたこの妖奇な被虐図絵に、自分が責められていたかのようにぐったり疲れてしまった。

「へえ、先生、でもこの次はお氣に入り保証しますよ。ぴちぴちした八頭身というやつでしてね、バレリーナだそうですよ。早速検分に及びますか？ でも兄貴が来てからにしましょ

う。先走ったことをしっちゃあ、怒られちゃいますからね」

青ズボンに老画家の顔色をうかがいながら云った。やがて小肥りの男が鉄を持って英子の縛られているベッドへやって来た。

英子は鉄を見ると、いよいよ自分が責められる番が来たのだと察して、さっと顔色が変わった。

「心配御無用、これは海水着をこうして切るだけなんでね」

こういいながら、掛けてあつた湯上りタオルをはぐと、英子の着ている海水着を肩の方から、ばりばり切って引剥いでいった。彼女は何か逃れたいと必死になったが、動けば動くだけ手足の縄目が痛むだけだった。ヴィナスの彫像のように美しく彼の前に横たわっている彼女に、老画家ははじめて喜びの色を見せた。

「すばらしい！」

彼は心の中で快哉を叫んだ。彼は蘇生したように急に元氣ずいて、

「外へ連れていけ、芝生のある花壇の下の所へな。余り手荒にしてはいかんぞ。いいか！縄は後手に、足も縛って芝生の上へ転がしておけばいい」

外は昼のように明るい月夜だった。庭の木立の間に三坪程の池があり、その周囲は芝生になって居り、池の端や芝生のまわりには色々な草花が咲き競って、美しい花壇をなしていた。

英子は池に近い所へ横倒しに置いて行かれた。さすが夜も更けていたので外は涼しかった。はじめは芝がちくちく肌に刺さるようでも不快だったが、それにも慣れると、夜露がひやりとほてった肌にかえって心地よくしみこんで来て、周囲の甘い花の匂いと共に彼女を妖しい陶醉へ誘った。

英子はすでに何をされるかという不安よりも、こうして縛られたまま、草の上へ寝かされて自分の体の奥に異様な悦びを感じて来ているのに驚いた。

人影が見えたので、英子は急いで反対側に寝返り、足をすくめて、うずくまっていた。

老画家は英子の傍へ腰を下すと煙草に火をつけ、懐しそうに彼女の姿を眺めていた。

月光の下に息ずいている白い女体。彼はやや上気した面持で、いつまでもいつまでも飽きることなく眺めていた。何か遠い思い出でも楽しんでいるかのように。

どの位経ったであろう。何もされず、沈黙

と静寂の連続だけに、英子は余計圧迫を感じ随分長い時間に思われた。と、突然老画家は彼女の肩へ手をかけると、グイグイ老人とは思えぬ力で強く握り上げ始めた。

英子は苦しく、のけぞるようにしてもがいた。しかし、老画家は力をゆるめようとするどころか、はっはっと思をはずませながら却って強く締め上げるようにするのだ。英子は本能的に最後の力をこめて逃れようとしたがどうしたことか、もっと強く、いつまでもしめつけられていたような衝動にかられる一面のあるのに気付いた。

やがて老画家は捻り上げていた手をゆるめ彼女を抱き起すと足の縛しめを解き、猿轡もはずした。

「すみませんでしたね。痛かったですか？ゆるして下さい」

彼は英子の縛られた姿の中に、若い頃、信州の温泉宿の裏山でのK子の面影を見出していたのだった。彼は長い間探していた恋人にでも逢った時のように喜んだ。しかし、その喜びはやがて悔恨と悲しみに変った。自分の生涯にこのような道をたどらせたK子とのあの日の出来事。老画家の頬にはいくすじかの涙が光った。

英子は縛しめを解かれると急に自分の裸形が羞かしくなると、夜気がぞく々と冷たく感じた。

「寒い」

思わずつぶやくのを聞いて、老画家は早速自分の上着を脱ぐと、急いで彼女の肩にかけ自分の娘でも連れて行くように優しくいたわりながら部屋へ戻った。

× ×

英子が目隠しをされたまま、自動車を降ろされ、G街道の崖際の雑木林に連れて行かれたのは、もう東の空が薄明るくなっている時刻だった。

「先生は一体どうしたってんだろなあ。この女に会ってから、すっかり態度が変わってしまったよ」

「そうですね。今までこんなに親切にされた女はなかったですね。あのむつつり屋の先生が馬鹿にはしやいでいるんだもの、どうも分らんですよ」

「女はやっぱり魔物かな？あはは……」

男たちはこんなことを話しながら、英子を櫓の木かげの草叢へしやがませた。

「お嬢さん！ 多分お嬢さんだと思うが、どうも御苦労さんだったナ。只、最後にこれだ

けは守ってくんな。第一に自動車の音が聞えなくなるまで目隠しをとらぬこと、第二に声を立てたり、後から警察へなど届けぬこと。これだけを絶対に守ってくれぬと、命は保証せんからな。勝手口が開いてるはずだから、静かに帰んなよ。ではさようなら」

「女中さんにもよろしくね」

「余計なこといな」

二人の男はこんなことを云いのこして去った。やがて自動車の音も聞えなくなったので英子は目隠しをとって、あたりを見廻した。かなり長く自動車に乗せられたようだったがどこをどう通ったのか、目隠しをされていたので全然分らなかった。

着物は、連れ出される時に着ていた浴衣だった。ふと気がつく懐に何か入っているようなので手をやると、部厚い封書が一通出て来た。封書の表には走り書きで「是非読んで下さい」と書いてあった。

○

「先刻は色々失礼しました。私が三十年来求めてきたもの。それがなんであるか、自分でも分かりませんでした。今夜、あなたにお逢いしたおかげで、それが何であったか、はっきり悟ることが出来ました。かつて私が若

い頃、信州の山中で偶然の成り行きで縛った妻があなたの中に居たのです。私は再びあなたにお目にかかることはなく、間もなく私の人生は終るでしょう。失礼をくれぐれもお詫びいたしますと共に、あなたの御幸福を祈ります。同封のお金はお小遣いにはご不自由はないでしょうが、なにかにお使い下さい。さようなら。

無名氏

○

なお、余白には『若き日のノートより』として次の様な詩が書きつけてあった。

「きみゆえにすべてはたのしみ
きみゆえにすべてはかなしみ
きみゆえにすべてはむなし」

文字は走り書きだが達筆だった。そして中に、新しい一万円札が二枚入っていた。

英子は人目につかぬように、急いで家へ戻り、教えられた勝手口から、女中部屋へ行くと、押入れを開けると、女中は驚いたような顔をして救いを求めた。

英子は急いで彼女の猿轡や縛しめを解いてやると、昨夜の出来事は、口外すると命が危いから、父にも誰にも、絶対話してはならぬことを、よく云いふくめて、自分の部屋へ戻った。

部屋は別に異状なく、ただ蒲団だけが、掛蒲団がはがれたまま、昨夜の通り敷き放しになっていた。英子は蒲団の上にごろりと横になると、急に身体のおちこちが痛んできた。今迄気が張っていたので、気がつかなかったが、手首や足のつけ根が、縄目の跡で赤くなっており、縄ずれで、少し血のにじんでいるところもあった。

やがて疲労と不眠のため、うとうととしてたかと思ったら、置時計はもう九時を廻っていた。

どこか洋装店の新築売出しらしく、宣伝カ―のスピーカーが、かん高い声を、とぎれとぎれ伝えてくる。

英子は疲れきって、やたらに眠い、もうろうとした意識の中で、悪夢のような昨夜の出来事や老画家からの手紙を思い起しながら、あの老人は近く自殺でもするのではないかしらという予感がした。勿論これはあくまで予感にすぎないのだが、こうした予感と感傷の中で、彼女は老人の行為を憎悪することよりも、むしろこの中で別な想念の波間に浮漂している自分を発見したのだった。

(おわり)



〔体験告白〕

旅まわり女形の思い出

仮装の一夜

阪東秀美

それは終戦の二年ほど前の夏のことでした。或る村芝居の興行で、演しものの都合でわたしの出番が割合に早く済みましたので、其の夜の世話役に当たっていた青年団のTさんの誘いに興味をそそられ、盆踊りを見に行く話がまとまりました。師匠の御許しが出ましたので先乗りの菊さんと一緒に、近村にある温泉場附近での夏まつり気分を楽しみに連れて行って戴いたのです。

重苦しい舞台衣装を脱ぎ捨てて、男としての浴衣に着かえ、心も軽く出掛けた訳ですが同行の菊さんは仲々の酒好きなので、わたしとは又違った意味でこの納涼を楽しみに期待

していた様子でした。温泉場には旅館が一軒と、あとは自炊客本位の建物が大きく附属した、いかにも山里にひそむ農家の人たちにびったりした雰囲気がある処でした。すぐ近くに小学校があつて、その校庭が盆踊りの会場だとかで夜目にも賑やかなレコード音楽に踊りまわっている沢山の村人が見えます。電球提灯が二〇個ほど吊られた薄明るいその光景は、本当に旅まわりをしているわたしには懐かしい気持で見える田園詩で御座いました。

さて、わたしを誘って下さったTさんの親類の家は、その広場にほど近い地点に御座いますので、夜の事でもあり踊りのざわめきやレコードの音もはっきりと聞えて参ります。酒席での珍客となつたわたしたちは、充分に総出のもてなしを戴きました。菊さんなんかは白い乳のような手造りの酒にもうホロホロして、仲々面白く話がはずみます。やがて話が今夜の仮装くらべの事に移りました。聞いて見ると何処の村にもよくある仮装者の人気投票で、一等は、当時としては貴重品としての清酒が二升、それに僅かながら副賞としての金一封も出ると言うことでした。仮装とは言つても祝いの酒の一杯気嫌にのつた村民の扮するものは大抵が女の姿。そして男に對抗して女の方は逆に、つとめて男の扮装に身をや

つす程度のものさ……と、Tさんの親類の老人が笑うのです。若い時は村芝居の女形もやったもんだ……と言う老人の目から見ると、矢張り何かもの足りない気持ちなんでしょうかしら。ここに限らず、どうゆう訳か扮装、

仮装となると男の方は不思議と女装をして見たがるのが普通らしいです。この現象について私は私なりに公やけに性の倒錯を味わえる年に一、二度のこんな行事へその欲求が一度に集まるものなのか、と考えたりしています。そして逆に、女の方にもそういう傾向が充分あるのじゃあないでしょうかしら。

でも、わたしは他人の事は言えません。わたしはその傾向の特に激しかった一人なのですものネ。

さて、その内に老人が菊さんに向かって言い出しました。

「どうだね、あんた達は此の土地の人とは余り顔見知りがないんだし、本職の役者さんとは誰も気がつくまい。面白ろ半分に仮装して並んで見ないか。しばらく品評会（失礼しちゃうわね）みたいに品定めがあつてそれで決まるんだよ。若しうまく行けば清酒二升にもなる事だ。駄目ってことはあるまいが、旅の恥はかきずて……ってネ……ハハハ……」

出場者の所属をTの村から飛び入りにした事にすりゃあいいと言うのですが、清酒二本の魅力に菊さんは、もうすっかり乗り気になったらしいんです。

考えて見ると初対面の私達をこんなにもてなしてくれた老人と、酒好きの菊さんの為めにも、せめてお礼やらお祝いの気分で見える事は、そんなに嫌な気分でも御座いませんでしたし、うまく行けば貴重な清酒を手に入れることが出来る……と、わたしも妙に気が動きました。

「菊さん、座に帰っても内証にする？」と念を押してわたしも心が決まりました。さて、化粧品ですが丁度三ヶ月ほど前にお嫁に行つたTさんの従姉の化粧道具があるとの事で、早速見せて戴きました。舞台用とは少し勝手は違ふけれど、練白粉も充分残ってますし、大きな姿見の中には、里帰りの時にすぐ使える位のものが一通り置いてありましたから先ずそれを拝借することにしました。夏場のことで特に衣装に心配はいりません。蔵^{しま}ってあった女ものの浴衣と腰紐二、三本に夏帯が一本、そして団扇と赤い鼻緒の黒のぬり下駄一足で大体は揃いました。困ったのはヅラがありません。でも盆踊りの夜のことでもあるの

で、折編笠を借用し菊さんに鏡台の中にあつた「カモジ」の長い毛を適当にとめて貰つて間に合すことにしました。これはさすがに心得えた菊さんが、それらしく上手にとめて呉れました。

練白粉で顔から襟へ、背へ深くトツプリと真白く塗り広げ、あまり広くはしませんがそれでも万一を考えての粧りなので、大体上半身が白い人形のようになり、いつもの事ながらわたしは段々まわりの目を忘れて女になり切つてゆくのでした。鼻筋を通し、頬紅を更に耳のわきまでばかし、茶墨でクッキリと目隈を入れ、やがて、濃い口紅で形よく唇を劃く……こうした事は商売柄で手慣れてもおりますから、もう鏡の中のわたしはさつき迄の男とは信じられぬ位に濃艶な美女になってしまつております。老人夫婦もTさんも只々驚きの声をもらすだけ。それにわたし自身ももう男の気持ち全然もっていませんので、どうしても振舞いも女に見えてくるらしいのですが、きつとそれは男なのか女なのか不思議な一刻で御座いましたでしょう。

紅緒の黒下駄、もちろん素足のもので膝から下も念入りに塗りました。浴衣の襟もグツと仇っぽくぬき、間に合わせにタオルを



長くたたんで胸もとへ入れます。菊さんの作
っておいてくれたツラ付きの編笠を冠って緒
を締めた時から、老人やTさんの目には、
わたしはもう完全に男ではなくなっていたで
しょう。わたしもここまで粧った上は、もう
どんなことがあっても女そのものになり切っ
て見る気持ちに酔っていたんですもの。

「こりゃどう見ても売れっ子芸者じゃの……」
と老人は何度も言うし、Tさんはもうさっ
き迄のように気軽くわたしの顔を見ないで、
もじもじしているんです。

「それじゃあTさん、おねがいね」
と呼びかけますと、Tさんはすっかり照れ
てしまいピクツと頭を下げます。
老人は「氣をつけてなあ、姐さんや」と言
いました。途端にわたしは何となくこの老夫
婦が実の親のように思えるほど、しみじみと
した女の気持ちを、感じ幸福に思いました。こ
んな雰囲気はわたしにとっても一度もない体
験でしたが、きつと旅まわりに慣れて、家庭
的なものに知らず知らずに慣れていたんでし
ょうね。

Tさんと一緒に会場に行き、出場者の列の
一番最後に並んで立っていました
たが、何気なく皆さんの仮装を
見まわしてハッとしました。扮
装は見慣れている筈のわたしが
ドキツとする程に、際立って美
しい濃い化粧の女形さんが列の
中途あたりにいるので御座いま
す。女形さんと申しましたのは
商売柄いかに上手に女装してい
らしてもわたしの目には男で
ある事はすぐ判かるのですが、
その人はそれこそ本物になれる

位いに立居振舞いが優しく、女らしさが見え
るのです。そして薄暗いのでよくは見えませ
んが化粧振りも充分な慣れが出ていて、全く
惚れ惚れする程の出来栄なんです。きつと
わたしのよう、いやわたしよりももっと強
い、不思議な病氣？に取りつかれている人
なのだろうと思われました。年に一度二度の
女装が楽しみだと言うのではなく、恐らく毎
日が女の世界にある種類の方ではないだろう
か。……わたしは直感的にそう感じとりまし
た。今夜のコンクールに強敵を発見した喜び
と、一寸の不安に珍らしく胸がドキドキする
のを覚えました。これでは他の人たちは、氣
の毒ながら迎もよい成績は取れないな……と
吾れにかえって苦笑しました。ツト菊さんが
寄って来て丁度わたしの感じたのと同じこと
を囁やきました。誰が見たってあれならば注
目されましょう。

氣がつくとわたしのまわりにいつの間にか
村の人たちが寄って来ていて何か指ささんば
かりに話合っています。土地では見慣れぬ仇
っぱいのが参加してゐるんだもの、そりゃあ当
り前の事よ……と自分で氣を落ち着けつつ遠
慮深く歩を進め、ニッコリと笑いかけてやり
ますと、番号札を持って来た世話方の若い衆

は、耳まで赤くなり仲々に寄って来ません。気をきかせて菊さんが受取って呉れました。酒を一升か二升も稼ごうと菊さんも一生懸命なのでしょう。番号は三十二番だったと覚えておりますが……胸のあたりに番号札を吊るして、審査係が歩きまわっている中を列のままで大きい輪をつくって続きます。その間に点数がきまるのでしょうか。でも田舎の人は珍らしがりやでいつのまにかわたしの横へ審査員の腕章をつけたのが三人も来ていて、し

きりと首をひねっては村の人たちと何か話合、時々、ドッと笑い声が湧くと審査の中年の方が首筋までそめて照れている様子なのです。わたしは自信がある上に、よい競争相手を見てるんですもの、めったに男と見破られる筈はありませんし、きっと地方弁でわたしと審査員を対象に変な話でも出ているのです。よう。舞台慣れのしたわたしには全く蚊が鳴くほどにも感じませんのに……それよりか逆に、もはや倒錯した気持ちに酔いしれて身体がほてって顔も上気してくる程なんです。この人混みの中で他国ものの参加を根にもって責めつけられたら……などと、久し振りに妖しい幻想を思い浮べさせました。

気がついて相手の女？の方を輪の反対側に

見ると、どうした事でしょう。その人がわたしの視線を待ってでもいたようにニツと唇をゆるめて、心もち頭をさげたように思われます。それにあれ位いの出来栄えなのに誰も彼女の側には付いて歩きません。何かあるな……と一寸不思議な気持ちになりました。

× × ×

結局、清酒二升はわたしのものになりました。審査員一同がわたしに最高の点を下さったらしく、村人も当然のような顔でわたしを見つめているのでした。あとで考えて思い出して見ると「あなたは飛び入りでしたね。どこの方かは存じませんが女の方が女の姿で参加された事も此のコンクールでは珍らしく（不思議な言葉ですわね）——その容姿も度をすぎた仇っぱさがなくて好感を持ちましたしあり合せの衣装でこのコンクールに不思議な精彩を加えられた点は今後の本行事へ大きな指標を示されたものと嬉しく思います。」と言ったような事だったと思うのですが、でもわたしは、とに角狙った賞品が予定通り手に入ったということよりあの女？の人の親しそうな笑顔の意味が気になって堪まりませんでしたので、上の空でした……。

でも、その疑問は次々に解けました。その

人は三等賞。名前は「カズオ」と言い、毎年きまってあの仮装で参加されるのだそうです。勿論第一回目の仮装大会では一等だったそうですが、いつも同じ仮装だけに次は二等、昨年は佳作賞、そして今年は逆にわたしを女として見た審査員の目が「カズオ」君の女装振りを際立させたものに扱い、三等に入賞したと言うような事だったのです。

わたしを女として見て……とは本当に嬉しい審査員の方々のお言葉。又、その何人かがわたしの濃化粧の惱ましさに照れたとは、ほんとに役者冥利につきる想いで御座居ました。とに角も長居は無用ですから、菊さんに酒を持って先きに帰って貰い、まだワイワイと取り巻く土地の青年団連中の声を白い背で受け流して、早速にTさんの親類へ戻りかけました。私を取り巻いた青年衆が何か野次るのですが、生憎くと方言でわたしには言葉の意味がよくわかりません。でも時々溜息まじりのフザ気声で、何か切ないような言い方をしてはドッと笑うのを見ると、やはりわたしをホントの仇っぱい芸者風の旅の女と受けとっているのでしょう。

背中にジツとりと長いカモジ毛を汗でねばらせつつ、又も女になり切った倒錯の陶醉が

湧くように感じられて来るのでした。夜目と
はいいいながら、至近距離の衆人注目の中で見
事に女になりおうせたという無上のよい気分
で、たった一人で歩くななていうことは、旅
まわり一座の日程に追われる慌ただしい身に
とっては、めったに味わえない心持で御座い
ます。

街灯（誘蛾灯だったかしら……）の淡くとも
る辺りまで来ましたが、不図誰かしらわたし
の後を追いかける人の気配を感じました。振
り返ると、美しい化粧を汗ばませたあの「カ
ゾオ」さんだったので大変びっくり致しまし
た。でも何となく胸がドキドキして嬉しくて
耐まらない気持はどうした事でしょう。

是非一度話しをして見たかったと心残りだ
ったのも、仲々忘れられない程に「カゾオ」
さんの女ぶりが堂にいった美しさだったから
かも知れません。

わたしが立止って振りかえるのを見て彼は
又あの不思議な可愛い、笑顔をしました。そ
れが、それこそ喰べてしまいたいほどに可愛
い、女なんです。それが汗でうるんだ息づか
いで急ぎ足にわたしの前へ来るといきなり、
「お姉さん」と呼ぶんです。多少うるたえな
がらも、習慣的にわたしも覚え「え、」と

笑いかえしました。

「お姉さんは舞台の方なんですね。いえ、誰
も言いませんけど、ひょっとしたら、あたし
と同じじゃないかと思ってましたので……」

さすがに此の人はわたしを見破ってしまし
た。不思議な事にわたしがあの列にいて直ぐ
感じたのと似たような直感を「カゾオ」君も
受け取ったものようでした。でもすぐそう
です——と答えるのも少し変な気持ちでした
から、

「いえ、なんのお話しなのかしら……」とわ
ざと無邪気に、わたしの一番得意な小首をか
しげて相手の目を見る仕草をしました。

「ね、お願いです、あたしには
解るんです。若しそうだとし
てもお姉さんほどに出来れば他の
方には気がつかないと思います
けど、あたしは病氣なんですか
ら、お姉さんの事ならわかりま
す。ね、かくさないで……」

わたしの思った通りこの人は
普通の人ではなく、やはり性の
倒錯さえ起している一種の病氣
を持っていて、その倒錯的な本
能でわたしを見破った様子でし

た。わたしは覚悟をきめ、もうかくし事はし
ない気になりました。

「村では光子と言われて、あたしの病氣は
皆知ってます。もうどうしたって今更治りま
せんわ、これだけはもう死ぬまで……」

死ぬまで治りつこないほどの女装への魅力
と、そこまで行くと日頃の身辺に起こって来
る不思議な生活、そして妖しい昂奮に酔う一
瞬……そうした意味では勿論その頃のわたし
にとっても同じことです。只、わたしは舞台
人として常人に立ちかえる事も出来る、けい
めのある生活なので、健全と云えそうです。
「で、わたしに何かお話があるって？」ど



んな事なの」

「え、でもこゝじやあみんなが帰ってくる時に目立ちますから、ほら、すぐその小屋に……」指で教えるあたりを見ると、道端に六坪ほどの、農家が忙がしい時に使う器具を納まっておいたりするらしい小屋があるので、何れにしろ立話しでは困まるらしいし、わたしにとっても人目については又面倒でもあったし——で、総べてを任かせてコックリうなづきました。

二十帖ほどの裸電球が灯もされて納屋の中は薄明るくなりました。片隅に片づけられた農耕機が鋭い刃先きを見せ、脱穀器もあり、壁には二、三丁の鎌と鍬が揃えてかけられ、麻縄や藁縄が雑然と積まれています。

「光子さん、あなた、こゝを知ってるのね、あなたの親類の家なの？」

「いえ、全然関係はありません。あ、あの……お姉さん、あたし二年前にこゝで……」とそれから手短かに説明したのをまとめますと仮装で二等になった夜、面白半分の友達に腕力でこの納屋に引きづりこまれ、さんざんな目に合されたという一生忘れられない恐怖の場所だそうなのでした。

そう聞くと、わたしにも事情は違っても想

い出される事があるだけに、顔を伏せてしまった光子の襟足を見つゝ、わたしにはその氣持がよく分りました。

それからわたしは、光子に乞われるまゝに女への転身について、知っていることを出来るだけ囁んで含めるように話してやりました。光子はひたひたに小粒の汗をにじませ、美しい扮り顔を上気させて一生懸命にうなづき乍ら聞いているのです。そのひたむきな眼射には並々ならぬ熱心さ、否、執念が感じられます。

「光子、可愛い子ね。いいわ、本当の女の氣持の持ちようを教えたげる。サ、あっちを向いて……」

素直に任せきってわたしへ背をむけて坐るのを手近かな麻縄を引きよせてグツと前腕にかけにかけて、後ろへ引きまわすと、光子は流石にどうされるのかと驚いて振り向きまです。わたしは半分笑い、半分は此の可愛い子をいじめ殺してやりたい程の衝動にかられました。細い腕を後ろ手にして絞り立てますと光子は細い声で「あゝッ、痛い……」と身をもがきます。

わたしはぶったり叩いたりして責めるには場所もよくないしそろそろ時間も遅いので、

うんと縄目の痛さを味わせて一番手っ取り早い世界を見せる積りで御座いました。

「どう？　こたえるでしょう。これで自分の体をひきしぼられて痛みをこらえている内にいつかあなたの男のほうが出て来るわよ。こうされても、もう少し責めてほしい……と考えられる位になったら、本当のものになれるんじゃないかしら」

光子は縄目の痛みの中から何かを悟ったようでした。美しい濃化粧の頬に艶が出て来て紅の眼に涙をうかべていました。こうして一夜だけの、でも生涯手に入れる事も出来ぬ程に惚れ惚れする一人の妹が出来ました。

全く惜しいほどいゝ女ぶりの「カゾオ」君はあれ以来どうしているものでしょう。

Tさん、そしてその親類の老人夫婦、あの薄暗い校庭での一刻、温泉地の空氣の澄みきった涼しさ、それから妹のように可愛いかった「カゾオ」君、多くの想い出の中で平凡ながら役者とゆうものをしじみ味ったその日の事は、二十年近くも過ぎていて今日でもよい青春時代として只々懐しいばかりで御座います

(以上)

平家の馬場秘聞

桂 牧 次 郎

『おや、妙なことがあるものだな』

筒井新造は、朝のスープをすゝりながら、よみかけの新聞を下にみると、一人ごとのようにいった。

『あら、どうかなさいまして?』

妻の正子は、夫の方に視線をむけた。

『祖父江佐和子というのは、いつかお前が話してた同窓生の妹さんじゃないのか』

『ええ、そうよ、美和さんの妹さんですわ。それがどうかしましたの』

なんだそんなことか、というふうに正子は笑う。チラリと糸切歯がのぞいた。

『死んだよ。遭難死だ』

『えっ、遭難ですって……』

正子はびっくりして、食べるのをやめて夫のそばから新聞をとりあげた。

『S女子大山岳部パーティ(リーダー英文科四年東弘子(三)さん以下八名)が四国剣山山頂通称平家の馬場に野営中、祖父江佐和子(三)さんは、測候所にいくといったまゝ姿を消し、友人たち並に折から登山中のN大学パ

ーティの応援で、必死の搜索の結果、公達岳きんたちの西方三百米の美女平で死体となって発見された。検視の結果道に迷い墜落したものと判明した』(四国タイムス)

『あなた、これ本当でしょうか?』

『いくら地方紙でも、これ位の記事にウソは書かないだろう。一寸信じられないけど』

『ええ、とても信じられませんわ』

『信じられないということは、祖父江佐和子という女子大生が遭難して死んだということではないんだよ』

『と、おっしゃると……』

『その新聞記事なんだ。道に迷うにしてもおかしいね。平家の馬場と美女平とは十軒は離れているのだよ。夜道をかけて迷うにも程がある。しかもだ。尾根伝いに武者の丸に出て公達岳をこえて三百米も下なんだよ』

『そういえば変だわねえ』

正子は新造の例の推理ぐせがはじまったと思いつつも、今度だけはききながすわけにはいかないとみえて、次の言葉をまいった。

『そこで、思うんだがね。平家の馬場というのは、四国第二の標高一、九五五米の剣山々頂附近の、なだらかな草原なので、落人伝説でそういうのだがね。まあ、それで通るのだが、一説には、美女平こそ本当の平家の馬場だというのだ。もっとも、これはごく一部の人が知らないがね。つまり、女子大生たちが美女平の方で野営していたとしたら、まず、この記事は理屈にあうのだが……』

『何だか、やゝこしいのね』

『ところが、はっきり、測候所に行くといつて姿を消したとある。美女平から一寸でかけられるというものではない。すると、測候所のある剣山々頂附近に野営していたとしなければならぬ。死体発見が美女平。これはや

はり、おかしい。第一、武者の丸、公達岳のコースは、縦走コースになっていないばかりか、道もないのだよ。普通は、尾根伝いにジロギューから天狗岳、無明岳から国見峠へぬけるのが縦走コースだ。道に迷うたって、ひどすぎるねえ』

『すると、妹さんは、誰かに殺されたとしても？』

『殺された？ そんなに飛躍して物事を考えるては困るなあ。つまり、その妹さんは、何かの意志をもって行動したということ。それは、何らかの秘密にぞくするもので、友人にもしらせず、始めから、その秘密のために登山していたのではないかということだよ』

『何かの秘密？ 秘密ねえ……それじゃ、剣山の埋蔵金さがしかしら。それ、ソロモンの宝庫とか、宝剣をうめた宝蔵石とかいうような探検かしら……』

新造ははじめて笑った。

『お前も、中々あたまがいいね。記憶力のあるのはいいけど、欲ばりの話ばかりじゃ困るよ。ぼくの直感からすると、これは姉さんの秘密が関係しているね』

『えっ、姉さんって、美和さんの？、美和さんはお嫁にいつて、一年して亡くなったのよ、

もう二年になるわ。それが……』

驚いたのは正子である。しかし、新造はからかうようにいった。

『どこに、お嫁にいったのだい？』

『四国の、ええと、何とかいう、山奥の、さるお金持よ。ええ、何とかいったっけな、雲何とかいう村の旧家よ……』

突然アハハハと新造は笑いだした。そして、自分の推理の結論を決定的に吐きだすようにいった。

『もし、姉さんの嫁ぎ先が、雲取村^{アサ}字霧ヶ辻、国盛館^{ナカタ}でなかったら、ぼくはそんなに考えやしないよ』

『まあ、あなたはどうして、それを……そうだわ、霧ヶ辻よ。ロマンチックな名前よ。そう思いたしたわ、そして、クラシクな国盛館だったわ、いつかお友だちと、訪ねてみようなんて話したことあるわ……』

『そうか、やっぱり……』

『その国盛館^{ナカタ}と妹さんの死と何の結びつきがあるのでしょうか……』

『バカだなあ、美女平は雲取村だ。その美女平と溪谷をはさんでそびえる霧ヶ峯の中腹の部落が霧ヶ辻。そこに落人伝説の本山^{タイン}平国盛館があつて、美女平をまむかいに見下ろし

ているとしたらどうするね』

正子の顔はみるみる中に血の気がひいた。

『あなた、そ、それ、本当なの。それじゃ妹さんは、美和さんの……』

『そうだ。二年前の姉の死に疑惑をおぼえたんだな。ありうることだ。……しかし……』

新造はじっと考え込む風をした。それは正子に対して、云ってよいのか、どうしようかと思っている風でもあった。

『それでも、変だわ、美和さんの死に疑惑をもったとしても、何も、そんな山伝いにゆかなくても、いいでしょう』

『それはそうだが……』

『何故、正面から、妹ですってたずねていかないのでしょう。バスかなんかにのって』

『バスなんて、ないよ。バスの終点は五里も雲取川の川下だ。その間は釣橋や絶壁や滝をよじて通る山道だけだよ。妹さんは誰にもしられずに国盛館にいきたかったのだ』

『まあ、何故でしょう』

『恐らく、妹さんは、国文科だろう。そして、あの『国盛秘文伝』を、どこかで知ったのに、ちがいないのだ……』

『えっ、その、国盛秘文伝というのは何なのですか』

正子の眼は好奇の色に輝いてキラ／＼と光った。

その時、電話のベルが、けたたましくなった。S女子大の河北助教授から至急新造にきてほしいとのものであった。新造は正子をみて、

『どうやら、彼氏も気づいたらしいぞ』

と、意味ありげに笑うと、すぐに仕度にとりかった。

新造を送りだすと、正子は、茫然として、何も手につかぬ様子で、台所の椅子に腰掛けたまゝであった。何だかこの事件は不可解なまゝに発展していくような予感に襲われた。

二

河北助教授は、もう三本目の光に火をつけて、紫煙を部屋一ぱいにたゞよわせている。

『筒井君、どうも、理解に苦しむ点があるのだ。祖父江佐和子というのは、多くの研究室の学生だ。それに、今度の登山も、彼女が強いリーダーを説得して出かけたという。そして、この便りだ。この便りから考えると、彼女は自殺とも考えられるし、他殺ともいえるし、ともかく、死を予想しているのだから単なる事故死とは、思えないね……』

新造は、さっきから佐和子のはがきを丹念によんでいた。日付は四日前になっていて、剣山頂上に向う前日、太刀平という部落から出している。やはり、彼女たちは、普通の正面コースをとって登山しているのだ。

『先生、無断で欠席して申しわけありません。わたしはどうしても、剣山(〇)にのぼって見る必要があったのです。もし、わたしに万一のことがあったら、それはわたしの宿命として、お許し下さい』

短い文面であったが、何かをうったえているのは事実である。

『河北君、この剣山の文字の下に“〇”がつけてあるのは、何のいみだかわかるかね』
『いや、一向に分らぬのだ。大体、彼女とは、口もきいたことないのだよ。たゞ僕の講義に出ている学生というだけで……』

河北明のいいたいのは、だから、こんな意味ありげな便りをもらって、そして、その通り事故が発生してみると、迷惑至極といったのだろう。人間って、勝手なことばかり考えるものだ、新造はいやな気になった。

『河北君、よくには大体の意味がわかったよ、この“〇”のいみでわかったよ』
『わかったって、何の事だ』



『今の所、ぼくたちに分っているのは、新聞記事だけで、その矛盾は、さっき、君と話した通りだが、やはり、彼女は、美女平へ下りていったかったのだよ』

『だって、剣山へいきたいと、かいてあるではないか』

『うん、その剣山の下に？だ。つまり、第二の平家の馬場にいきたかったのだ。いや、これが本当の平家の馬場だけだな。この剣山の文字の代りに平家の馬場？としたらどうだ

ね。美女平が当然ふくまれてくるわけだよ』

『ふーむ、そうすると、どうなるのだ……』

河北明も思わず体をのりだした。

『君の専門は万葉集だから、くわしいことは御存知ないかも知れないが、平家物語に、平国盛がでてくるのを知ってるか』

『平国盛、うん、それは、平教経の別名であるとか、きいたように思うが……』

『それだけ知っとれば話は早い。大たいこの国盛は平家の中で謎の人物なのだ。この国盛

が壇の浦の敗戦後、安德帝を奉じて、一族と共に四国山脈の奥深くに逃れて、落人部落を作ったという。それが雲取部落だ。その一つ霧ヶ辻に今も残る国盛館の奇怪な伝説をきいたことはあるか』

『落人伝説は、大ていなら似たりよったりで知らぬこともないが、国盛館伝説というのは知らないね』

『今、くわしくその伝説を述べるひまはないが、

あの地方では信仰となり、生活様式となって生きているのだよ。つまり略奪婚なのだ。国盛館は代々、京都から美人を妻として迎えることになっているのだ。それ以外に部落によそ者は入れない。昔はみついたら、間者として殺したものだ。血族結婚の唯一の特権は国盛館の当主のみ除外されていたわけで、長男が十六才になると、姫迎えとして、若者たちが、はるばる花嫁を盗みに京まで出かけていたのだ。明治になって、さすがにそんな無茶

はしなくなったが、千金をつんでも、京から妻を迎える風習は残ったのだ。そして、その何代目かの姫として、彼女の姉である美和が、迎えられたのだよ』

河北明は、だまって新造の話に耳をかたむけていた。その眼は異様に血走っている。

『ところで、花嫁も一人盗んできたわけではない。四季に形どって四人づゝ運んだのだ。』

その中から、当主が一人を選び出す。他の三人は夫々殺されたのだよ。一人は霧ヶ峯明神に、一人は、部落入口の足摺橋という釣橋にさらされ、一人は略奪隊の隊長にわたされ、三日の後に三人は一つ所に集められ、そして殺されたのだよ』

『ふむ、では、その一つ所というのが、美女平なのだな』

河北助教授は昂奮した口ぶりであった。

『そうだ。美女平とは悲しい名だよ』

『すると、彼女の姉の死も、尋常でないと考えられるか？』

『妻の話だと、嫁いでいって一年目に死んだという。くわしいことはしらべてみないと分らぬが、以上のような伝説のある所だ。どんな化物が住んでるかしたのではない。とにかく、何かの秘密があるにらんでいいだ

ろう。妹は、その秘密の一端をつかんだにちがいない。決して、彼女が美女平で死体となつたのも偶然とは考えられないよ。しかし、これは、自殺、他殺、事故死と判定を下す前の予備知識みたいなものだがね』

『いや、有難う。これは驚いたよ、君は学生時代、同人雑誌をやったり、歴史小説をいじくったり、伝説あさりや史蹟探訪などで、よく、とびまわって、あまり学校に顔をみせなかったが、よくも調べたものだねえ……』

本当におどろいたという風な、それでいて急に安堵の色をみせた河北は、新造の肩を叩いて笑った。そしていった。

『十日もすれば、この事件の外面上のかたはつく。それまで、ぼくも、ちとあれこれ調べておこう。所で、一度、その国盛館へ案内してくれないか。これは、充分調べてみる価値があるよ。筒井君、一つ、ぼくの教え子のために、骨を折ってくれ給え。その宿命と、万一の秘密をさぐりだして、真相をしらべてみようではないか』

新造は、承諾した。そして、ぼくの妻も一しょうにつれていくことを条件に、といって、明るく笑うのだった。

『ところで、河北君、佐和子さんは、君に何

か、書物のことをきかなかったかい』

『書物って、古典の文献のことか』

『うん、そんなものだ』

『さっきもいった通り、ぼくは、彼女の顔さえ、はっきり覚えていないのだよ。知らないねえ。何か文献に関係あるのかい』

文献ならば、自信があるといった学者らしい態度で河北がたたみかけてきた。

『いや、国盛秘文伝というんだがね』

『なに、国盛秘文伝、それは偽作目録にのってるやつか。しかし、本文はないというのだな。なんだ、今、君が、話してたのは、そいつかい』

河北は少しがっかりした様子であった。

『うん、本文はないことにはなっているのだが、実在はするのだ。伝説によれば、その内容がつまり、秘密なのだ。国盛館の当主しか知らないのだ。……内容も推察程度の諸説紛々であてにならぬのだが、ぼくは、佐和子さんが、その真実らしきものを、何かによって知ったものだと思うよ。それが姉さんの秘密であり、又、自分の運命ともなったのだ』

三

河北助教授の調べによって、祖父江姉妹に

ついで大体のことが判明した。

祖父江家は京都でも由緒ある家柄で、その先は遠く関白忠平にあるといわれ、江戸期に禁裏御用商人として代々その業をつぐしにせ、だったが、明治になって家運ますますかたむき、家は縮小するばかりで、美和の父の代には、もう、普通の呉服店でも、小さい方になってた。美和は幼少の頃から美人のほまれ高かったが、女学生になると全く京美人の典型みたいな娘になった。母が在学中に死ぬと、父は卒業をまちなかたようにして、二十一才の春、四国へ嫁にやった。大阪の間屋というブローカーみたいな男が仲人だったが、父は金だけもらって、送りもしなかった。当時女学生の三年だった佐和も病氣でいて、沈んだ姉を病床で送りだしたきりだった。西陣から叔母が一人付添っていったが、大阪で引返している。美和からの便りは一度あったきりで、その次にきたのは死亡通知だったという。父は去年亡くなって、佐和は西陣の小母の家に引取られ、アルバイトしながら、S大へ通っている。西陣の叔母は佐和が死んだことを知ると、『やっぱし、ねえちゃんがわすれられへなんだとすな』とポツンといって、涙をさめぐとこぼすばかりで、何もいわなか

ったとのことである。

一方、佐和の友人たちの方からの情報によると、佐和は明朗な性格で、そんな暗いかげはなく、自分の過去など少しも語っていないが、二ヶ月程まえから、時々、『ひよっとしたら……』とあらぬことを口走るようになって皆をとまどわせることがあった。

近所や美和の友人たちの記憶は、ただ美和が、友禅のすごい極上の衣装をきて、その花嫁姿の目のさめるような美しさに幻惑され、自動車を連ねて大阪方面へむかったというだけのまことに頼りない始末で、後の自動車にはどんな男がのっていたかも覚えてはいないのである。新造の妻、正子もそれ以上のものではない。まるでお姫様だ。京人形のように、だったと、羨ましくくりかえすばかりで、雲取村が四国のどのあたりか、考えてもみないのだ。美和が一年目に死んだという話をきくと『やっぱり美人薄命ね』なんて云ってその時、一寸ないて感傷的になった位である。今となつては、西陣の叔母だけが唯一の証人であるが、その叔母から秘密をかぎだすのは容易ではない。第一、どこにも犯罪は成立していないのだ。たゞ、祖父江姉妹は不幸であり、同情すべき運命であるというだけなの

だから。

新造も河北明も、今更、古めかしい因縁話を誰かれにもちだして、笑われるようなことは出来なかった。

それから、数日たったある日のこと、リーダーの東弘子から新造に電話があった。新造は、弘子と喫茶店で逢った。

『お呼び立てしてすみません。一寸、おちえ拝借致したいので、それに、お耳にいれておいた方がいいと河北先生もおっしゃるものですから……』

弘子は小麦色のみるからに健康的な体をしてた。それでも、リーダーとしての責任に悩みぬいたのであろう、心なしか元気がなさそうである。彼女は、だまって、一枚の紙切を新造に手渡しして、じっと考えこんでいる。

『旅衣悲しきかなや照る月の心に通う寺の鐘聞く』

『五月雨の瑠璃観音にクチナシ子の蕾をあわれわが祈るかな』みわ、

二首の短歌である。美和の作ったものであろうが、字は走りがきでよみにくい。新造は二、三度、口の中でくりかえして、よんでいる。

『あの、この歌に、何かお心あたりはないで

しょうか』

弘子はまっすぐに新造をみていった。

『さて、別に何の変てつもない、つまらない歌のようすけどな。これは悪口になっちゃまって、失礼々々。して、お話の方は……』

『実は、その紙切の歌は、佐和さんの上衣のポケットに入っていたものなんです。お骨にする時、私が、抜きとりました……』

『ふーむ、で、河北君は何か、この歌に重大な見みを発見したとでもいうのかね』

『いいえ、何ともおとしやらず、一寸顔色をおかえになっただけでした』

『それで、ばくにみせろといったんですなあ。

うん。さては、この歌に、ヒントがあるな。

たびごろも、かなしきかなや、てるつきの、

ところにかよう、てらのかねきく、さみだれの、

るりかんのんに、くちなしの、つばみを

あわれ、わがいのるかな。みわ。とな。あ

っ、そうだ。そうだったか』

新造は急いで立ち上った。弘子はびっくりしてその方を凝視した。

四

数カ月後である。新造と正子は居間で向いあっていた。

『では、これ、事件にはならないの』

『ならないね。姉はいじめられて、殺されたも同じ、それはいえても、殺人事件にはならないね。まして、妹の方は、姉を生きていると思ったのさ。そして、完全な事故死だ。河北君とぼくが、だいぶ八方とびまわって、調べた結果こうなんだよ』

新造もいかにも残念という顔付である。

『で、美和さんが、いきてたと思ったのは』

『あの、二首の歌だよ。たびごろもの句、と、さみだれの句なんだよ』

『あの歌が、どうなんでしょう』

『あれは折句なんだ。ホラ、唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ。それで、五七五七七の各句の上の文字をとれば、かきつはたとなる伊勢物語の伝なのだ』

『すると、たびごろものた、かなしきかなやのか、てる月のて、ところに通うのこ、てらの鐘聞くので、たかてこて、あなた、たかてこてって……』

『だれでも、いきなりたかてこてといってもぴんとはくまいが、次の句をみてごらん』

『さみだれのさ。るりかんのんにのる。くちなしのく。つばみをあわれのつ。わが祈るか

なのわ。まあ、さるくつわじゃないの』

『そうだ、つまり、美和さんは、高手小手に縛られて猿轡をはめられていたことになるのだね』

『まあ、？』

正子は急に胸をときめかして、耳まで紅らめた。

『それを妹さんは現在と考えたのだ。どこかに捕われていると』

『で、公達岳から雲取村へ向ったのは？』

『例の国盛秘文伝さ。あのいい伝えによると、どくろ平つまり川下から入村してきたものは他国者として殺すが、公達岳から来た女だけは公達の局として助けるべしとある。もっとも、百年に一ぺんも公達岳を越えていった女があるとは思われないがね。今でも、雲取では川下から入るより、川上から、山越で入る方が、好意をもたれるという風習があるよ』

新造はポケットからノートをとりだして正子にわたしながらいった。

『これは河北君の努力で手に入れたものうつしだよ。これをよんで、お前の同窓、美和さんの、嘆息をいのってあげるんだね。あんな、心根のやさしい女性が、現代にいるなん

て、信じられないね。それに、古風な文語体でつづるなんて。ま、これよめよ。これをよめば、国盛秘文伝の恐ろしさが、わかるだろう。わかったら、少しは夫を大切にするんだね』

正子はその夜、異様な心ときめきをおぼえて、どうしてもねむれなかった。奇怪にして信ずべからざる世にも不思議な祖父江美和の手記をよんだからである。

われ、病にふしてひとつきになりぬ。やがて、みまかれば、われもまた、とりべ山ならぬきむだちだけの夜半の煙となりはてむ。

思へば、はかなき人生よな。無情なる宿世なるかな。われはわれならぬ身、国盛館の北の方なる。わづかひととせあまり、くるしきことどもしるして思い出のよすがとせむ。和歌にもいえり。「亡くてぞ人は」とか。

やよひも末の半ばにや。

われ、みしらぬ男どもに、つれられ、初めて、けふとき雲取に入りぬ。うら若きわが身に加へられし、はづかしめのかずかずは、それより始まりき。

まづ、雲取の川のほとりにて、わが花嫁の衣装はすべてはぎとられぬ。あまりのことに驚き、声たてぬれど、むなしき山々のこだまのみかへりて、男どもの荒くれき力のまへにいかむともなしがたく、ついに、荒縄もて、うしろ手にはくくり上げられぬ。肌いたく、

たへがたし。口には、花むこどのの、てららにて、きびしくさるぐつわされぬ。さて、米俵の中にいれられぬ。かわるがわる男はかつき山道をよじりぬ。道幾まがり、滝もいくつかよじりぬ。丸木橋をもいくつかわたりて、どくろ平てふところに来りぬ。昔の刑場のあとなりしとぞ。そのかたわらなる夜泣の滝にて、わが肌は清められぬ。冷き寒気におぞけだち、失神せむとせしなり。あらはなる肌はかくすものなく、このたびは、わが花嫁の衣



装の赤きしごきにて、かいなをそびらにねじてくくられぬ。やがて足摺橋^{あしずり}てふつり橋に吊されぬ。われは思わず足をすりて、みもだえぬ。男らは、河原にてわれを見上げて、何やら語りあひしが、一人の男は部落へ報告に走りぬ。かれが与吉也。

やがて、ほらの音、きこゆ。

二とき程にやあらむ。大きな木箱かつぎて、与吉他十人あまりの男あらわれぬ。

ここにて、はじめてわれは許されぬ。許されぬとて、もとより、何の罪とがもなきわが身なれども、これなむ、雲取の当主の嫁取の奇風なれば、いはむすべなし。

みめ美しき娘二人あり。すがとちかといひし。『お姫さま、おむかへにありがとうございました』二人は、われのまえにひざまずきていひぬ。京よりもてきたる花嫁衣装に改めしわれは、はじめて生きかへりぬる心持しぬ。

すがとちかの化粧にて、われは美しくかざられぬ。しかして、紫の布もてわが口をおほいしはすがにて、銀の鎖にてわが胸をからめしはちかなり。われは『京人形』として国盛館に献上されるべく、木箱の中に、納められぬ。男どもの手にてかつがれぬ。

『京人形のお通りじゃ』

『京人形のお通りじゃ』

鈴をふる美わしき声にて、すがとちかは交互によばわりて先導しぬ。

暗き箱の中に、ゆられつゝ、われは冷たき涙ながれぬ。すでに生きるのぞみを失ひたるらむ。

国盛館は二百人ばかりの老若男女にてごつたがへしぬ。

広き式場の間にて、われは皆々に披露されたり。その夜のことに、書くに忍びざればさておきぬ。

わが、縄の解かれしは部落まわりのすみたる三日あとなり。山の中腹に点綴する家々引廻されしは死ぬ程の苦しみなりき。

七日目。わが名は「なな」とつけられぬ。すがにきけば、「国盛館のしきたりにて、十七日は見習の花嫁の意なり」とて、うち笑ひぬ。

同じき日、霧ヶ峯明神に詣で、罪はらいの儀を受く。むくつけき老婆、わが、肌をあますことなくでまわしつゝ、呪文をばとなえたり。ふくだみたる声、おそろしげにて、われふるへたる。老婆のいわく、われは前世にて人をあやめたれば、神の怒りにふれむ。これより三日がうち、霧ヶ峯明神の狂獅子にさ

らし、参拜者の答を受くべきなりと。

館様は、悪業の報いなければせむ方もなし、さらば、当主みずから罪はらい致し候はむとて、われを引立て、緋じりめんの長襦袢一枚にむきて、ひしひしとたかてこてにぞいましめける。鳥居のかたわらに狂獅子の石像あり。その背にまたがられしわれは、泣きて、ゆるしを乞へども許されず、答の雨を受けて氣を失いぬ。気づけば夜にて、われはむしろの上に臥しいたり。からだじゅうはげしくいたみぬ。いたみはくくられし縄の肌にくい入るもあらむ。

つとめて、(翌朝の古語)われは、むしろの上に座して、参詣者の来るを待ちぬ。人來らば、『お願いでございます。私は京よりまいりし、な、と申す者でござりまする。只今、明神様のお怒りにふれし身なれば、罪問いのお仕置にかうして、あなた様の来られまするを、お待ち申し上げておりました。何卒、お慈悲をもちまして罪深きな、の身体より、あくまをおいだして下さいませ』と、館様より賜わりし答を、口にて拾いあげてさしいだし、ひざまづきては、かの人のお答を受けぬ。かの人、あちらへと申さば、われはあちらに向き、伏せとのたまはば、われはふせる。の

れと仰せば獅子にまたぎてうたれぬ。うつ数は一人七つなり。うちし人は一日七人にて都合四十九打たれしなり。一度に二人来るはなく、順番は館にて待ちてのほり来りしものならむ。われは七たび、口上をのべ、七たび答を口にて拾いぬ。その日は男のみにて、年長者よりのほりきてわれをうちたまうとおほゆ。

三日目は、すが来りて、食を与へぬ。衣服改めとて、白むくの装束に衣更へいたし、罪人の如く本縄にかけられぬ。今日打ちしは女ばかりにて七人、一人三つあてなり。いづれも、腰より下を打ちてかへりたまひぬ。

三日の務めようやく果てぬれば、館にて、妻となりて朝に夕に館様の身のまわりの世話にあけくれぬ。館様はあらあらしき力もて、われを遇したまへぬ。いとしき妻よ、うるわしのをみなよと、わが肩に、わがくろかみにはげしき息のかゝるをわれは、よろこびともかなしみともつかぬまなざしにてみあげたりき。幾月かすぎて、早、盆にもなりぬ。

平家の馬場の、人形おとしの日とはなりぬ。部落の唯一つのたのしびなり。美しき女性七人をえらびて、弓矢もて射落すあそびにて、十七才より二十五才までの女性を、娘四人、なな三人のわりにて、これを、馬場のす

みに並べて、はりつけに致し、やぶさめとかやのようりようにて、馬をとばし、弓にてねらいうち、仕とめたる男は、その女性を一夜妻としてもらいうけるといふ、中世的なるもよほしなり。男は四十九人に定められたるは、一人の女に七人の男の相手がほどよきとかやの、いにしへのふるごととおほへたり。

えらばれし女性は、ななの組とて、われを筆頭に、さぎり、ちよの、の三たり、娘組とてすが、ちか、はる、たみの四たりなりき。われのみ禁色とて紫の着物のうるわしきを賜わる。さぎり、ちよの、は白色、娘たちは黄八丈にて、夫々男どもの手にてはりつけ柱に十字にくくりつけられぬ。左から、はる、さぎり、すが、われ、ちか、ちよの、たみの順に並べられたる。

『ななの局様。いたくありませぬ故に、めをつむつてはなりませぬ。まっすぐみておれば矢など、あたりませぬ』

ちかは、われにむかひて、はげましてくれも、はずかしきにて、われはうつむきぬ。

若者どもは気色ばみ、いきりたちて、もろ矢(二本)をたばさみて馬をとばし来りて、はっし、はっしと、放ちてゆきぬ。多くの矢は、われとちか、われとすがとの間にむなし

く落ちたるものととし。一矢は、われの左の乳のあたりに激突して下に落ちぬ。たんぼ矢なればなり。そは与吉の放ちし矢なり。右の乳にも一本打たれたり。それも与吉にて、かれは二本の矢もて、瞬時にわれを落したるなり。一ときばかりにて、きょうぎは終りぬ。はるは腹に一本、さぎりは左の股に一本、すがは胸と右腕に、あはせて二本、われは二本、ちかは首と右の太ももに、二本、ちよのも二本、たみは肩先に一本、他はすべて流れ矢なり。

その夜、われは、与吉を迎へいれぬ。このこと、かくにはづかし。ただ、からだのあちこちに、与吉のかみし歯形いくつかのこりぬ。このふしぎなる村の行事の秘密は、この村をひらきはじめし国盛様と申さるる平家の公達のなされたまひしと承わる。

平家、都を落ちしみぎり、国盛様には、深くかたらいたる公達の姫君ありき。必ずや生きて妻にむかえむとのたまひて、一の谷に、屋島に、西海のもくづと消へはつることもせで、ここに落ちのびたまひしかども、かの京の姫が御事、忘れがたく思はれ給ひなむ、さめてゆめ、起きてはうつつの夢枕、人をやりて消息尋ねしめたまひしに、かの姫君は、他

の男のもとへ走りしあとかや。遂におんみずから京へしのび上り給ひ、姫をとらえて、のがれ来りて、復讐の鬼と化し給ひたるとなむ。そのこと、国盛秘文伝なる御文にしたため代々の秘伝となされ候ひぬ。そのいかなる文の内容かは知る由もなく候へども、われには、そのこと、そぞろ身にしてみてもわるる。

されば、わが、くるしめ、はづかしめられては、かの姫君のかよはき御身に加えられたる苛責にこそは候はめ。げにや、うたてき女の身かな。はかなきは宿世なるかな。

わが身、夜々に細り、遂に病を得ぬ。助からぬ命なり。われ死なば、わが棺は、かの、われがはじめてここに運ばれし京人形の木箱

こそそれなれ。或はわれ、生きながら、かの箱に入れられ、火にあぶらるるやも知らず。むしろ、それをねがふなり。幸少なき星の下に生まれし女の、ものぐるほしきくりごども、とどめおきて、何にかはせむ。今はたれをも恨みず。身の不運のみぞなきはべる。

死なば、せめて、

あるほどの花投げ入れよ棺の中（漱石）

五

正子は多少昂奮していった。

『あなた、あの美和さんの手記、ほんとうでしうか。信じられないことですわ』

『信じる、信じないは別として、今度の事件

の種明しにはなったかい』

新造はわらいながらいった。

『ええ、美和さんの文章には感心しましたわ。女心のあわれさが、にじんでいますわ』

『そうかい。お前も、あんなにいいめられて

も、いいのかね』

『ええ、少々なら……』

かくて、新造は新妻の正子に、新婚二カ年にして、縄をかけるに成功したのである。

だが、彼は、決して、美和の手記が、彼自身の創作であることは永遠の秘密にしておこうと思った。

——おわり——

—— 懸賞 ——

原稿募集

告白、手記、体験

<賞金>

優作	一篇に付	一万円
秀作	同	五千元
佳作	同	二千元

(若干篇)

- 一、必ず未発表の自作であること
- 一、枚数に制限はありません。締切は別に定めず、入選作は順次最近号誌上に掲載します。

アイデア募集

本誌の口絵（写真を含めて）並に代理部の分譲写真、或は「画帖」「写真帖」などのアイデアを広く皆さまから募集いたします。内容はどんなものでも結構です。採用の分には、原画、若くは引伸写真、画帖、アルバムを贈呈の外、優秀なるプランは本誌に掲載の上、編集用のフォトを贈呈いたします。出来るだけ詳細なる説明、及び、出来れば略面の添布をお願いします。



○ KKが、その地味な表紙の新刊を書店の片隅へ、ささやかに、しよんぼりと姿を現わしたとき、私は一種の哀れと悲しさの混ったものを覚える。

○ KKよ、お前はなぜ、かくまで世の迫害と指弾とを受けねばならないのか。それは、お前の生れついた宿命なのか、と。

○ 私はやるかたない憤懣と、諦めきれない口惜しさをくすばらせながら、その可憐な雑誌を手にしてそそくさと外へ出る。

○ 外は曇り空で、今にも降り出しそうな空模様だった。私の心の中も曇り空だったが、懐のKKが、それを読んだときの歡喜で胸いっ

ばいに明るさと温かさをふりまいていた。

○ KKよ、お前はなぜ、かくまで魅力的なのか。世の如何なる美女美人よりも蠱惑的に私に迫ってくる。お前こそ、唯一の私の恋人なのだ。お前をけなし、お前を迫害する者は私の敵だ。どうか、お願いだ。KKを悪く言わないでくれ。私は理屈は抜きにして、そう願っていた。KKこそは、私の生命線なのだから。

○ 「KKよ、貴族的たれ」と十月号の「奇ク太平楽」で榊一氏が言っ

た。全く良き言かな。私も双手を挙げて同感と叫びたい。そして、言葉を替えて「KKよ、泥中の蓮たれ」と提唱したい。泥の中からあの美しい蓮の花が開くのだ。

○ 如何に汚濁に満ち満ちた世の中にあっても、KKだけは泥中の蓮花の花のように美しく咲き続けてほしい。友達であるべて読者が、お互いに「エロ雑誌であるとか、ないとか」角をつき合わせている時ではない筈だ。ましてや、言葉の端々の挙足とりなんか、枝葉末節だ。つまらぬことに拘泥せず、おおらかな気持で、温かくKKを見守ってゆこうではないか。

○ 人々がなんと言おうと、KKの足跡は偉大である。その編集態度の真摯さは、歴史がすべてを語ってくれるだろう。十五年物のウイスキーと速醸合成酒とは、その差は誰にでも一見して分る筈だ。只私は、現在のKKの充実を願う

将来の発展を祈るのみだ。

○ 読者通信の細かい活字をたんねんに読むのは私の楽しみの一つである。何度繰りかえし読んでも読み飽きない。楽道家あり、あけっぱなしの解放主義あり、すべてを鎖した秘密主義あり、世はまさにさまざま。読者も又さまざまなりと思わしむる。しかし、共通した所は一樣に孤独をかこち、同傾向の友を求めんとしていることがよくわかる。

○ 私は奇ク所載の告白を読むときそこに人間性の不可思議さと、不可解さとを見る。しかし、それでいて、一樣に或る種の温かい共通点を発見することが出来る。会わずとも語らずとも、読者は共に心と心の通いあう。無二の親友なのだ。

○ 一時、同志的結合という言葉がよくいわれ、現在はグループの時代と言われる。兄弟垣にせめぐ、といった愚を敢てせず、親しき者同志、せめて誌上でなりとも、楽しく交歓してはどうだろう。「奇ク私見」論争に寄せて、愚見乱筆斯くの如し。

泥中の蓮たれ

いぬい・ときお

「灸責フォト思い就くまま」

水 木 清



元来灸責フォトは、只お灸を据えている、といったものでは深趣も乏しく、責フォトとしても価値も全く半減するものです。これは殊更灸責のみに限ったものでなくあらゆる責フォトについてもいえることなのですが、それは「顔の表情」が責フォト鑑賞上、何といつてもこれが一番のキーポイントになるものと申せましょう。たと

えば、緊縛フォトに致しましてもギリギリとロープがふくよかな柔い肌を喰込んでむっちりとした緊縛感が充分に現れているフォトにしても、「無表情」では、責フォトとして全く価値無いものであって、結局その責からくる苦痛、苦惱を耐え入る「表情」があつてこそ、そこに「責フォト」としての価値が成り立つ訳です。

10月号で、梨花悠紀子嬢の「灸責を耐える表情」と「もぐさと縛体」は、数少ない灸責フォトの中でも、悠紀子嬢の巧な演技と相まって、素晴らしいムードある灸責フォトと成つて居ります。種々なる責フォトに、「表情」を採り入れた点においても、以前の責フォトからまさに一歩前進したといえましょう。

灸責フォトの場合、どうしてもバックは暗くしなくては効果的でないと思ひます。プスプスとくゆらいで立ち昇る艾の煙を、捉えなくては、灸責フォトとしては何れも成りません。硫黄、蠟の線香の粉末等を入れて、艾で包んだものででも、成るべく煙を上げてキヤッチ出来るような効果を狙つて戴きたいものです。又、肌へ焼き

付く艾の下層部は、墨汁で（マジクインクでもよいでしょう）黒く染め上げてあるのはよいと思ひます。それからやはり、艾の大きさは、灸責フォトの意味からいって也大灸でなくてはなりません。双の乳房、乳頭、お臍の中、その両横、下腹、大腿と、一度に据える凄惨な灸責、あるいは、背中、腰お尻へ——と、ポツポツと幾条もの白煙を上げて、それに耐え入りなが

ら妖しく身もだえする様を——美貌な悠紀子さんにでも迫力ある灸責フォトとして演出して戴きますれば、マニアとしてまさに欣喜雀躍の至りと存じて居ります。

何も灸責が単独と成らずとも、すべて縛りという事、それ事態が根本的には、責の主体として形成している訳ですから、あらゆる型の緊縛と灸責のミックスは、縛りマニアの方々にも充分応えられ

るものと想ひます。現在までの分譲フォトとしては確か未だ杉美美子嬢、春日ルミ嬢と伊吹真佐子嬢の、この二組の灸責フォトのみしか出ていないと思ひます。大分以前に出た、この中の一組の春日ルミ嬢と伊吹真佐子嬢の「灸責地獄」は、お線香の代りにローソクを使用して居ります

が、やはりお灸の艾にはお線香で点火するのではなくては感じも出ず、その個処だけ明るくなり、バックは黒にも拘らずお線香と艾の煙もパツとせず、一寸損をしている戴けないフォトです。尚モデルさんが、熱い危険を感じてしたならば、艾の三分の一位を注射器か目薬の空瓶等で、しめらせておけば大体下層部まで行かないで火は消えてしまひます。

絵画と写真の

アイデア

馬乗りシリーズ

春日寿美男

一、裾の短かい紺ガスリの野良着（膝がしらかない短いもの）の農家のグラマー娘が、村の悪童又は自家の作男の少年を納屋隅又は奥座敷に引ずり込み、馬乗りに跨って逞ましい太腿で押え込んでいるところ。

二、前記服装の娘が、悪戯の甚だしい飼犬の背に跨って両腿で締めつけて折檻しているところ。

三、前記服装の娘が、体軀の小柄な道産子馬又は対馬馬に跨って手綱と太腿で調教しているところ。

四、バスタオル一枚で豊満な肉体を掩った夫人が、浴室で洗毛をいやがる愛犬の背に馬乗りにになって押さえつけ、ブラシを掛けていところ。

五、大名の奥方が何か粗相をした前髪立ちのお小姓の胸の上に跨がり、折れ弓の片方を自分の膝下に敷き、片方を手に持ってお小姓の首を弓で圧しながら、折檻してい

連作「少女」

牧村 興次

“お勉強室で”

兄「おとなしく勉強しているかい、お前は、一寸目を離すとすぐ遊びに出てしまうから逃げないように、椅子へ縛りつけといてやるからナ」

妹「あーら、兄さん。そんなことしたら、本の頁、めくれやしないじゃないの。悪戯はよしてヨ」



るところ。

六、水着又はスリッパ姿の二人の女子大生が、紅顔の二人の少年の背に各々跨って乗馬し、室内レースを愉んでいるところ。

七、女柔道家（中年の婦人がよい又は柔道家の令嬢でもよい）が少年弟子の胸に跨がり少年の両手を畳の上に押さえつけ、股で少年の胸を圧しつける様にして締めつけていところ。

八、女主人が犬又は猫に跨がり太股で締めつけて暴れない様に押さ

つけていじめながら奇クを読み耽

けているところ。（捲れ上った着物の前裾の間から、そして豊満な太腿の間に挟まれた犬が苦しうな顔を出している。）「苦しくても私が雑誌を読んでもうまで我慢おし」と言っている女主人。

九、華やかな舞台衣裳をつけたサカスの親方のマダム（或は花形娘でもよい）が天幕張りの楽屋の奥で、出番の間の一刻を芸の覚えられない小熊に跨ってムチ打ちながら、太腿で締めつけて折檻してい

いるところ。

十、深夜、婦警さんの家とは知らずにノビに入った少年が、運悪く婦警さんに捕まり、逞ましいお尻の下に組み敷かれ、説教を受けていところ。

十一、深夜、木曾義仲の寝所を窺った敵の間諜が、不覚にも巴御前に発見されて十人力と言われる巴御前に組み伏せられ、胸倉をとられ短刀をつきつけられ、間謀の主人が誰であるかを自白させられていところ。



ネルのお腰愛好家

山 本 早 苗

(告白) 私の好きなネル

これは私がネル「特に綿ネル」に異常な執着を持っており、それが長じるに従い女の和服の下着であるお腰、それにネル製の心が引かれていった過程を述べたものです。私は奇クを読んだ時、私と同じ様な方がいるを知りました。早速本文に入りましょう。

私は幼児の頃よりネルに愛着を感じていたようです。私が五、六才の時です。記憶は確かではありませんが、親類の女の人が来た時の事です。その時は冬でしたのでその女の人のお腰をしてい

たのでしよう。私がそれを欲しがって母をこまらせたそうです。小学校へ上ってから、あまりネルの事は考えなくなりました。しかし五年生の時、大病をした時です。その病もなおり家でブラブラしていた頃、偶然に押入れの行李の中にある桃色のネルを見つけたのです。思わず、それを手に取りもてあそびました。この時より又私のネルに対する興味が起ったのです。中学に行くようになってきた時、その行く途中で住宅地のそばを通るのですが、そこにはされ

ているネルを見るのがたのしみでした。私が高等二年の時です。私は小使をためて呉服屋にネルを買いにいったのです。店の女の人が出てきて「何に使うのですか」とたずねられた時、どきまぎして返事に困っていると「お腰になさるのですか」といったので「ええ」といってしまったのです。この時私はネルが女の人の和服の下着である腰巻に用いられる事を知ったのです。それから注意して和服の女の人の裾を見てみると風が吹いた時など、確かにネルが見られました。この時を契機として、綿ネル製お腰に愛着を感じはじめました。ここで私の現在考えているネルについて述べて見ましょう。

ネルには綿と純毛とがあります。純毛のは本ネルとして売られていますが、私が手にした所では、ごわごわしてよい手ざわりではありませんでした。

綿ネルのほうですが、これは全般にやわらかく、きもちよいです。しかし私は好みのネル地を手するため、大阪の主な呉服店はまわりましたが、素人には売ってくれませんでした。私は毛の多く生えた非常にやわらかいのを好みます。

話を元にもどしてお腰の愛好者となつてからの事を述べましょう。私がネルのお腰の愛好者となつては前述の事にもありますが、これから述べる事が大事な動機の一つです。

それは私のとなりの家の娘さんなんです。今はもう、その家の人にも引こしておりませんが、私が十五才の頃です。となりの家の娘さんばんをたのまれて行った時の事です。その娘さんはその頃二十三才ぐらいだったと思います。私はその家であるすばんをしている時、そのフロ場にある桃色のネルのお腰を見つけたのです。私はそれを身体にまきつけました。そうしてあそんでいる所へ、その娘さんが帰ってきたのです。私はそれを見かねて、さうして見つかってしまいました。しかし小百合さん(その娘さんの名です)は少しもおこらないばかりでなく、それを私にくれたのです。しかし私はその隠匿場所に困りすててしまったのです。今考えると残念でなりません。このようにして私のネルのお腰に対する愛着はつづいて行きました。しかし私は他のお腰フュチシストのようにどんなお腰にでも愛着は感じないのです。私は桃色



赤色の毛の多いやらかいネルのお腰にしか興味を感じません。
現在私は自分で桃色のネルを買ってきてお腰を仕立て夜ねる時、それをまいてねています。私はネルのお腰をするときは、素はだの

ポエム

「倒錯のための倒錯行為」

ブラウスに魅かれると、すぐに袖口のボタンに魅惑を感じてしまい、ボタンを眺めていると靴のヒモを思い出し、ハイヒールのカガトを感じ、ハイヒールのカガトをとって、みそ汁のダ

上にじかにまきます。この時の感触は何ともいわれません。色々と取りともない事を書きましたが、最後に編集部私と同じような人をしてうかいしてもらいたい。綿ネル妄想の作者をお知らせ下さい

シに使用した。
或る時にはネグリジェをにつめてソースをかけてホークでちぎりながら、かみしめた経験があった。そして女房（マゾヒスト）に向って笑いかけると女房はよだれをたらしながら、私のネグリジェでどうしてやってくれなかったの？と云ったりするのだ。
(U・H生)



写真真V

私の切腹

須賀綾女

我れと我が腹部に刃を擬して腹を切るということは、なんと哀れで晴々しいことだろう。露出癖と自虐癖とがミックスされて、ここに日本古来伝統の武士道の華と謳われる切腹という行為に昇華されたのだろうか。
しかし、私は、そんなむずかしい理屈は一向にわからないながらともかくにも「切腹」という哀

美な仕草を愛する、これが私の儚ない自慰なのだろうか。若しそうだとすれば、この私が一層可哀そうである。

左脇腹から、きりきりと刃を回せば激痛が下腹から背筋に走り、生温かい血汐が肌をつたう。この一瞬、私は何に物も忘れて、全世界がうす暗くなるようなショックを受けるのだ。